普及啓発事業 「100年後に残る工芸のために」

京都w記録集

**5** 2世紀鷹峯フ フ ム 2015

鷹峯報告書Light.indb 1 16/03/29 14:24

―― 十一コーニョコニュー 音及啓発事業 一番及啓発事業

# 2015

# 京都wi記録集





#### 目次

#### 03 — 概要

#### イベント報告

- 06 ─ 01 第4回コレクション展 特集展示: 京都の工芸
  - 2 次世代工芸展
- 07 一 93 次世代工芸展審査結果発表十ギャラリートーク
- o8 94 よそおいの細密工芸
  - 「工芸とデザインー伝統の再解釈、手仕事の現在地一」十 「京都の伝統産業実習報告展」
- 10 6 私の好きな工芸
  - 97 京の食文化と工芸──私のこだわり
- 11 ─ 8 京のわざ、日本のわざ フィルムで見る京の伝統工芸
- 12 ― 9 こども未来工芸ワークショップーうるし編―
- KYOTO DESIGN+CRAFTS FAIR
- 13 ― 15 トークセッション「工芸とデザイン」
- 14 ― 11 次世代の食と工芸
  - 21 「正倉院宝物復元プロジェクト」 トークセッション
- 15 12 「正倉院宝物復元プロジェクト」作品展示&パネル展示
- 16 13 16 職人が案内する工房見学・体験ツアー
  - 14 絶滅危惧の素材と道具
- 18 19 上賀茂神社特別参拝
  - 工芸における琳派コードを読み解〈トークセッション in 上賀茂神社
- 19 17 つくるフォーラム公募説明会
- 20 18 特別講演会「愛しむ工藝 誂えの歴史」
  - **22** 鷹峯ナイト
- 21 23 メインシンポジウム「100年後に残る工芸のために」 発言・アンケート全記録
- 51 京都提言
- 52 ― 広報用ツール制作物・新聞および雑誌の掲載記事

#### 21世紀鷹峯フォーラム in 京都 概要

主催 「100年後に残る工芸のために」普及啓発実行委員会(京都国立近代美術館 京都国立博物館 京都市美術館 京都工芸繊維大学 京都精華大学 京都造形芸術大学 COJ)

オールジャパン工芸連携 京都・東京・金沢 実行委員会

助成 文化庁による平成27年度

「地域の核となる美術館・歴史博物館」支援事業

京都市・京都文化交流コンベンションビューローの助成金を活用しています。

後援 経済産業省/京都府/京都市/公益財団法人 国立京都国際会館/琳派

400年記念祭委員会/公益財団法人 京都文化交流コンベンションビューロー/一般社団法人 京都経済同友会/ NHK 京都放送局/朝日新聞社/

読売新聞社/京都新聞社

協力 関西電業社/京都信用金庫/ホテルサンバレー/八洋/ムラコシホール

ディングス/京都中ロータリークラブ

スタート 2015年10月7日(水)

メイン期間 2015年11月30日(水)~12月6日(日)

主な参加機関 京都国立近代美術館/京都国立博物館/京都市美術館/京都工芸繊維大

学/京都精華大学/京都造形芸術大学京都府京都文化博物館/細見美術館/清水三年坂美術館/京都市立芸術大学/京都美術工芸大学/上賀茂

神社/インパクトハブ京都 ほか

実行委員会会長 柳原正樹 [京都国立近代美術館 館長]

副会長 林田英樹 [一般社団法人ザ・クリエイション・オブ・ジャパン 代表理事]

委員 佐々木丞平 [京都国立博物館 館長]

潮江宏三 [京都市美術館 館長] 古山正雄 [京都工芸繊維大学 学長] 尾池和夫 [京都造形芸術大学 学長] 竹宮恵子 [京都精華大学 学長]

松原龍一 [京都国立近代美術館 学芸課長]

岩関禎子 [一般社団法人ザ・クリエイション・オブ・ジャパン 専務理事]

監事 川村耕太郎 [一般社団法人ザ・クリエイション・オブ・ジャパン 監事]

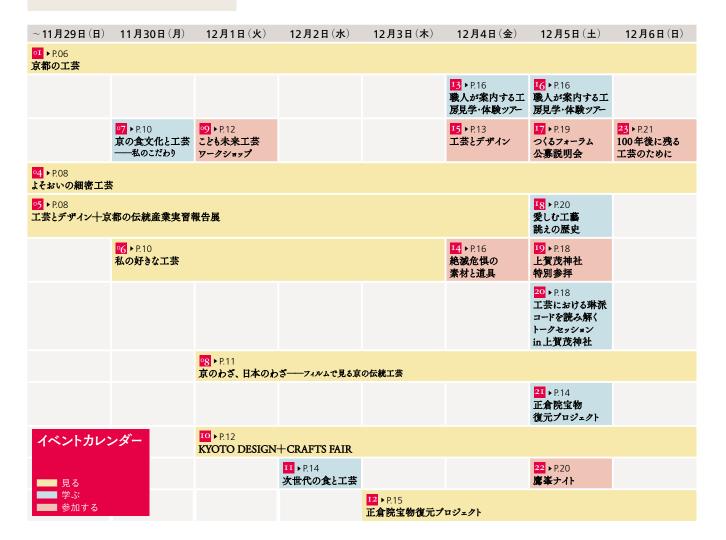
21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集 03

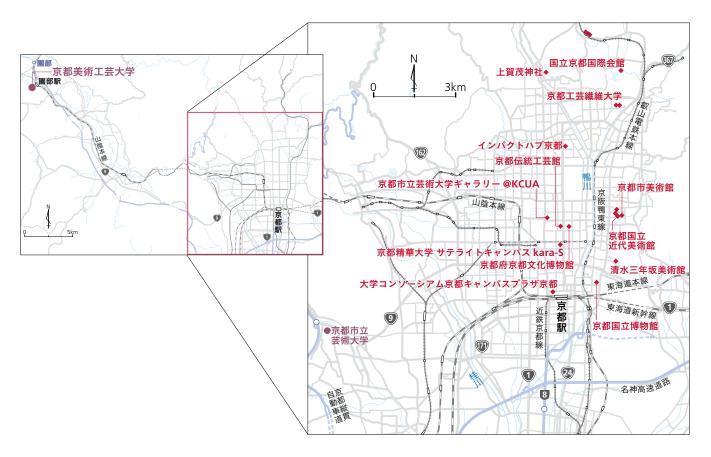
鷹峯報告書Light.indb 2-3 16/03/29 14:24

# 要約 • 1 2015年11月30日(月)から12月6日(日)を中心に、京都の主要な美術館・博物館、美術系大学、機関が連携し、文化庁の補助を受けて、「100年後に残る、工藝のために オール京都、工芸の祭典」を開催しました。

- 2 工芸にまつわる、作家・職人、素材提供者、使い手、つなぎ手、研究者、教育関係者、学生、一般の方たちが、展覧会、シンポジウム、ワークショップに集い、工芸の直面している問題を共有し、工芸を残す行為に参加する意識になることを目指す、画期的な活動になりました。
- 3 工芸を「見る」「学ぶ」「考える」、そして「体験する」さまざまなイベントを同時多発的に開催しましたが、企業などから「つくってほしいもの」「条件」を公開し、公募によってそれに応えられるつくり手を求めるプロジェクトや絶滅危惧の素材と道具を議論する会議は注目されました。
- 4 最終日に国立京都国際会館で開催したメインシンポジウムには、参加機関代表に加えて、青柳文化庁長官、京都府副知事、京都市副市長、参加機関以外の美術館・博物館長、大学長、工芸作家、画商、デパート、材料・道具商、報道などの関係者合計約250人が参加しました。
- 5 このシンポジウムでは、参加者から提出されたアンケートの回答を基 に、需要を喚起するための方策、海外での普及のための対策、新しい商 品開発への支援、素材と道具を残す方策、子どもたちへの工芸教育の充 実、連携・協力の重要性などを論議し、京都提言を取りまとめました。
- 6 今回の事業で明らかになってきた問題点とその対応策について、今後も 継続して論議し、具体的な対応策を進めていくことが重要であり、来年 度は、東京において第2回の会議を開催するための準備を進めており、 その次の年度には金沢での開催を予定しております。

#### イベント報告





21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

04

#### 第4回コレクション展 特集展示:

[主催] 京都国立近代美術館





**⊟時**: 10月7日(水)~12月6日(日) 会場: 京都国立近代美術館 4階コレク ション・ギャラリー

参加者数:14005名

毎年、京都国立近代美術館で開催され るコレクション展の工芸を扱ったコー ナー。このコーナーは、近代工芸の黎 明期から揺籃期、そして工芸が大きく 変貌を遂げた戦後において、さまざま なグループの結成や意欲的な活動を総 覧する、またとない機会となってい る。今回は、同館のコレクションから 現代工芸に焦点を当て、1998年と 2001年の「京都の工芸」展シリーズ に出品された陶芸、染織、漆芸など 24点を中心に、京都の近代工芸の多 様な動向を振り返った。一部、古い時 代の作品をいくつか展示したが、次に つながることを意識した作家の作品で 構成した。

#### 展示リスト

服部峻昇《耀貝飾箱「月の海」》1992年 村山明《欅拭漆大飾棚》2000年 服部峻昇《漆屛風「未来への旅立」》1973年 久保金平《赤日》1964年 伊砂利彦《嫁ぐ日(松模様)》1970年 稲垣稔次郎《もみじと秋草模様着物》1957年 森口邦彦《友禅訪問着「網代量模様」》1968年 北村武資《重ね襷文羅コート》1982年 中井貞次《西表島の月》1994年

小林正和《HANAOTO WR-99》1999 年 志村光広《コケットプレイ '78-2》1978年 麻田脩二《WORK-G》1971 年

鈴木治《泥像》1965年 山田光《塔》1964 年 八木一夫《作品》1974年頃 熊倉順吉《風人 '67》1967年 藤平伸《鳥たちの歌》1966 年 今井政之《泥彩蝦蛄壺》1964年 楠部彌弌《色絵梅花文花瓶》1937年 清水卯一《青瓷大鉢》1973年 富本憲吉《色絵金彩羊歯模様大飾壺》1960年 河井寬次郎《打薬扁壺》1962年 坪井明日香《歓楽の木の実》1973年

佐藤敏《無僧》1984年



写真はすべて会場風景

# ∞ 次世代工芸展

[主催] 同志社大学アートビジネス実践

日時:11月18日(水)~11月22日 (日) 会場:京都市美術館 別館1階 運営協力:株式会社AGホールディ ングズ 参加者数: 250名

同志社大学の学生がアートビジネス を通じて、芸術に素養を持ってもら うことを目的とした本展。今回は京 都、東京、金沢、広島の四局で代表 グループを形成し、若手アーティス トの展示を行い、審査員によって各 審査員賞及び大賞を選出した。35歳 以下の若手作家の作品を販売に直接 つなげるため、今後はオークション やギャラリーで販売していく予定で ある。10月31日には金沢21世紀 美術館で、地元の若手工芸作家の オークションも開催した。これから 工芸と社会を作家・作品を通して、 「ビジネスとしてどう持続可能にし ていくか」という一つのステップに なった。このような取り組みは、今 後も継続していく予定となっている。







#### 展示リスト

#### ● 京都

下村一真《すきまから》 黒沢理菜《重箱(伊万里焼ふう)》 《重箱(フランスふう)》 《重箱(更紗ふう)》 内海秒栄子《brilliant chalice》 森川彩夏《peel / drip》 矢野洋輔《とり》 キム・ジュンレ《丘に座って》 佐々木萌水《Togyable ! 醬油のか かった豆腐、あるいは魔鏡、》 小川智美《忘れてしまうこと》 三野惠子《犬の顔から現れた異形犬 像 2》

• 東京

池上太郎《未だ色にならぬ黒》 稲井つばさ《Dance》

加藤一初《surge line》 菊地俊治《duct》 古賀真弥《Warrior》 小林恵実子《●塾柿 ❷塾柘榴》 近藤亭平《四分——亀甲紋象嵌箱》 酒井望《未確認生物》 塩見亮介《虚栄の一角》 常信明子《ことぶき》 谷相友茄《lit》 橋本未帆《あっち、こっち?》 宮尾耕平《環》

豊海健太《無鏡-01-》 《無鏡--02--》 河野太郎《緑を歩く》 《陽の輪郭》

《沈み消える》

池田晃将《Neoplasia01》 《Neoplasia02》 《Neoplasia03》 金保洋《触彩の連想》 織田隼生《生態―りんご―》 藤本尚美《JAPAN》 山中彩《香りよいあなたへ》 • 広島

原田武《網紋器》 《網紋哭》 吉田真菜《大鬼蓮》 尾森舞《存在一意識一》 《存在—本質—》 柳井千恵子《桜細工》 《桜細工Ⅱ》 濱田佳苗《境界線の彼方》 小川恵《time&space G i》

«time&space vii»

# 03 次世代工芸展審査結果発表十ギャラリートーク

#### トークセッション/講演

[主催] 同志社大学アートビジネス実践

日時:11月21日(土) 会場:京都市美術館 別館1階 運営協力:株式会社AGホールディ ングズ 参加者数:50名

「次世代工芸展」の審査結果発表と ギャラリートークが開催され、出品 している若手工芸作家が技法や作品 の見所などを解説しながら、トーク セッションを行った。大賞は池田晃 将の《Neoplasia 01》と、塩見亮介 の《虚栄の一角》。池田晃将 《Neoplasia 01》は、ほぼ実物大の りんごの表面に、デジタルなメタ ファーを感じさせる数字を配した漆 芸の作品。塩見亮介の《虚栄の一 角》は銅、鉄、真鍮、皮、紐、紫檀 を使い、兜とドクロを組み合わせた 作品である。重厚なものから斬新な 切り口のポップな作風のものまで、 すぐれた技術のなかに若手作家の現 代的な感性がちりばめられた作品が 並んだ。



#### ● 審査員

建畠晢「前京都市立芸術大学学長、多摩美術大学学長] 秋元雄史[金沢 21 世紀美術館館長、東京藝術大学大学美術館館長] 小和田愛[AI KOWADA GAL-LERY ディレクター]



21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

鷹峯報告書Light.indb 6-7 16/03/29 14:24

# □4 よそおいの細密工芸 ■









日時: 11月21日(土)~2月14日(日) 会場:清水三年坂美術館

参加者数:3384名

泰平な江戸の世、身を飾り装うことを 楽しむ人が増えると、刀の拵や印籠、 髪飾りなどの装身具の意匠は、高度な 技を駆使して美的に洗練された。しか し明治になると、武家社会の崩壊と生 活様式の西洋化により、刀や印籠など の需要が激減し、多くの職人が失業す る。そうしたなか、懐中時計や帯留、 指輪などの新しい装身具の需要が生ま れ、優れた人材がこの市場に活路を求 めた。そこでは、江戸時代に培われた 技術や感性が発揮され、花鳥風月や遊 び心が表現された魅力的な作品が生み 出された。本展では、刀装具や印籠、 髪飾り、帯留、カフスなど江戸から明 治にかけてつくられた装身具など、 人々の装いに華をそえた名品を展示し

#### 展示リスト

無銘《鳳凰頭銀金具太刀拵無銘》 川原林秀國《変途鞘打刀拵》 今井永武/後藤光美《黒石目地秋草 秋虫図脇差拵》 正阿弥勝義《青貝微塵塗鞘合口拵》 石黒政美《猛禽図揃金具》 後藤一乗《海幸網干図揃金具》 無銘《七宝繋紋印籠》 《蝶尽し蒔絵印籠》印籠:梶川 根 付: 友嘉斎 緒締: 永楽 山本春正《玩具蒔絵印籠》 梶川《蝶牡丹蒔絵象嵌印籠》 芝山《恵比寿大里蒔絵象嵌鞘印籠》 《猩々蒔絵象嵌印籠》蒔絵: 梶川 金工:濱野政隋 海野美盛《桜に雉図鞘印籠》 無銘《雲龍鳳凰図印籠》 《更紗菖蒲革腰差煙草入》彫漆煙管 筒: 蔦図/石川確治 前金具: 伊勢 エビ 裏座:笹図/勝信 《相楽刺繡腰差煙草入》蒔絵煙管 筒:紅葉図/誠也 前金具:橋に紅 葉図 裏座:桜図 《菖蒲革腰差煙草入》蒔絵煙管筒: 女郎花図/池田泰直 前金旦:金龍 《金唐革腰差煙草入》蒔絵煙管筒: 蕨図/福島泰哉 前金具:花輪 《茶革腰差煙草入》蒔絵煙管筒:百 壽図/古直 前金旦:伊勢エビ 海野勝珉《歌仙図金具》 無銘《菖蒲革紙入》前金具:武将図 無銘《草花文染刺繡紙入》 無銘《小紋板鎖》

直政銘《三河万歳図板鎖》 無銘《鎖提物各種 水鳥、雀、鬼 灯. 勾玉》 小沢秀楽《美人図鏡蓋根付》 無銘《武蔵塚原試合図鏡蓋根付》

芝山《扇子散し饅頭根付》 無銘《菊蒔絵箱根付》 無銘《花菖蒲柳左根付》 江月《木彫梨に蜂根付》 白山松哉《羽寄蒔絵櫛. 笄》 一哉銘《波千鳥蒔絵櫛、笄》

永秀銘《風景蒔絵櫛、笄》 《山水蒔絵櫛、笄》 永幸銘《苣蒔絵櫛 笄》 晋斎銘《萩に鴨蒔絵櫛、簪》 月耕銘《団扇に廻り灯籠蒔絵櫛》 美雪銘《玩具蒔絵櫛》

> 玉成銘《正月玩具蒔絵櫛》 無銘《光琳秋草蒔絵櫛》 永政銘《葛蝙蝠蒔絵団扇形象牙簪》

無銘《柿に猿図簪》 無銘《金垢紋銀梅簪》 無銘《金花文玉簪》

無銘《菊図七宝簪》

無銘《竹図七宝簪》 無銘《紅葉賀べっ甲簪》 無銘《べっ甲花丸簪》 無銘《勾玉鏡図髷止》

鈴木美彦《庭の松図束髪簪》 香川勝庸《布袋唐子游図懐中時計》 海野勝珉《山さと図懐中時計》

無銘《秋草鶉図カフス》 豊川光長《虫撰図カフス》 海野勝珉《獅子熊図カフス》 海野勝珉《岩戸神楽図カフス》 小沢秀楽《弁慶図板鎖》 海野勝珉《菊水図カフス》

加納夏雄《紫陽花図指輪》 下阿弥勝義 《菊花図指輪》 正阿弥勝義《秋草に飛蝗図指輪》 宗珉銘《竹虎図緒締》 無銘《鳳凰図ペンダントトップ》

無銘《毘沙門大黒図ペンダントトッ 無銘《小紋象嵌ブレスレット》 無銘《小紋象嵌ブレスレット》 無銘《芦雁図バックル》

鈴木美彦《雨中曳舟図バックル》 無銘《雉秋草図ブローチ》 海野勝珉《道成寺図ブローチ》 海野滕珉《鲤帯留》 加納夏雄《蝶図帯留》 無銘《菊牡丹帯留》 無銘《菊帯留》 無銘《珊瑚菊花彫ペンダント》

無銘《花尽し帯留》 無銘《花舟帯留》 大内玉藻《木彫牡丹帯留》 安藤緑山《牙彫胡瓜帯留》

橋本周延《時代かがみ 元治之頃》 橋本周延《時代かがみ 明治之頃》 橋本周延《時代かがみ 付録》

# ○5 「工芸とデザイン─伝統の再解釈、手仕事の現在地─ | <del>|</del> 「京都の伝統産業実習報告展」 [主催] 京都精華大学







日時: 11月23日(月·祝)~12月4日(金) 会場:京都精華大学明窓館 ギャラ リーフロール

参加者数:各429名

本展では、京都の伝統工芸を現代的な デザインで再解釈し、意欲的な製品を 発表する企業・組織の代表的な製品を 展示した。伝統的な手仕事にデザイン をかけ合わせて、新しい価値を創造す る職人、デザイナー、ディレクターを 紹介し、2015年時点の京都における活 動の記録を目的としている。また、同 時開催の「京都の伝統産業実習報告 展」は、京都精華大学で1980年から 京都の伝統産業に携わる工房・企業の 現場に弟子入りして学ぶ「京都の伝統 産業実習(学外実習)」プログラムの成 果報告展である。染織、和紙、京版 画、竹・木工芸、金工芸、文化財修 復、京造園などの実習先で学んだ技術 を活かし、53名の学生がデザイン・制 作した作品を展示した。

#### 「工芸とデザイン」展示リスト

「京瓦プランター」製作:阪田将輝 /浅田製瓦工場、デザイナー: 眞城 成男/ Sfera

TEA POT (L) Sakura Pink & Glossy Black」製作:朝日焼、クリ エイティブディレクター: Thomas Lvkke / OeO

「Tea Set」製作:朝日焼、デザイ ナー: Sfera

「汐音 SION Totebag / 蒼空 SORA Totebag / 凛音 RIONE Shoulder bag|製作:コネック有限会社、プ ロデューサー:松川恵一/ENIAC

INTERNATIONAL 「Copper water pitcher | 製作:開 化堂、クリエイティブディレク ター: Thomas Lykke / OeO 「茶筒 長型 200g」製作:開化堂 「唐紙 金魚」製作: 嘉戸浩/かみ 添、デザイナー:西岡ペンシル/ アートディレクター、デザイナー 「Kyoto Basketry Accessory Series バングル (松葉/牡丹/白竹菊)」 製作:小倉智恵美/京竹籠 花ここ ろ、アドバイザー:金谷勉/ CEMENT PRODUCE DESIGN 「GLASSMARKER— 彩 — special collabo-ration」製作:竹中秀美/ 竹中金彩、デザイナー:竹中大輔 「ASQUARE クラッチバッグ(純金 箔) / ASQUARE トートバッグ (銀 箔白檀)」製作:BLUEVOX!、デ ザイナー:戸田祐希利

「掛時空」製作:井上雅博/京表具

井 ト 光 雅 堂。 グラフィティー:

「ONGAKU」製作:井上雅博/京 表具井上光雅堂、イラストレー ター: RΔKIRΔKI 「MINOTAKE 大ベラ/三角ベラ」

製作:公長齋小菅、デザイナー:小

「琳派提灯」製作:小嶋俊, 小嶋諒 /小嶋商店、デザイナー:太刀川英

「十六夜—izavoi—」製作:三浦太 輔/三浦照明株式会社、デザイ ナー:井上拓馬/ everedge 「有機 EL 行灯(プロトタイプ)」製

作:三浦太輔/三浦照明株式会社、 デザイナー: 綾俊洋 / O-lab 代表 「till # 3」製作:藤澤典史/京金箔 押 常若、型押し: emboss artist

「UNIVERSE」デザイナー:河原尚 子/ SIONE、イラストレーター/ アートディレクター:上田バロン 「『京』別誂 高山寺画お茶セット」 セレクトショップ京 「『京』別誂 金襴緞子の日傘」セレ

クトショップ京 「『京』別誂 糊地扇子」セレクト ショップ京

「本藍染浴衣 祇園紋様」製作:美の 花 トキワ商事、デザイナー:田代

「berry / 果実」デザイナー: 皆川 眞弓/AFLO+、サポート:宮下直 樹/空想京都

「concrete earings」 製作:22

design studio (台北)、サポート: 宮下直樹/空想京都 「京指物 シャンパンクーラー」製 作:中川木工芸 比良工房 「ki-oke stool」製作:中川木工芸 比良工房、クリエイティブディレク

ター: Thomas Lykke / OeO 「リバーシブルボウル」製作:天 雲. デザイナー: 眞城成男 / Sfera 「RIMPA Wallet (光悦/光琳)」製 作:西山大介/引箔 西山治作商 店、デザイナー:太刀川英輔

「紅椿絡み BAKI 文様友禅小紋「ツ バキモノ」」製作:宮川徳三郎/宮 川徳三郎商店四代目店主、コーディ ネイター:藤井昌弘、イラストレー ター:BAKIBAKI

「minamo」製作:石川良/石川漆 工房、デザイナー:田上雅彦 「装束・狩衣『霰地紋に裸亀貝(ク リオネ)]|製作:装束司 吉田恒/ 神官装束・神殿調度品 調進所 吉 田装束店、アドバイザー: 沼田努/ 東京デザインプレックス研究所 デ ザイナー: 芦田宗矩、熊川俊介、高

山淳平、田中遥子/ village

21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

鷹峯報告書Light.indb 8-9 16/03/29 14:24

# 6 私の好きな工芸 ■

日時:11月30日(月)~12月3日 (木) 会場:京都工芸繊維大学美術 工芸資料館 参加者数:124名

本展では、7名の著名人がお気に入 りの思い出深い「もの」を出品し た。出品者の一人、谷川俊太郎は 「『好き』は『愛』よりも気軽に使え る言葉だし、明るく、肯定的な言葉 だから一種透明感がある。何かを誰 かを『好き』になることは生命の原 動力だと思う」と綴っている。この 言葉を再認識する展覧会となった。 出品者は愛情深い優しい視線を作品 に向け、それに呼応するように来場 者も自分の好みを熱く語る。しか し、その会話に耳をすますと、私の 好きな「きもの」、「やきもの」と語 られることはあっても、私の好きな 「工芸」と語られることはない。「工 芸」は大きな物語を語る言葉であ る。私たちは一人ひとりの小さな物 語を忘れてはならない。



#### ●シャルランリ・ブロソー [在京都フランス総領事]

山武扇舗「扇子」(1995年購入、学生時代に京都で求 めたもの) / 「肘掛椅子」シャルル 10 世時代(19 世紀 ごろ). フランス製/「トランプゲーム・ブリッジ用テー ブル」折りたたみ式、ルイフィリップ時代(19世紀ご ろ)、フランス製

#### ●檀ふみ [女優]

染: 荒木孝 デザイン: 樹田一男「友禅長着 段ぼか し」2014 年/織:山内「西陣織袋帯」1980 年代/「高 蒔絵祝盃 | 明治時代

#### •池坊専好 [華道家元池坊次期家元]

池坊専好デザイン 漆:下出祐太郎「塗椀」2015年/ 絵付け: 富岡鉄斎 焼成: 富岡春子「煎茶器五客揃 | 制

#### 熊倉功夫「静岡文化芸術大学学長」

大谷尊由「狗の図」「鶏の図」制作年不明/喜志弥右衛 門「茶碗」制作年不明

#### ◆村田理如「清水三年坂美術館館長、並河靖之有線七宝 記念財団理事

作:植村健(円秋) 原画:森田りえ子「印籠」2012 年 / Jim Kelso「The thrush's Promise」金工パネル、 2010年/満田春穂「自在置物 ムカデ」2013年

#### •高橋英一 [ 瓢亭 · 第十四代当主 ]

弘入·十二代楽吉左衛門「赤桃形平鉢」制作年不明/即 全·十六代永楽善五郎「交趾釉唐松絵入子鉢」制作年不明

#### 谷川俊太郎「詩人」

RCA(Radio Corporate of America)ビクターラジオ / SPARTONのCD型ラジオ/ STEWART WARNER













上段左:シャルランリ・ブロソーの椅子とブリッジ用テーブル、扇子 上段中央・右:高橋英一の「交趾釉唐松絵入子鉢」、「赤桃形平鉢」 中段左:村田理如の「自在置物ムカデ|

中段右:谷川俊太郎の「ラジオ」 下段:村田理如の「印籠|

# 07 京の食文化と工芸──私のこだわり ┣━クセッション

[主催] 京都工芸繊維大学

日時:11月30日(月)

会場:京都工芸繊維大学60周年記

参加者数:100名

念館

京都・南禅寺にある「瓢亭」。その 十四代当主の高橋英一さんによる講 演会が行われた。京料理(有職料理、 精進料理、懐石料理、おばんざい)に は、それぞれが持つしきたりに、し つらえ、きまりがあり、それらは長 年にわたって人々の手により昇華さ れ、理にかなったものとなってい る。この京料理について、四百年続 く老舗料亭に受け継がれてきた京文 化と、京都のさまざまな工芸の話を 交えて語ってもらった。

> 左:高橋英一[瓢亭・第十四代当主] 右:澤田美恵子「京都工芸繊維大学基 盤科学系教授/ファシリテーター]







# ∞ 京のわざ、日本のわざ フィルムで見る京の伝統工芸 🗪

[主催] 京都府京都文化博物館

日時:12月1日(火)~6日(目) 会場:京都府京都文化博物館3階 フィルムシアター 参加者数: 213名

京都府が1967年から1990年にか けて制作した京都の伝統産業・伝統 工芸の記録映画の中から、『京蒔絵』 (1971年) 『京象嵌』(1972年) など6 作品を選び上映した。今から100 年前、明治から大正の工芸には超精 密技巧が施され、今では技を再現で きないものがたくさんある。記録映 像は実物ではなく二次的なものだ が、工芸の美しさがどこから来てい るのか、昔から伝わってきた文化・ 技・情報がどのように集約されてい るのかをわかることで初めて、今の 若い人、今を生活している人に理解 していただけるのではないか。日本 の技や DNA を残す手段の一つとし て映像は効果的だと思い、今後も公 開していきたいと考えている。

•『截金〈斉田梅亭(日本工芸会)〉』 1968 (昭和 43) 年 京都府作品/ 27分・モノクロ 監督:小坂哲人 出演: 斉田梅亭 (截金師)

截金とは金箔 銀箔 プラチナ箔を 線状、または三角、四角などに細か く切って、文様風に貼りつける技法 で、仏像・仏画などの荘厳に多く用 いられた。本作では西本願寺の筋向 かいに居を構える、重要無形文化財 保持者の斎田梅亭による手什事の過 程を映す。また、仏像仏具に留まら ず、技法を工芸品に展開する梅亭の 試みを追う。

●『京蒔絵』 1971 (昭和 46) 年 京都府作品/ 41 分・カラー 出演:本多仁次郎 (素地師)、高橋正吉(塗師)、串田 誠二 (ろ色師)、杉森一朗 (蒔絵師) 蒔絵とは漆で文様を描き、乾かない うちに金、銀などの金属粉や、朱、 黄、緑などの色粉を蒔きつけ、粉を 付着させて文様を表したものであ る。本作は漆と蒔絵の歴史ととも に、京蒔絵の伝統を受け継いでいる 人たちの手により、文筺の素地造り から塗師、ろ色師の手を経て、蒔絵

師によって完成されるまでの全工程 を記録している。

#### ●『京象嵌

1972 (昭和 47) 年 京都府作品/ 47 分・モノクロ 出演:丹羽猶三 郎(象嵌素地師) 富田喜一郎(象 嵌師)、山本章一(象嵌師)

象嵌とは、金属工芸の装飾法の一つ で、銅や鉄、真鍮などの地金に、た がねで文様にする部分を彫り、そこ に金、銀などの金属をはめ込む技法 をいう。本作は、象嵌の技法のう ち、布目象嵌による宝石箱が、素地 (きじ) づくりから象嵌を施して完 成されるまでの技術工程と、高彫色 絵象嵌が壺に施される技術を記録し たものである。

#### ●『櫛とかんざし』

1979 (昭和 54) 年 京都府作品/ 41 分・モノクロ 出演: 竹内親日 吏 (櫛製造師)、定永芳子 (花かん ざし製造師)

京都の伝統ある櫛、かんざしの製造 師は、需要の推移にともない年々減 少し、現在ではつげ櫛製造師の竹内 さん。花かんざし製造師の定永さん などが京都の由緒ある櫛、かんざし の伝統を引き継いでいる。本作では

竹内さん、定永さんの櫛、かんざし の製造工程を中心に、その歴史、製 造技法、素材と加飾方法や櫛、用途 などその現代性と業界の実状を紹介 し、記録した。

#### 『京くみひも』

1980 (昭和 55) 年 京都府作品/ 42 分・モノクロ 出演:西田佐太 郎(京くみひも師)、松下そめ(京 くみひも師)、大林芳雄(京くみひ も師)、大岡信重(京くみひも師) 日本独自の優雅な和風くみひもが、 平安京で生み出され、染・織・工 芸・茶道と関わり合いながら独特の 美しい京くみひもが継承されてき た。本作は、構想から仕上げに至る までの製造過程を、高台をとりあげ るとともに、丸台、角台、綾竹台、 内記台、 節打台による組み技法と、 後継者育成や商品開発に取り組む業 界の姿をあわせて紹介する。

#### ●『京扇子/京うちわ』

1981 (昭和 56) 年 京都府作品/ 45分・モノクロ 出演:中村清兄 (扇屋)、餐庭長兵衛(団扇製造師) 絵画、箔に彩られ、漆、彫刻が施さ れた京扇子、京うちわは伝統技術の 粋をこらし、実用品を兼ねた美術品 として発展してきた。本作では、原 材料から完成品に至るまでの製造過 程を克明に記録した。工程別に専門 技術者が受け持つ分業体制によっ て、一本の舞扇、一枚の京うちわが 仕上っていく有様をドキュメンタ

21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

鷹峯報告書Light.indb 10-11 16/03/29 14:24

# 9 こども未来工芸ワークショップーラるし編─ 優示

[主催] こども未来工芸プロジェクト

日時:12月1日(火)

会場: ノートルダム学院小学校

参加者数:170名

「工芸をなぜ残すべきなのか」と質 問して、答えられる小学生はいませ ん。それは学校でも家庭でも伝統工 芸に触れる機会がほとんどないから である。このワークショップでは 「残すべき」ではなく、「残したい」 と子ども自身が言いたくなるような 体験をまずはじめにしてもらうこと を目的とした。具体的には、グルー プで漆器の重箱にお菓子を詰めて、 友だちのところへ運び、もてなすと いう、ただそれだけのこと。しか し、子どもたちは開ける瞬間、重箱 を囲んで笑顔があふれていた。この ように工芸品でわくわくどきどきし たことが今まであったでしょうか。 「言葉にできないけれど大切だ」と フォーマットとしていろいろな地域 いうことを子どもたちにまずは経験 してもらう。この「こども未来工 試してもらいたいと考えている。





芸」を一つの伝承ワークショップの で、さまざまな伝統工芸品について



# | | トークセッション |-

#### 芸とデザイン トークセッション

[主催] 京都精華大学

日時:12月4日(金)

会場:京都精華大学 友愛館アゴラ

ホール 参加者数:80名

4名のパネリストを迎え、流通の問 題や海外へ販路を求める際の難し さ、3Dプリンターなどの技術に代 表されるポスト産業化社会における 工芸のあり方などについて議論がな された。作り手二名からは、最近の 世界的な動きとして、画廊が現代 アートからクラフト・デザイン的な ものを扱うように変化している動向 と、海外の美術館・博物館のコレク ションや職人、デザイナーや使う人 とのコラボレーションに参加し、今 後のあり方を探っていると報告が あった。また使う立場からは、流通 の場で職人とデザインが協業するこ とで、新しい商品・販路を生み出 し、商品の継続可能性までを総合的 に考える力こそ、デザインにおいて 重要だという発言があった。







金谷勉 [(有) セメントプロデュースデザイン 代表取締役/クリエイティブディレクター] 杉本節子[料理研究家、エッセイスト、公益財団法人奈良屋記念杉本家保存会常務理事兼事務局長] 中川周士「木工芸職人

山中源兵衛 [清課堂七代目当主]

# 10 KYOTO DESIGN+CRAFTS FAIR €₹₹₹

[主催] 京都精華大学

**□時**:12月1日(火)~6日(日) 会場:京都精華大学 サテライトス ペース kara-S

京都が継承してきた伝統工芸やもの づくりに、現代的な感性からアレン ジをほどこした商品を取り揃えた。 京都の中心地・四条烏丸にある複合 商業施設「COCON KARASU-MA」内に店舗を設けたことで、買 い物途中の若者たちが気軽に来店し た。若い女性向けの商品も多く、若 い世代のものづくりを担う人々が 行っている試みの多様さを感じさせ た展示販売になった。普段から多岐 に渡る商品を取り扱う「kara-S」の 「コーディネイト力」が存分に発揮 されたこの企画。「つなぎ手」とし て、その「コーディネイト力」や 「セレクトの妙」を実際どのように 今後展開させていくのか、その展望 を垣間見ることができた。



昇苑くみひも(組紐)、花背 WARA(藁細工)、金井悠(陶器)、鈴木まどか(陶器)、大前史(陶器)、hiyomi circle (版画)、本田このみ(版画)、sometae(型染め)、sakamoto osamu(漆)、takenaka kinsai(金彩)、追立睦(漆)、 長谷川哲也(陶器)、森紗恵子(爪搔き綴織り)ほか









21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

鷹峯報告書Light.indb 12-13 16/03/29 14:24

# 11 京都市立芸術大学トークセッション

# 次世代の食と工芸|欧郷市立芸術大学

[主催] 京都市立芸術大学

日時:12月2日(水)

会場:京都市立芸術大学ギャラリー@ KCUA(アクア)

参加者数:45名

「食」をキーワードに、第1部、第2 部にわたり、「ヒト」「モノ」「コト」 の関係を再考した。当日、会場では 「一人で食べることができない介助が 必要な人たちのための器は、どういう ものがあり得るか」ということを中心 に議論が進んだ。その意味で、「工芸 は何のためにあるのか」ということを 深く考えさせられたシンポジウムと なった。そこから見えたものは、「工 芸」は器一つとっても、食材であれ、 材料であれ、それぞれの地域の暮らし のなかにおいて風土に極めて深く根付 いているということ。食べること、着

ること、住まうことには、多様な形が

あることを再確認するトークセッショ

#### 「食と工芸〜過去から未来へ」

永楽陽一「永楽善五郎 長男] 園部晋吾 [山ばな平八茶屋] 木立雅朗 [立命館大学教授 考古学·文

森野彰人「京都市立芸術大学准教授、清 水焼団地協同組合副理事長]

#### • 第2部

#### 「食と工芸~身体、介護、工芸の関係性」

荒金英樹 [愛生会山科病院 外科、「京 滋摂食・嚥下を考える会」代表世話人〕 田中麻里 [愛生会山科病院 作業療法

竹浪祐介 [地方独立行政法人 京都市産 業技術研究所 デザインチーム] 華井明子[京都大学大学院医学研究科人 間健康科学系専攻 博士課程、日本学術 振興会特別研究員、作業療法士 森野彰人[京都市立芸術大学准教授、清 水焼団地協同組合副理事長]







# 12「正倉院宝物復元プロジェクト」作品展示& パネル展示 📟

[主催] 京都美術工芸大学

日時:12月3日(木)~6日(日) 会場:京都伝統工芸館1階ギャラリー 参加者数:371名

文化財コースの村上隆教授の指導のも と、京都美術工芸大学の学生たちが、 「ものづくり」を最高峰の「工芸」から 学んでいくプロジェクトである。昨年度 から正倉院宝物の復元模造品制作に取り 組んでおり、昨年度は「第66回正倉院 展」に出陳された「檳榔木画箱」の復元 模造品を制作した。今年度は2種類の 「伎楽面」の復元模造品を制作。一つは 木彫刻で「酔胡王」を、もう一つは乾漆 工法で「酔胡従」。文化財・木工・漆 芸・木彫刻を学ぶ学生たち自らが制作中 の作品を展示した。

#### 展示リスト

《檳榔木画箱》 《伎楽面「酔胡王」》 《伎楽面「酔胡従」》 各制作工程パネル数枚





ンとなった。

# 正倉院宝物復元プロジェクト」

[主催] 京都美術工芸大学

日時:12月5日(±) 会場 京都伝統工芸館 6階 参加者数:54名

「正倉院宝物復元プロジェクト」で 学生たちを指導した村上隆教授を コーディネーターとして、パネリス トの宮本貞治教授、建田良策准教 授、河野元昭学長が今後の美術工芸 についてそれぞれの思いを発信し た。古い伝統を体験・習得し、そこ に個性を盛り込んで新しい工芸をつ くっていく。これまで伝統的に徒弟 制度で行われてきたものを、学校の システムとして行う、という京都美 術工芸大学の教育方針を体現したこ の復元プロジェクト。工芸そのもの の質と、それを観て触れる人の数の 両方が相まって優れた文化がつくり 出される。そのことを示した講演と なった。

14



#### • 登壇者

河野元昭[京都美術工芸大学学長、東京大学名誉教授、秋田県立近 代美術館名誉館長

村上隆[京都美術工芸大学伝統工芸学科文化財コース教授] 宮本貞治[京都美術工芸大学伝統工芸学科伝統工芸コース教授] 建田良策[京都美術工芸大学伝統工芸学科伝統工芸コース准教授]









# 13 16 職人が案内する工房見学・体験ツアー 🕬 🐯

[主催](公財)京都文化交流コンベンションビューロー





日時: 12月4日(金)/12月5日(土) 会場: 京和傘日吉屋、京友禅 染匠市 川/錦織 光峯錦織工房、京焼・清水焼 洸春窯

参加者数:29名

伝統工芸品の認知度向上と、興味から 購買へ導くことを目的として、職人が 案内する工房見学・体験ツアーを企画 した。「京和傘 日吉屋」「京友禅 染匠 市川」「錦織 光峯錦織工房」「京焼・ 清水焼 洸春窯」と京都の工芸を代表 する老舗工房に協力いただき、見学・ 制作体験を行った。4コースで総勢30 名近い申し込みがあり、一部の方は参 加ができなかったほどの盛況ぶりだっ た。また、参加者からのアンケートで も、好評で非常によかったという評価 をいただいた。今回の実績を通して、 今後も工房見学や体験ツアーを実施 し、京都の伝統工芸品の魅力を身近に 感じるきっかけをつくる予定である。

#### 見学・体験ツアー内容

#### •12月4日 【A コース】

京和傘 日吉屋(見学・ミニ和傘制作)

江戸時代から続く和傘の技術を応用 した新商品を開発している京都に唯 一残る和傘製造元で、工程の見学と 制作体験。

#### [B コース]

#### 京友禅 染匠市川(見学)

参加者:8名 伝統的な伝統的な糊糸目による本流 の手描き友禅にこだわる工房。着物 ができるまでの工程を見学。

#### • 12月5日 【Cコース】

# 錦織 光峯錦織工房(見学・錦織アクレサリー制作体験)

参加者:8名

高機という織機で手織りをする絹の 紋織物である「錦織」。見学と手織 機による製織を体験。

#### [D コース] 京焼・清水焼 洸春窯(見学・交趾焼 絵付体験)

参加者 7名

鮮やかな色合いが特徴的な交趾焼の 伝統を継承している工房で、見学と 絵付を体験。



# 14 絶滅危惧の素材と道具 ラウンドテーブル/ワークショップ

[主催] 京都造形芸術大学







日時: 2015年12月4日 共催: COJ(社) ザ・クリエイション・オ ブ・ジャパン

会場:大学コンソーシアム京都 キャンバスプラザ京都 4階第二講義室参加者数:102名

工芸での素材と道具の危機に対し、 「実際の手当て」をさぐるプロジェク ト。今回は、「塗るもの」(膠、漆、筆) をテーマにした。現在の問題と「より 上質なもの」を、ワークショップを通 じて理解し、問題点やこれからの仕組 みを考えた。会場では膠や筆が展示さ れ、実際に筆でどのように墨の表現や 表情が変わるのかを実演した。さらに 原料、道具、作り手、研究・行政機 関、廃棄物処理から見た発言・提案が なされた。素材や道具のストック、技 術の伝承から次世代へ伝える動きや場 づくりなど、今後の課題を再確認・共 有する有意義な内容となった。今後も 垣根を越えた取り組みを継続し、価値 観や生活スタイルを改革するための力 強い契機となった。

#### • 発言者

青木芳昭 [京都造形芸術大学教授] 鵜島三壽 [関西外国語大学教授] 大野木啓人 [京都造形芸術大学副学長] 大藪泰 [京都市産業技術研究所研究室長・理事] 近藤都代子 [文化庁文化財部伝統文化課主任調査官]

調食官」

塩瀬隆之[京都大学総合博物館准教授]

清水宏之 [宏栄化成株式会社] 中里文彦 [(株) 中里代表取締役社長]

中台澄之 [(株) ナカダイ常務取締役] 松井孝成 [株式会社墨運堂顧問]

室瀬和美 [漆芸家、重要無形文化財「蒔絵」の保持者] 森木隆浩 [京都府商工労働観光部染織・工芸課長] 米原有二 [ライター、京都造形芸術大学非常勤講師]



21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集 17

鷹峯報告書Light.indb 16-17 16/03/29 14:24

# 19 上賀茂神社特別参拝 🝩

[主催] COJ(社)ザ·クリエイション·オブ·ジャパン

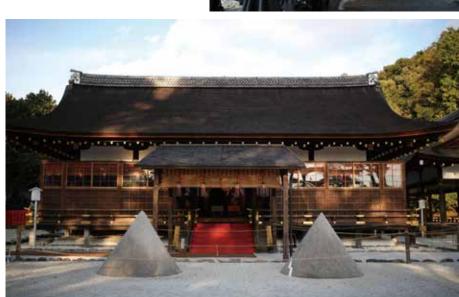
日時:12月5日(±)

会場: 賀茂別雷神社(上賀茂神社)客殿

参加者数:20名

トークセッション参加者を対象に、賀茂別雷神社(上賀茂神社)の本殿で、狛犬を影絵で縫い止めた日本で唯一の「影狛」(狩野永徳筆とされる)の特別参拝が行われた。賀茂別雷神社にまつわるたくさんの由緒についての解説を聞きながらの参拝となった。当日は肌寒かったものの、とてもよく晴れ上がり、まだ残る紅葉のなかの参拝は、改めて京都や日本の奥深さが感じられる体験となった。





20 工芸における琳派コードを読み解くトークセッション in 上賀茂神社

#### トークセッション/講演)

[主催] **京都市美術館** 

□時:12月5日(土) 会場:質茂別雷神社(上質茂神社)客殿 参加者数:58名

2016年1月に開催される「琳派降臨―近世、近 代、現代の琳派コードを巡って」の展示計画につ いて京都市美術館の尾崎眞人学芸課長。そして、 この展覧会のキーパーソンである神坂雪佳を中心 に、琳派について細見美術館の福井麻純主任学芸 員と京都市立芸術大学の榊原吉郎名誉教授が講演 を行った。福井主任学芸員は基本的な琳派作品の 紹介から始まり、雪佳の工芸衣装作家としての多 様な用途に対応した幅の広い活動を紹介。また、 鷹峯の主・本阿弥光悦と尾形光琳を雪佳がどのよ うに受け止めていたのかを説明した。榊原名誉教 授はライフワークである雪佳研究、雪佳の紹介活 動の一端を披露。琳派をめぐる上方琳派と江戸琳 派の差異について、自身の説をかいつまんで提言 した。美術の分野だけには限らない日本的美意識 の想像的継承活動としての琳派さらには雪佳と いった側面を特に強調されそのことを鮮やかに浮 き彫りにしたトークセッションとなった。









• ファシリテーター・キュレーター

左:榊原吉郎[京都市立芸術大学名誉教授] 中:尾崎眞人[京都市美術館学芸課長] 右:福井麻純 「細月美術館主任学芸員]

# 17 つくるフォーラム公募説明会 ◎

[主催] COJ(社) ザ·クリエイション·オブ·ジャパン

日時:2015年12月5日(土)

会場:京都国立博物館 平成知新館 講

堂十グランドロビー

参加者数:53名

工芸を中心としたクリエーターと使用 者、発注者をつなぐプラットフォーム 事業のなかで、直接ビジネスに結びつ くものとなった。このプロジェクト は、特注品(お誂え)の公募である。 その特徴は、第一に商品買取が決まっ ていたり販売場所が確保されており、 商品開発だけで終わらないこと、第二 に発注者にとっては発注要件を満たし つつ良い品に出会う機会となること、 第三につくり手にとっては仕様で受注 する単なる下請製造ではなく、リクエ ストにも作者の独創性を尊重する発注 者に出会う機会となること、第四にそ れら双方の意思を COI がていねいに 調整し橋渡しすることにある。説明会 ではまず、発注者となる京都国立博物 館、島津製作所、ピーエスから説明の あと、各自ミーティングが行われた。 有名作家や学生、各種工房、職人、 メーカーなど幅広い応募があり、レベ ルの高いと予想される。採用審査、進 捗は随時ウェブページ上で報告し、採 用された作品、製品は来年度の東京で のシンポジウムで発表になる。

#### 当日の流れ

11:00~12:00 講堂にて、募集者となる企業が趣旨 と概要説明

13:00~14:00 グランドロビーに設置された各案件 ブースにて質疑応答。15分入れ替

14:00~16:00 各ブースにて、個別打合せ

#### 募集案件

#### **1 ● 京都国立博物館** 「京博ブランド」携帯用ミントケー

ス = 現代の印籠・振出・薬入れ 和装に合わせたミントケースを募 集。着物の帯の内側にはさんで携帯 することができる大きさと形。簡便 に中身を取り出すことができる仕組 み。紐を通すことができる「紐掛か り」のあるものなどを条件にした。 全国のつくり手の対象は、漆、木 工、竹工、金工、陶磁器、染織、皮 細工、ガラス製など、工芸の全ジャ

#### 2 • 島津製作所

勤続 25 年表彰記念品

長年勤め上げた島津グループ(国内 外)社員を対象に、毎年4月1日 に、これまで当社の発展に寄与してきたことに対する感謝の場を設けてきた。25年を一区切りに、これまでの努力をねぎらうとともに、今後ますますの活躍を期待し記念品を贈呈している。この記念にふさわしい品を、京都のつくり手を対象に募集

#### 3 • ピーエス (PS)

A) グラフィックを遊ぶラジエータ

B) 歴史と響くラジエータ C) 衣替えする春夏秋冬ラジエータ 日本の気候風土により踏み込んだラ ジエータづくりにあたり、デザイン プロセスに参加していただける全国 のアーティスト、デザイナー、職人 を対象に募集した。









21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

應峯報告書Light.indb 18-19 16/03/29 14:24

# 18 特別講演会

# 「愛しむ工藝 誂えの歴史」

[主催] 京都国立博物館

**日時**:12月5日(土)

会場:京都国立博物館 平成知新館

#### 参加者数:56名

金属工芸において「出来合いの物」 と、発注者ないし使用者が明確に なっている「誂え物」の関係は非常 に複雑である。特に刀剣は、実用目 的以外にも贈答や奉納を目的として 生産され、その背景は一様ではな い。また、使用にあたって着装者ご とに、それぞれの好みを反映した 「拵」と呼ぶ保持具を必須としてき た。今回の講演ではこれらの実例を 踏まえて、中世から近世末にかけて の刀剣の発注と製作の背景を解明し ていった。





末兼俊彦[京都国立博物館

# 22 鷹峯ナイト

[主催] インパクトハブ 京都

インパクトハブとはロンドン発祥 で、世界70都市で1万人が互いに 地域のさまざまな課題や実践的な活 動を語り合う場であり、海外のゲー トウェイのひとつともなっている。 インパクトハブ京都のある相国寺の 一角は、戦後、日本文化を伝えるた めに、女子の文化教育をしていた場 所にある。この場所に集まったの は、自然の恵みに感謝し、自然の風 景をメディアでつくり出したクリ エーターたち。「100年のちに工芸 を残したい社会とはどんな社会なの か」、また「どんな社会でありたい のか」を対話し考える機会となった。







# 25 100年後に残る工芸のために メインシンポジウム

日時:12月6日(日)

会場: 国立京都国際会館

- 祝辞、挨拶
- · 円卓会議 (意見交換)
- ・工芸の祭典での各機関からの成果発表
- 京都提言
- ・今後の展開

#### 出席者

#### • つくり手

秋元雄史[金沢 21 世紀美術館館長/東京藝術大学大 学美術館館長]

石飛英人 [京都市美術館総務課長]

伊藤友厚[株式会社三幸デザイン企画部]

今井眞正 [陶芸家/京都工芸美術作家協会理事] 今井完眞 [陶芸家/京都工芸美術作家協会]

入澤聖明 [アサヒビール大山崎山荘美術館] 岩井香楠子[アーティスト/日本工芸会]

内田篤呉 [MOA 美術館·箱根美術館館長·業務執行

叶松谷[陶芸家]

叶具夫 [陶芸家]

唐澤昌宏[東京国立近代美術館工芸課工芸課長]

川上力三

北村昭斎[日本工芸会]

神山俊昭[京都文化博物館副館長/公益財団法人京都 文化財団常務理事]

佐々木丞平[京都国立博物館館長]

潮江宏三[京都市美術館館長]

白井克明 [二方屋五代目]

白井昌子 [二方屋代表]

神農巌[日本工芸会近畿支部]

高山健太郎[㈱ノエチカディレクター]

田代雅春 [TM 魁文化研究所所長]

千原啓子 [デザイナー]

中井貞次「染色家/京都市立芸術大学名誉教授/日展 理事/現代工芸美術家協会常務理事]

中川衛「日本工芸会」

中村卓夫[陶芸家]

仁科雅晴 [株式会社仁科旗金具製作所代表取締役]

西村かおり [株式会社仁科旗金具製作所]

福本潮子「染織家〕 福本繁樹[染色家/大阪芸術大学工芸学科教授]

三木啓樂 [漆芸家]

宮永東山

三好かがり「日本文化財漆協会]

村上良子 [日本工芸会]

村田好謙[日展/日工会/創工会/京都工芸美術作家

協会

村山明「日本工芸会」

室瀬和美 [漆作家 人間国宝/日本工芸会理事]

森口邦彦[染織作家 人間国宝/日本工芸会理事]

安田大助 [日本文化財漆協会]

安田浩人[粟田焼窯元鍵屋安田] 八巻多鶴子[服飾・宝飾デザイナー/㈱スチル代表取

山本祐三[画箋堂代表取締役]

吉村楽入[窯元楽入主人]

寄神宗美

若林覚「練馬区立美術館館長

渡邊明 [日本工芸会]

松原龍一[京都国立近代美術館学芸課長]

#### つかい手

青柳正規 [文化庁長官]

赤畠貞宏[㈱関西電業社]

浅井俊子 [一般社団法人 Impact Hub Kyoto 代表理 事/㈱情報工房代表取締役社長]

浅井亮太 [(地独) 京都市産業技術研究所デザイン

チーム TL 研究副主幹]

井形彰利 [株]島津製作所総務部長]

浦淳 [NPO 趣都金沢主宰/㈱浦建築研究所代表取締 役計長]

大藪泰[地方独立行政法人京都市産業技術研究所研究

川村耕太郎[元東京商工会議所常務理事]

川村喜久 [DIC グラフィックス㈱取締役会長]



21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

鷹峯報告書Light.indb 20-21 16/03/29 14:25 菊池理予[東京文化財研究所無形文化遺産部研究員 (工芸技術)]

木下博夫[公益財団法人国立京都国際会館館長]

木村基之 [公益社団法人金沢青年会議所/ JCI 世界会 議金沢大会 COC 部会長/ 2015 年度金沢の文化経済 創造委員会委員長

湖山泰成[湖山医療福祉グループ・NPO 法人ヘルス ケアデザインネットワーク代表]

島村元紹[島村楽器株代表取締役会長]

清水潔「明治大学特仟教授]

新谷真人[公益社団法人金沢青年会議所/2015年度 金沢の文化経済創造委員会幹事]

辻喜代治 [THE OFFICE]

中台澄之「㈱ナカダイモノ:ファクトリー品川ショー ルーム常務取締役]

林田英樹・道子[前国立新美術館館長/元文化庁長官 / COJ 代表理事/日本工芸会理事長]

比嘉明子[地方独立行政法人京都市産業技術研究所デ ザインチーム研究副主幹]

平山武久 [ピーエス株式会社代表]

藤井宏昭「元駐英大使/国際交流基金顧問/森アーツ ヤンター理事長

堀内勉[森ビル㈱顧問/特定非営利活動法人アイ・エ ス・エル]

前原俊幸[傑東京国際フォーラム営業部営業課課長代 理]

增田寿幸 「京都信用金庫理事長]

馬田広宣[元朝日新聞文化事業部]

松永和夫[元経済産業省事務次官/一橋大学大学院特

任教授/損害保険ジャパン(株)顧問]

松本秀之「公益財団法人京都文化交流コンベンション

ビューロー/国際観光コンベンション部 MICE 課主 任]

森下章子 [株島津製作所総務部課長]

柳原正樹[京都国立近代美術館館長]

山口祥二[菓子司/株式会社末富専務取締役]

山口富子「菓子司/株式会社末富取締役]

山下晃正 [京都府副知事]

山本益博 [料理評論家]

渡邉博司 [渡文㈱取締役]

藤田裕之「京都市副市長」

#### つなぎ手

青木芳昭[画家/京都造形芸術大学芸術学部美術工芸

赤坂博「京都精華大学理事長]

飯村祐子 [株式会社ワポーター代表取締役]

五十嵐義明[学校法人 女子美術大学常務理事]

石黒浩也[㈱三越伊勢丹呉服・美術統括部美術商品部

付新 M 開発担当マネージャー]

伊藤潔史 [株壷中居]

井上道子[京都画廊連合ギャラリー 16]

鵜島三壽 [関西外国語大学学研都市キャンパス図書館 学術情報センター長

大河敏宏「二本松学院進学サポート室課長]

大倉美恵子[大阪大学特任教授]

大野木啓人[京都造形芸術大学副学長・教授]

岡田宣世[学校法人女子美術大学修復室名誉教授]

金子勝二「ギャラリー正觀堂]

川越仁恵[日本経済大学専任講師]

河野元昭[学校法人二本松学院京都美術工芸大学学

学科教授

永田宙郷「㈱イクス代表]

仙石早苗[ギャラリー 16]

都築明寿香「日本経済大学学長」

中村次郎[京都造形芸術大学法人企画課広報担当]

廣野貴夫[京都市立芸術大学副理事長]

深井史朗 [㈱阪急ライフスタイル研究所]

佐藤敬二[京都精華大学デザイン学部教授]

塩瀬隆之[京都大学総合博物館准教授]

/㈱ AG ホールディングズ代表取締役]

澤田美恵子「京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科

柴山哲治[同志社大学アートビジネス実践非常勤講師

新谷由貴代[京都伝統工芸館館長/京都伝統工芸大学

土岐謙次 [宮城大学事業構想学部デザイン情報学科]

富山達章[インタープランニング有限会社代表取締

福島正和

役]

教授]

校副学長]

森迫清貴[京都工芸繊維大学理事・副学長]

森野彰人[京都市立芸術大学美術学部美術研究科陶磁 器准教授]

安田ひろみ「アートスペース感]

山崎伸吾[ディレクター]

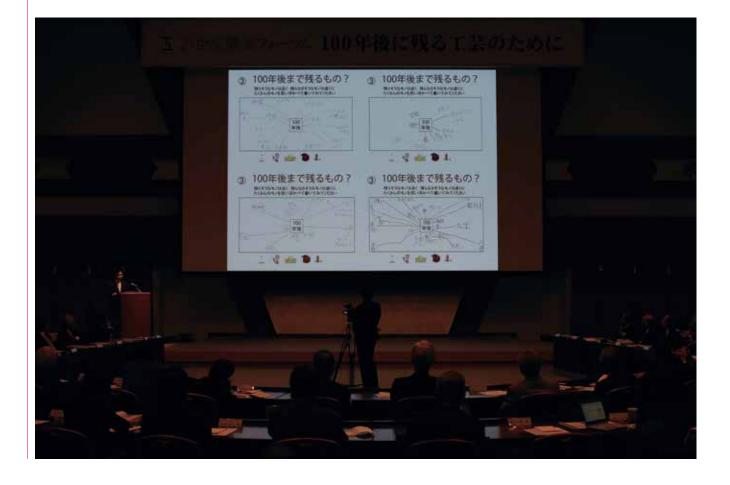
横山勝樹[学校法人女子美術大学学長]

米原有二 [文筆家/工芸ジャーナリスト/京都造形芸

術大学非常勤講師

鷲田清一「京都市立芸術大学学長]

高畷喜代彦[京都市立芸術大学事務局長]



22

#### 事前調查

シンポジウムに出席を予定している方々を中心に、事前に 工芸に関するアンケート調査を行った。

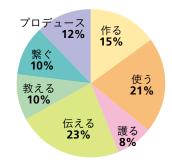
Q0 ご回答くださった方※調査結果にコメントを掲載させて載く場合のお名前をご指定下さい。

#### 工芸とのかかわりは

□深い □身近に感じている □深くはないが関心はある □身近に感じてはいない

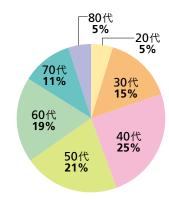
#### 主なかかわりかたは

□つくる □使う □護る □伝える □教える □つなぐ(販売) □プロデュースする

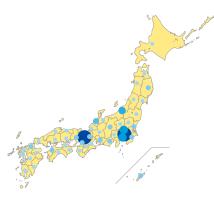


#### 年齢層

□20歳代 □30歳代 □40歳代 □50歳代 □60歳代 □70歳代 □80歳代以上



ご出身・ご在住の都道府県、かかわりの深い都道府県



Q1 いままで工芸とあまり関りのなかった方に(例: 外国人やこともなど) 工芸品の魅力を伝えるために、日本全体の工芸関連機関で実践すべきこと(※Q1-1)、実施したいと思われること(※Q1-2)をお教えください。

Q1-1 日本全体の工芸関連機関で実践すべきと思われることとは?該当する内容と思われるものすべてにチェック「✓」を、うち重要度の高いものには「★」マークをご記入ください。
□情報が欲しい人の目線に立った情報網(web)の整備

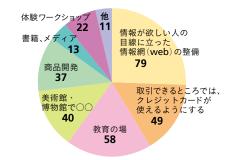
□英語対応 うち特にWEB・説明案内版・来訪者対応/電話/メール/FAX ほか( )

□中国語 (北京語) 対応 うち特に WEB・説明案内版・来訪者対応/電話/メール/ FAX ほか( )

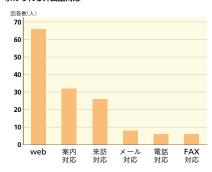
□スペイン語対応 うち特にWEB・説明案内版・来訪者対応/電話/メール/FAX ほか( )

ル/電話/メール/ FAX はか( )
□( )語対応 うち特にWEB·説明案内版·来訪者
対応/電話/メール/ FAX ほか( )

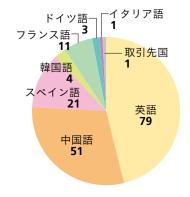
□取引できるところでは、クレジットカードが使えるよう にする



#### 求められる外国語対応



#### 対応言語



#### □教育の場(

- ・大学、特に美術学部、造形学部のある大学での授業に伝統 工芸に関する内容を積極的に取り入れる
- ・学生の語学力 UP
- ・工芸を創る時間や現場を訪問する時間を必修とする
- ・工芸の背景、流れに焦点を当てた学び
- ・ 自分の手を動かす自分の目でみる教育が必要だと考える
- ・高校までの学校教育で美術、工芸教育を拡充すべき
- ・日常的に工芸品を目にする機会を増やす。展示、ワーク ショップ、レクチャー
- ・子どもの頃に多くの良い作品、本物に触れることがもっ とも重要だと感じます
- ・講義
- ・子どもの頃から関心を持たせるための学校教育に働きかけ
- · 美術史、歷史教育
- ・中高。小学校にはわずかに「伝統産業」が社会科にあるが
- ・若い世代に啓蒙
- ・つくることだけではなく、使うこと、楽しむこと、購買することで守ることの重要性
- ・日本の美術教育は西欧美術に傾倒しすぎている感がある。日本美術、工芸の教育に力を入れるべき
- ・小学生の時代からの工芸体験、伝統産業に親しむ教育が 必要

- ・日本文化の素晴らしさを伝え、継承(発信)する
- ・次世代に残せるように教育の場で
- ・空き教室を工房として提供し、工芸家の仕事を常に日常 的なものとする
- ・小学生から伝統工芸について教える
- 技術、技法の紹介
- もっとわかりやすく、身近にあるものの素晴らしさを伝える
- ・工芸職人がゲストティーチャーとして授業に参加
- ・ワクワク楽しく、すごいと感じてもらえる工芸体験
- ・大学院と海外の大学での講義が必要
- ・制作体験ができる。小中学校の総合学習の時間、高校の美 術の時間
- ・工芸の価値に関する研究の教育、情報発信
- · 見学、WSなど
- ・日本の技術の高さ、美意識を幼少の頃から根付かせること
- ・社会科見学などに取り入れる
- ・日本の伝統工芸にはどんな種類があるのか、大人になって初めて知ることが多いので、日本の歴史を学ぶ機会に合わせて伝統工芸の歴史や技術技法を学んだほうがいい と思います
- ・体験の場、職人の立場からの実話。ものづくりの重要性
- ・少なくとも地域の工芸を知る、触れる
- ・ゲストティーチャーを派遣する

#### □美術館・博物館で(

- ・各館に工芸コーナーを設けては
- ・子ども向けの鑑賞会を行う
- ・日本が世界に誇る工芸の展覧会を増やすべき
- 作品を陳列し解説するだけでなく、工芸の持つ歴史、作家の思い、生活のなかでの使い方、取り合わせなとストーリー、エピソードを新しい方法でいかに一般の人に伝えるかが重要だと思います
- ギャラリートーク・ワークショップ
- ・陶芸文化、茶の湯文化に関する平易な説明冊子
- ・分りやすい解説、学芸員によるトークの機会をもっと増 やす
- 広報
- ・見やすい展示。 実践している館もあるが、直接触れること のできる場を設ける
- ・現代の工芸をコレクションし、展示する
- ・日本の伝統工芸品の魅力を発信する
- 総合連携情報の利用機能
- ・小学生から伝統工芸について教える
- ・工芸などで使用される意匠などを説明
- ・日本の工芸の発表
- ・子ども向けワークショップ
- ・海外の美術館、博物館とのコラボレーション
- ・常設、特別の展示会、デザイナーとの協働、販売、講演会
- ・所蔵、工芸品の画像使用をフリーにする
- ・他国の人々の視点から見る解説
- ・ ミュージアムショップなどでの販売 (国内外問わず)
- ・展示会とか
- ・共同研究の発表などを行う

#### □商品開発(

- ・とういうターゲットに対してとういう価値を伝えるか、 とんな方法で伝えるか。作家の得意とするもの、武器が何 で、それをとう伝えるかがポイント
- ・公募して、一緒に制作してくれるつくり手側と連携し販 路を見出す
- 路を見出す ・古き良きものを継承できるよう、新しい創造をも取り入
- ・単に売れ行きの良いものを開発するのでなく、公共性の 高さも備えたビジネスプランを
- ・現代的デザインの取入、異業種コラボ、公募コンペ
- ・海外でも売れる商品づくり。現代のニーズにあった商品 づくり
- ・関心の糸口になる商品
- ・職人とデザイナーをつなぐプロデューサーの活躍
- ・従来からの技法を活かしつつ、その時代にあった商品開 発

23

・先人の知恵の継承と現代的な展開

□対( )向けの書籍、メディアで(

- ・若者、学生
- 対専門家向け、書籍
- ・対外国人向けの書籍、メディアで発信
- ・対外国人向け書籍、メディアで観光ガイドブックとの連携
- ・学童+教育者向け書籍、メディアで啓発
- ・対日本文化向け書籍。メディアで情報の発信と購入できる ようにする
- 対一般向けの書籍
- ・小中高校生向けの書籍
- 外国人向け書籍
- 対旅行客用ガイドブック、メディアでエクスペディアとの コラボ
- ・対若者、女性など新規層向け書籍、メディアで情報発信
- ・子ども、ママ向け書籍、メディアでものづくり

#### □対( )向けの体験ワークショップ(

- ・小中学生
- ・中高生ワークショップ。1日6時限を通じて工芸学習
- ・参加できるワークショップ。体験できるワークショップ
- ・対親子向け体験ワークショップ。作家のこだわり、技術、セ ンス。自分でつくることで実感してもらう
- ・対一般向ワークショップ
- 対若者向けワークショップ
- ・対外国人向けの体験ワークショップ、海外において実施
- ・対子どもだけでなく一般向け体験ワークショップ
- 対若者(20~30代)向け体験ワークショップ。食事教室で和食器を使用(料理、テーブルコーディネートなど)
- ・学童+教育者向け体験ワークショップ
- ・対小中学校向け体験ワークショップ
- ・対子ども向け体験ワークショップ
- ・対修学旅行生向けの県ワークショップ。将来の職業の選択 肢となる
- ・対学生向け体験ワークショップ
- ・海外からの旅行客向け体験ワークショップ
- 対若者向けワークショップ
- ・若者、女性など新規層向けワークショップ
- ・対小学生向けワークショップ
- ・若年層

#### □ほか( )

- ・和食、和の住空間、普及、促進のための助成金
- ・上掲Q-1に列挙されている項目はいずれも「手法論」であり、本質的な事項ではないように思われます。工芸を復興するために必要な本質的なことは、それを本来使っていた日本人自身の価値観を取り戻すことだと考えます。「購買嗜好の対象物」である限り、日本工芸品は数ある購買コンテンツの一つでしかありません。日本人の四季暦二十四節季行事に促した価値観や美意識が、衣食住含めた日本のつくりもの、つかいごとの根底ではないでしょうか。そう考えると日々の私たちの暮らしそのものを、本来の良き日本の価値観に戻していく(加減はあるにせよ)ことが第一義であると考えます。このようなフォーラムもその軸点を持っていただければと思っております。※それを前提とした上でQ1-1の項目は手法としてすべて必要であると考えます
- ・伝統工芸にゆかりの観光地の宿泊施設でのPR。東京、京阪神などの外国人観光客が集中する地区の宿泊施設でのPR
- ・流行で一時的なものにならないよう、発信力のある人間が 積極的に生活に取り入れ、生活の一部として伝える文化を つくる
- ・免税対応など販売をするための施策
- ・工芸の技術、工芸品についての写真データベース(英語·中国語)
- ・わからない。パソコンなどを使用しない世代なのでパソコ ンなどが有効かと思うが
- ・海外とつながりのある工芸品国の視察
- ・Q1-1の工芸関連機関がいまひとつよくわからないという 人が多かったです
- ・外国語による映像製作。工芸品の製作工程を中心に緻密さ、 複雑さ、安全性、品質の高さ、使用方法などをわからせるも の
- ・TV番組での発信(特にドラマのストーリー中に役者、使用感ある モノとして登場させる)
- ・メディアの力

24

・コンシェルジェ、コーディネータ的な人材の育成

#### Q1-2 今後実践したいと思われることとは?下記の記入欄に

- ご記入の上、実践するために悩ましい点がある場合は、併せて ご記入ください。
- ・本学造形学部の授業のなかに日本の文化、伝統工芸の魅力を伝える内容をさらに充実させたい **悩ましい点**:中学、高校の科目で「美術が少ない。かつてより若者が美術、工芸の魅力に触れる機会が少なくなっていると思われる
- ・外国での展覧会開催を増やす **悩ましい点**:輸出入、関税、 物流などの手間とノウハウ、できれば代行業など専門家 がほしい
- ・小中学生に対し、学習指導要領「生きる力」の育成を目指 した工芸家によるワークショップの普及拡大
- ・職人や作家を志す若い人たちにいかに活躍の場を与えるか。職人や作家を志す若い人たちに、さらに技術や技能を伸ばすためにとうするのか 悩ましい点:「工芸品や作品が売れない→活躍の場がない→技術や技能がのびない」のネガティブスパイラルから抜け出せない
- ・在外公館での積極的な企画展示を行う。海外での和食、和 の住空間の普及促進を行う企画事業
- ・工芸を身近に感じられ、知る、学び、体験ができる施設の 運営。楽しんで身近になることで、興味がわき、工芸の背 景や歴史(伝統)にも広がりが期待できる。関心と体験の 一体化した空間をつくり、ワークショップはもちろん、見 学や講演もプログラム化したい 悩ましい点:業界を超え た協力がないと、体験や展示が偏り、魅力が半減する。運 営者の継続的な細かい配慮が必要
- ・道具の海外への情報発信及び販売 悩ましい点: 語学力
- ・現代における手づくり、工芸の正しい意義を明確にして 周知させるべき **悩ましい点**:コンピュータや機械が万能 と思われ、手づくりや工芸は時代遅れという誤解を払拭 すべき明快な言葉が必要と思われる。これまでは手づく りは一品一品違うとか手づくりのぬくもりがあるとか、 超絶技法だとかでは説得力がない
- ・学校に工芸品の展示(できれば触れるように) **悩ましい点**: 壊れるリスク
- ・①工芸を買う人、コレクションする人を増やすために、工芸のみならず、芸術全体を支援するための法人、高所得者への減税措置。②大学教育の実質化。大学、大学院を卒業した時点での学生の技術力の低さ。③今後、少子高齢化が進むなか、都市部の空き家が増えていく。それをアーティストレジデンスに活かす。海外作家を招聘し、交流を活発化、地域文化との交流を推進 **悩ましい点**:上記すべてにおいて、法律や政治の専門家との連携が必要。
- ・さまざま存在する工芸関連機関において、たとえば説明 板などの表示を統一したピクトグラムで表示する(アク セス、設備など)と、異なる機関を訪問し、コンタクトした 際に横のつながりが見えやすくなるのではないでしょう か
- ・海外における工芸作品展に開催。 悩ましい点: 経費の確保
- ・ミュージアムショップでも商品としての工芸品や関連書籍を充実させたい。またワークショップの企画などにも参加したい **悩ましい点**: 店舗のキャパシティなど
- ・工芸 = Kougei の言葉 (海外向け) の発信 **悩ましい点**:工芸 に詳しい人にはわかってもらえるが、そうでない人には 伝えづらい
- ・鷹峯=光悦村との認識はまだまだ広まっていません。金沢 〜東京〜海外への発信が急務です
- ・ とこで工芸作品を製作している現場が見られるのかという情報がほしい。気に入れば購入、販売に結びつけたい。 工芸品の価値を周りに知らせていきたい
- ・何より次の100年を考えるのであれば教育が大切。日本 人芸術家(光悦、宗達、遠州、長次郎など)や、焼物の歴史など もっと国内に時間をつくらないと、印象派、ヨーロッパ、 米国の芸術一辺倒になっている。ピカソ、モネ、ミケラン ジェロは知っているが、日本人は知らないのはおかしな こと **悩ましい点**:ナショナリズムにつながる懸念があ り、日教組あたりが反対しそう
- ・現時点では思い浮かばない **悩ましい点**:工芸品の魅力を 伝えるためと、自分自身で実践すべきことを見つけ出せ る。偏りのない情報収集
- ・用具、原材料確保のため、情報集約化(センター化)代替用 具の意見交換も合む) **悩ましい点**:行政の縦割り、センター 機能をとこがもつか
- ・海外での発表とワークショップなど、プロモーション活動を積極的に行うべき。また海外バイヤーやコレクターに向けた「KOGEI FAIR」など定期的実施 悩ましい点:

- ・作品購入をして作者たちを支援
- ・たとえば、料理教室や料理番組のように「つくる」「使う」 「楽しむ」という観点での場を継続的にできないものかと 思う **悩ましい点**: 広報、費用、会場など難しい問題が多々 ・若手作家の発表の場(展示会)を開催すること
- ・使う人がデザインに参加できるワークショップなど **悩ましい点**: そのこと自体を楽しんでやるしかない
- ・これまでも実践してきているが、後継者育成と商品開発 **悩ましい点**:後継者育成:徒弟制度の崩壊
- ・素晴らしい工芸作品はたくさんあり、ほしいと思う。買え るなら買うべき **悩ましい点**:値段が高すぎる
- ・工芸技術の保護、育成に大変興味を持ち、積極的に官民協力をしているフランスにできる限り(限度はあるが)協力したい、「クロスカルチャー」の推進
- ・つくり手の高齢化にともなう継承者の雇用促進、需要の 拡大 **悩ましい点**:つくり手、つなぎ手ともに継承する体 カ
- ・陶芸、漆工、金工、染色など、国内の伝統工芸技法の最先端に立つ作家の選抜展(※テーマ性を持つこと、10年単位で継続すること) 悩ましい点:各々制作工芸の長短の差が大きいこと。総合プロデューサーが要ること。美意識の統一が前提条件であること
- ・伝統工芸を遺産として保護しながら存続させるのではな く、職人が自立し存続できる仕組みづくりのお手伝い。① 工房見学ツアー作成:知ってもらう仕組みづくり。②免税 店対応のクレジットカード対応:買ってもらう仕組みづ くり
- ・小学生や中学生に対する出前授業。大学教育の現場での 必修授業 **悩まい点**:小学校や中学校における伝統(工 芸)産業対応教員の不足
- ・まず鷹峯フォーラムに参加すること。後継者が不足して、 日本の大切な工芸品が失われつつある分野があり、一方 そうした工芸品の魅力を理解できない社会や人の心があ り、これらを考えたい。日本全体の工芸関連機関で連携 し、今日のフォーラムで再度考え直したい **悩ましい**点: 後継者の不足
- ・工芸に関する材料をつくっているものとして、伝承されてきた技術、方法、原材料を使用して、できる限りつくり続けていく **悩ましい点**:人材不足、材料難
- ・アート、工芸、民芸、民族的資料を同じ目線で観ること ・ネット情報の充実
- ①「難しいことを分りやすく簡単に! 10年かかることを 1日で?」伝えるマニュアルをつくる。裏ワザ暴露、秘密 公開などを盛り込んだ公開ご法度!!! 入口で技を公開しその世界に誘い込み、能力によっては10年を5年に 短縮し、独立することができるシステムを構築する。②教室の半分を生徒に本物の食器、半分に従来の食器で半年 間継続して給食をさせ、成果を調査する 悩ましい点:① 技を盗み、薄給徒弟制度に耐えてこその伝統を崩壊させることは、現場の奉仕作業に頼ってきた頂点の人々の怒りを買うことになる。②食器を重ねられない。食洗機にかけられないなと現場からの合理性に合わない。漂白殺菌 剤などの使用から衛生面のクレームを受ける
- ・今、私がやっている仕事「型絵染の染色」を若い人々に伝えていきたい。美術という日本の伝統衣装を後世に伝えたい 悩ましい点:着物ばなれ、手仕事ばなれ
- ・工芸がつくられるプロセスをわかりやすく説明。工芸で 用いられる意匠などを美術館などと連携して説明
- ・国、各都道府県がまとめる工芸に関する情報を一元化、 アーカイブする **悩ましい点**: 行政機関の連携(文科省と経 産省なと。との情報がオフィシャルなのかをはっきりさせる)
- ・海外での日本工芸展開催を行い日本の工芸の手技、美、デザインを知ってもらう機会を多くつくる。また大学での実技実施などを行っては。これまで実施したこと:ニューヨークアジアフェアーに出展。ニューヨーク、ワシントン、ロサンゼルス、台湾、バリ、北京で実技講義
- ・つくり手を増やせば道具素材の利用も増えていくことで しょう。専門的な技術など、若いうちに身につけら得ると ころができれば協力したいと思う。(生活しながら学べる方 法があればと……) 若い人たちが魅力を感じる作品をつく らなければと思う **悩ましい点**: 需要が減るなかで、人材 も使い手も残していく手立ては何かないかと……
- 日本の伝統的意味を持つ工芸を日本以外の国で発表できる機会が拡がることを望みます。また言葉の上で「コウゲイ」をローマ字、国際表記にしたいと思っています 悩ましい点:協調性のある京都の工芸を海外での発表を望み

- **ま**す
- ・**悩ましい点**:材料道具の充実と安定化。展覧会場などが縮小される傾向がある事への対応
- ・学校の図画工作や美術の授業に、伝統工芸の職人をゲストティーチャーとして招いて、普段接することが少ない 伝統工芸の技に触れる機会を設ける **悩ましい点**:謝金な とが学校では用意ができないこと
- ・良質なものを知る機会をつくる(体験する場)。自身で選ぶ 眼を持っていただく場づくりをしてみたい **悩ましい点**: 有識者、マスメディアなどの評価にとらわれがち。生活に 追われ(多忙、経済的)心のゆとりを失いがち
- ・若い人、海外の方々がわかりやすい作品を伝統工芸でつくり、まず興味を持ってもらいそこから本来の作品を知ってもらうのも一つの方法だと思います。九谷焼はそれで成功しているのでは?(九谷焼ウルトラマン、九谷焼カブトリングと)
- ・新たな材料への挑戦
- ・今の暮らしに向けた商品開発。デザイナー、バイヤー、つくり手だけでなく、使い手(消費者)を巻き込んだ手法。「みんなのとうぐ (Pint!)」で実践しています **悩ましい点**:
  「みんなのとうぐ」を地方で開催する際の移動コストなと。海外の方々向けの企画にする際の告知
- ・商品開発の失敗の処理と新しい塗装法
- ・各種展示会への出展 **悩ましい点**: 予算面
- ・HPさえ開設していない産地が複数あるので、解説の支援 や英語対応をすること **悩ましい点**:立ち上げまでは支援 できても、継続、更新していく体制の不在
- ・子どもたちにも工芸品を知ってもらう場づくり **悩ましい点**: 教育機関との連携
- ・そもそも認知されていない工芸。まずは存在していることを知ってほしい ・本物の技を継承している技術者(職人)の製作品のみを厳 選した展示会の開催(販売ノルマなし) **悩ましい点**:良い
- 会場だと経費がかかること
  ・①単なる商品開発にととまらない「良いものをつくりました→売れました→つくった人が儲かりました」だけでなく、周辺も少し恩恵をこうむるとか活性化するとか、普及認知が高まった、という波及効果のあるビジネスブランに組み込んだ商品開発。②目先の変わった新商品を生む段階を超えて、生み出した後に見方やあり方の変わるような商品を目指して、「ヴィジョンのある」商品開発を心がけたい。③業種にあわせた学校システム以外の工芸技術後継者育成のプログラムを開発 **悩ましい点**:とれも
- 実践者となる工芸技術者の意識改革
  ・工芸品にかかわる生産者は多くがファミリービジネスであり、高齢化、後継者難などが深刻化している。上記の問題に研究、教育の立場から支援したいと考えている。クールジャパンとして注目されつつあるが、より根本的に長寿企業、ファミリービジネスの支援、さらに日本文明といった深奥まで掘り下げて支援したい 悩ましい点:①国としての施策が断片的、局部的であり、総合施策が欠如している。②文明立国、日本精神高揚まで掘り下げた世論喚起ができていない。③消費者掘り起こし(若者を含む)欠如
- ・「製品」はもちろん、その「素材」は何かということをアピールする **悩ましい点**:日本の素材は特徴的であるため、対称となる工芸について深く理解した上でないと翻訳も難しく、映像製作は同様である。特に映像製作は専門的な視点が必要となる
- ・当該工芸品を周囲に見えるように日常的に使用すること ・より多くの人にいろいろな場面で工芸品が使われること をPR。多量、大量生産品と違い、なぜ手間ひまをかけて 生産するのかの情報提供。工芸品を手にする機会の創出 **悩ましい点**: ただ工芸品を見せるのでは見に来られた方の 印象に残りにくく、工芸品の歴史や技術などの特徴を分 りやすく伝えられないかと思います
- ・工芸品を身近なものとする。工芸品というと「ハードルが 高い」という意識を取り払う **悩ましい点**:現代の日常生 活のなかで、工芸品が入る余地が少ない
- 何が美しく素晴らしいのか、判断基準を間違えている場合が多い。今こそシステム、構造をつくりかえるときではないでしょうか
- ・80才すぎてもつくり続けて行くこと。子ともたちに「日本の良さ」を伝えること。子ともたちの「本物を見分ける 目」を育てること 悩ましい点:「日本の良さ」を知る大人が少なすぎること。「本物」を知る大人が少なすぎること
- ・実際の場で使用すること

- ・若手職人の上手者と呼べる仕事の発注。組合、協会などに 頼らないネットワークの形成 **悩ましい点**:購入者 (バト ロン的)の確保
- ・工芸を生で感じ、触れる
- ・工芸品の「良さ」を理解しやすいように、つくり手が入門 的に説明する場(展示会、ネット問わず)を増やす。一過性で なく継続することすることが必要 **悩ましい点**: 職人に出 演してもらうには一過性のイベントで終わってしまう (出演料金の確保がコスト的に難しい)
- ・多様化するライフスタイルに応じて生活のなかで、との ように豊かさを享受できるのか、イメージさせるための 見せ方の工夫が重要と思われる
- ・(自分では実践できませんが) 学校教育の場で工芸品の魅力 を伝えられる機会をつくる(小中高。子ともを通じて親も知 るきっかけづくりができるので)
- ・まずは日本人が日本の伝統産業をしらないと外国人など に伝えることは困難だと思う。なので、まずは日本国内に PR することを中心に……
- ・日本人が工芸品を活用する場面の創出、拡大。初等教育な とによる工芸品の魅力の浸透。工芸単品の売り込みでは なく、食、観光、ストーリーなどとのセットで売り込む 悩ましい点:生活様式の変化。セットでの売り込みをプロ デュースできる人材の確保
- ・工芸品と言っても人に使ってもらう品もあることから マーケティングを意識した戦略づくりが必要 **悩ましい** 点: 職人とマーケティングをどのようにつなげるか

・日本にある素晴らしい伝統工芸品をできるだけ使用した

- い **悩ましい点**: 価格が高額のものが多いので、気軽に購 入できないところが悩ましいです ・デザイナーや地域のものづくり企業とのコラボレーショ
- ンが大事だと思います ・工芸品展でもっと開催したらよいのでは?
- ・商品の購入
- 知って触れてもらうこと
- ・産地(産地の職人)に現実を受け止めるよう訴え、変化の必要性を促すこと
- ・産地の工房への外国人観光客誘致(バスツアーへの工房 〈 みこみ、旅館、飲食店他の文化施設等との連携など)
- ・ 江戸絵画などの収蔵資料を活用する。データを提供できるようにする **悩ましい点**:IOTに収蔵資料を活用できるようにするブラットフォーム
- ・良いものを使って覚えていただく品質の教育 **悩ましい** 点:通常の学校教育のなかに取り込みにくい

# Q2 「100年後に残したい」と思う、もしくはそのように多くの人に思ってもらえる、大切な品であるための条件とは、なんでしょうか。

# Q2-1 条件となるポイントとは?該当する内容と思われるものすべてにチェック「√」を、うち重要度の高いものには「★」マークをご記入ください。

□手の技 手づくりこその特徴が出ているもの □素材感 素材の特性が活かされているもの □デザイン 見た目のデザイン(意匠)の優れたもの □機能性 使いやすさと機能性が傑出しているもの □個性 時代を超越した、個性だと思われるもの □堅牢さ 100 年持つ丈夫なつくりのもの □時間性 長く見飽きないもの □つくり 蓋のかみ合わせなどの優れた仕組み □触感 ずっと触れていたいもの □日本産 日本の良質な天然素材を使っているもの □時代性 現代の社会で評価が高いもの □可動性収納美 持ち運べてしまっておけるもの □記念 記憶を呼び覚ます記念のもの □祭祀 祭祀、冠婚葬祭につかうもの □もてなし もてなしの場に使うもの □季節感 時季や時候の飾りにつかうもの □道具 伝統文化に必要な道具・衣装 □食 食文化をささえる機能をもつ □地域性 産地の特徴がわかるもの

・狭義のデザインではなく、これらすべてを包括したデザイン

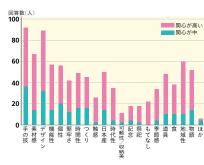
□物語 ストーリーやエピソードがあるもの

・金を出してくれるスポンサー

□ほか(

・人の気持ちにそえる作品

・製作に労力(多くの手間)がかけられているもの



# **Q2-2** ご自分にとっての「100年後に残したいことや大切な品」を教えてください。

- ・和室、床の間、華道、茶道具、着物の文化(私自身がこのような環境のなかで育ったせいか、和室が無くなって行くのは非常にさみしい)。要するに「茶道」の文化がさまざまな工芸品を包括している。堅苦しくなく、エリートの限られた世界でなく、日常のコミュニティーの場として若い人にも気楽に楽しめる「新しい茶道」の確立が、100年後の工芸のために大切な核になると思う
- ・「残したい」のではなく、「残る」ような技術、作品を目指しています
- ・日本文化の本質として工芸観の確立、「工芸」から 「KOUGEI」へ。工芸の技術(含む道具)・素材の継承。情報 発信(展覧会、ウェブ発信、シンポジウムなど)。作家の意識改 革(職人と芸術家)
- ・工芸の魅力をわかる日本人の眼力
- ・生活空間の変化に伴い、使いやすいものや美しいものも 変化すると思うが、つくり手の気持ちがより大切だと思う
- ・自らが創作した工芸品。奨学金育英会事業。美術館事業
- ・「品」そのものだけではなく、その「品」にまつわる背景が 大事だと思う。地域の仲間に自分が素晴らしいと感じる 芸術を体験してもらうために、事業の一部を予算として 計上している企業からいただいたブックエンド。地域の 産業の培った技術を現代の商品に転用し、新しい産業を つくり出す「再編集」「再構築」の仕組み
- ・心が動かされる芸術品。心が落ち着く景色。慌ただしい 毎日から抜け出せる空間。人の心が穏やかになるものや 空間
- ・品物は使うべきで、残すことを優先すべきでない。品は有 意義に消耗すべきではないか。残したいことは工芸の本 質に伝えられてきた「精神的なあり方」、つまり正しい認 識の「伝統」だり思う
- ・大枠では日本人の感性。日本人が使い手のことも考え、本
- 気でつくった道具、装飾品 モノだけではなく、コトが大切だと思います。Q2-1で★ をつけた物語がとても重要です。それはお茶の箱書と同 じことではないでしょうか。箱書きがなければ、共箱でな ければ価値が落ちるのと似ている気がします。仕覆をき せ、二重箱にし、由来や伝来を大切にしてきた。それは 100年でなく、もっと長い間伝えたい「何か」があったん だと思います。だから、今を生きるわれわれの時代なりの 物語をモノに付加することが必要と思います。モノ・コト に精神を伝えませんか? 私はその気持を大切にしたい
- ・現職ではまちづくり、地域創生に関連するアドバイザリー業務に従事していますが、各地域に固有の工芸にはつくり手の思いに加え、土地に対するアイデンティティが深く関わってくると感じています。その意味で100年後に「見られた」ときに、ある地域や文化とのつながりが容易に想起されるよすがとなる品や記憶(オーラルヒストリーなど)を残したいと思っております
- 染織工芸作品(屏風、額装パネル、染布) 日本人としての四季暦・二十四節季行事を愛で、生活とし
- て取り込んでいく「価値観」を醸成し残していかないと、そこが根源たるものことは残らないのではと考えます。一番端的な例として「呉服」を愛で着る、という日本人の「価値観」が薄れてきたのが織物衰退の根本原因です。一方で西陣しかり、コンテンツのポテンシャルとして上掲の項目はすべて備えています(当たり前の話ですが)、とすると根本原因を正さずにすでに備えている事項を「条件」として考察しても解決につながらないのではと考えます
- ・古より今日まで脈々と受け継がれてきたすべての伝統工

25

21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

 廳峯報告書Light.indb
 24-25

- 芸、祭事、伝統芸能。また、それらに必要な素材、道具、技 術、茶道 華道などの習わし
- ・工芸を支える職人さんや工芸家が使う道具の確保と伝承。 日本人のもつ真面目さ、几帳面さ
- ・武将茶人が残した文化・モノ・コトづくりを長く継承したい ・水黒画 水彩画を趣味でしているが 昨年北野天満宮の大広 間に100号の絵を奉納させていいただきました。ひ孫の目 に見てもらえれば幸いです。学問、習字の神様である(菅原 消真公)
- ・漆工芸、なかでも蒔絵芸術、工芸は残ってほしい。他国にな い文化だから
- ・21世紀初(今)も過去の伝統工芸におとらず優れたものをつ くり、使っていたな、と100年後の人々にも評価されたい
- ・雅楽器(特に管楽器に欠かせない煤竹) 邦楽器系(織物にも必
- に素材感や季節感などを盛り込んだもの
- 洒器 壁面 室内への装飾用工芸品
- 継続して使い続けられる作品(うつわに限らず、観て楽しんだ り考えたりする造形作品も含む)。後世に伝えていきたいと想 う作品(コレクションの一部)。現在は自分で預かっているが、 次の時代、そしてまた次の時代にもつながっていければと
- ・伝えられる人と伝えていくべき技術
- ・わが国の戦後70年は経済最優先のもとに、生活環境、遺産 を破壊し続けてきた歴史である。生活環境と寄り添うよう に育まれてきた工芸環境が同じ運命を辿るのは当然の結末 である。今かろうじて残っている遺産を積極的に活用し、壊 した環境を再構築すること、活きた工芸を取り戻そうとす るなら、生活空間の有り様を根本的に見直さない限り工芸 の未来はない
- 絵画、着物
- ・こころ、寛容
- ・文化と技術、日本人のつくり手の特徴と性格
- ・「百年後の古美術」、すなわち100年から200年後にも継承 される美術品を21世紀の今作家各位と大いに研究して手 がけたい。※わたしが主に関わる「工芸」は技術レベルでは 世界随一のものゆえに制作条件は他国に比べて恵まれてい ます。問題はその「引き出し」をいかに使うのかにつきます
- 伝統を守るだけではなく、新しいことを取り入れるスピ リット
- ・時代を越えたデザイン製品
- ・伝統工芸品である仏壇。新潟漆器や全国のすぐれた漆器。目 本全国の優れた地域の文化遺産(工芸家)
- 日本の伝統顔料、色材
- ・自給自足の生活のなかでつくられた物。日本人気質、精神 性、風土を観させられるもの
- 風土と伝統のある品
- ・①普段使いの食器、家具、什器からの制作道具にいたるまで 美しいと感じるものだけで生活し、ふさわしい食生活を送 ること。合理的ではない無駄なものに囲まれた豊かな生活。 ②明治初期の初版木版画図譜、江戸期染付、戦前、戦後の顔 料および膠などの絵画素材と道具。震度6強でも倒れない重 厚か家具
- ・日本の伝統衣装である着物。現在の「かたち」でなくても友 禅染、型絵染、絞りなど「手仕事」を100年後に残したい
- ・ただ単に古い、伝統があるのではなく、時代にあった意匠、 色、銘などから人の情感に訴える存在感があるもの。また、 見て使って楽しさ「ワクワク」感があるもの。老人たちが 培ってきた伝統を踏まえながら、現在の世界を広げ、遊び心 を持てるもの
- ・道具や材料は時代によって多少変化しても手仕事の基本は ずっと残したい。※分業製作の工程減少だけはふせぎたい
- 伝統の技があっての工芸であり、技の伝承を次世代の方に 教えたい。その時代時代にあった形状、デザインの展開がで きること
- ・平和な世の中。美しいもの、美しい自然、それを大切にする 心、そしてその教育
- ・逆のことですが、体験的に展覧会で展覧して百貨店で売ら れたものは売却先が不確かになるため、行き先が分らなく なる場合が多いです。残せるべき所蔵方法の多様性が増え ればよいのですが、Q2-1製作されたものに「情」があるかが 問題だと思いますが
- ・漆工芸。漆工芸制作にかかわる材料が道具
- 匠の技を持つ職人の技術
- ・100年後に残したいこと:上質なものたちを大事に使い続

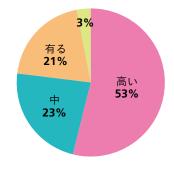
- けること。たとえば金継ぎした器、塗り直した漆器、染め 直した着物など美しるを保ちながら使い続けようとする 心を残したいと思います。大切な品:祖母、母から受け継 1.枯渇していく素材や道具について いだ着物。帯
- ・工芸品は単純な技能美が一番と思います。しかし高度な 技が必要とされるもの
- ・伝統的なものづくりに内包された人々の思い
- ・仕上げたものの安全性と丈夫さ。手の技・技術 良いものづくりを真面目にされている方がつくり続けら
- れるようになっていてほしいと思います。日本ならでは の木のものづくり、うるし、和服など。日々の暮らしのな かで使われ続けることが大事かと思っています
- ・漆器、他伝統工芸品など
- ・つくり手の方のものづくりに対する精神性 アルバル
- ・もてなしの心から、もてなすための「しつらえ」など、それ ・今後100年間ずっと、ほしい、使いたいと思っていただけ るもの
  - 伊勢神宮御装束神宝に関する製作技術のすべて
  - ・マイスター制度を残していきたい(日本国)
  - 現在認定されている人間国宝の技術、および伝産工芸品 指定産地の技法のうち最も古式の技法
  - ・ 思い出がある品、思い出があるグラス お皿の高級品
  - ・ 忘れ去られた日本文明(伝統工芸を含む芸術一般、日本精神、 仏教、神道など) 工芸品ひとつひとつの背後に存在する(し た)職人の物語
  - ・プライベートではなし
  - ・両親が新婚時から使用していた「どんぶり」
  - 特徴のあるデザインも必要だと思いますが、工芸品の技 は他にも応用できる可能性もあり、今後も残していく必 要のあるものだと思います
  - 画一的なもの(たとえば、駅前がどこでも同じになっているよう な現状)に進むなか、個性(地域性)(日本的なもの)を残したい
  - 塗り壁は日本古来の技術。100年後まで残したい
  - ・100年後、現代アート、工芸はどうなっているか誰もわか らない。しかし常に相手、他国の人々が私たちをどう見て いるかを考えている必要がある。常に一番誰もできない こと、何かに命がけでなければ残らない
  - 100年ではなく永久に残るもの。美術館等にコレクショ ンされている作品。多くの国内外でコレクションされて いる作品。その他、100点以上の作品
  - 京都らしいただずまい。「日本に京都があってよかった」 といってもらえる京都
  - ・100年後も生活の場で在り続けられる文化
  - 時間の境界線のない時代を感じる品。どの時代でも地に ついた存在感のある品。人と自然の匂いがただよう品。品 を通して自分と対話できる品
  - 100年後に残したいという考えはないが、子どもに残し たい品としては機械式の腕時計はメンテナンスの上、残 したいと思っている
  - ・100年後に残したいこと(もの)は女字を書く女化です。電 子機械が台頭してきて文字を書く機会が減ったなあと思 います。書くもの、筆圧、紙、様々なもので文字を書くこ とは気持ちを伝える手段になります。100年も経てば文 字なんて書かなくなるかもしれませんが、残していきた いなと思います
  - 日本人独特の「間」「空気感」「おもてなし」。 親から譲り受 けた身に着けるもの(水晶など)や使いやすい工芸品(わっ ぱ 漆の椀など
  - ・自分でつくった作品、世界に一つだけのものであるから
  - 職人さんたち(つくり手)の技術の確かさ

用いられる素材

- 思い入れのある記念品や製作物。使いこんだ品物
- ・現在進行形の物事を今後の資料となるように残していく
- 方法の最適解を見つけたいと思います ・生活文化のなかの美や歴史を体験でき、それを現代風に
- も国や産地に関わらず継承されていくといいと思います
- ・国技の相撲が世界的に愛されているように、工芸の技術

# 工芸をとりまく下記の課題について、関心度の高さを お知らせください。

有 無 関心度:3 2 1 0



#### 03-1-1 関心がある(1以上)と答えられた方に質問です。工芸 のために、すぐに実践できることは何でしょうか

- すぐに実践できるという質問からは異なる。遠回りな路 とは思うが、日本の自然風土、古来からの日本独自の伝統 女化、日本人の精神性を良い意味で(偏狭的愛国心ではな <) 若者たちに伝えることが大事
- 割高に感じても、つくり手の見える器を購入して毎日使 用する
- 国の女化財保護政策の拡大
- ・工芸を取り巻く環境やその危機を、ことあるごとに工芸 と関わりのない方々に話す、伝える
- 機械による大量生産という考え方の一新が必要である ・和の物を購入する、使う、体験する、鑑賞することに投資
- 価値の再認識→教育
- 情報を集約すること
- ・小さな子どもたちにより多くの工芸品にふれながら生活 できる環境をつくる。茶碗や湯飲みなど簡単なことから 始める
- ・子どものころからの工芸の授業を充実させて、工芸に慣 れ親しんだ人々を増やせばいい。教育改革や学力向上に 発想力、創作力、応用力のための工芸教育は大切
- ・基本的には大量生産品に囲まれている普通の人の日常に 本物を一つでも取り入れる文化をつくること。学校では 教室に一つずつ一輪挿しをおいて花を飾る。家庭科の時 間に本物の食器を使うなど可
- 素材、道具があって、つくり手、作品がある。そして使う 人がいる。そのストーリーを作って伝えること
- ・素材や技法の希少性を、現在のSNS世代に正しい情報と して発信し、周囲からの関心を喚起する
- 着物の普及、インテリア・テキスタイルの採用
- ・ どのような意味があって、その「つくり」に至るのかとい う「教育」が非常に重要と考えます。「教育」……学校で、 ということではなく恐らく70年代から現在で青春期/ 成人期を迎えた世代は本質的な日本の良き価値観の受容 が乏しく、次の世代に親として伝えていけない状況なの が根本課題です
- 現状を分析と対策の早急な取り組み
- ・生活のなかに取り入れて、実際に使用する
- 本物の漆のおはしを使う。人にプレゼントする。磁器のお 茶碗を使う。陶器の湯飲みを使う。着物を着る
- 購入すること。飾って、大数の人に見てもらう。 道具(使用 済み) の売却などのオークションがあれば参加したい
- ・工芸品が売れないといけない。売ることを考える
- ・まさに「用の美」を感じながら、美しい工芸品を使い続け るライフスタイルを確立することが必要でしょう
- · 関心はあります。工芸に興味があるので。だがこのCOI で「枯渇問題」を初めて知ったばかりで、具体的に何が枯 渇するかをまず知りたいです
- すぐにではないが、技術者の企業職員化、公務員化の議 論、検討は必要。避けては通れない
- 陶芸における原料の確保が重要です
- 可能な限り、作品から作者が見える作品を購入し日常使
- その貴重さ、大切さをことあるごとに人に話し、伝える。 人の輪がなければ支えられないと思う
- 代替品の検討、開発
- 関わるすべての人々の間のコミュニケーション

- ・より多くの人にPRし、使ってもらう
- 時間がかかっても各種(つくり手、職人などなど)後継人材 を育成する
- 情報整備
- ・木材……植林
- ・良いものを買い、使い、紹介する
- 素材や道具づくりの職人への国、府県、市レベルの援助。 貴重な工芸品も毎日普段使いし、機会あるごとに購入す
- リーゾナブルな価格帯をクリアーする
- ・割高に感じてもつくり手の見える器を購入して、日常的 に使っていくとともに、他の人たちにも使うチャンスの 輪を広げる
- ・良いものは良い。物の価値のわかる人を育てる。できるだ け多くの工芸品に触れる
- 素材、道具のどこが悪くなったかを知る人から聞き取り、 明記しておく
- メディアの関心を喚起する活動
- 制作者or地域が特定できるイメージが増幅できる食器を 使用する。修理に応じてくれる製作者のモノを使い続け る。製作者に直接会うまたは遠くから眺め、応援する
- 衣の素材である「日本の絹」の保護。和紙、刀、日本の素材 (道具)の保護
- 材料からつくり手までの見直し。材料も不足してきている 価格に納得し、購入する手仕事の品を探し続けること
- ・道具などの伝承、素材に対しての保護、助成を早急に行 う。少々高くても良い道具を手に入れて使い続け、製作に あたる。使う人材を育てる
- ・余裕があればすぐに使わなくても、次世代のために購入 しておきたい
- 安価な使い捨てのものに価値を見出すのではなく、高価 であっても長く使える良いものを選び、大切に使うこと
- 使い続けるということ。新規購入でもすでに手元にある ものでも使わなければ良し悪しがわからず、使い方まで 忘れてしまうと思います。傷や汚れなどのメンテナンス がわずかではありますが、素材道具の延命につながれば と思います
- 日常使っている食器を一点一点手づくりしている作家の 作品にしていく。気に入って購入したものは大切に扱う ので、結果長く使い続けることができる。
- 伝産品の場合、地域に関係した素材が基本であり、構造的 な問題を抱えているので、すぐ実践できることと言われ ても.....
- 材料の吟味
- ・自ら使用する。伝えることでより多くの方に知っていた だくこと
- 飾っておくものにせず使ってもらう。枯渇を防ぐ取組み を国や地方公共団体で行う ・できる限り日本のものづくり製品を身近に置く、周囲に
- 伝える. 勧める ・自分が買うこと。人に勧めること。国が技術者を育成する
- ・古物(漆器や指物など)の修繕を現在のつくり手に依頼する ・プレゼント、記念品など特別な贈答品にはよいもの、伝統
- 工芸品のようなものを選ぶ 広く知られるようになるための広報
- 骨董市で、のみ、かんななどの出物があるが、関心がある 者は極力集まる努力、実践をする
- ・できれば産地に行き、つくり手の見えるものを購入して いくのは重要だと思います
- 日本の良さは何かを考えること
- 人が集まり使われる茶会、パーティーなどにもっと使用 していくべきでないでしょうか
- ・「すぐに実践できること」はないと思います
- 事後にしか入金のない作品購入よりも、事前に入金があ り素材と道具にお金を回すことのできる購入の仕組みづ
- ・生活に取り入れて、日常の時間に変化を彩る
- 今存在するものを使う努力を継続する。それを周囲の人 たちに啓発する 現状を周知する
- 純国産で割高なものをつくり、ブランド化しつつ、プラス チックなどの安価な量産品で消費者の求めやすいものを 売り、身近に感じさせるといった頂点を高くすることと、 裾野を広げる対応
- 何らかの特徴(強み)をアピールする(単にきれいだけど、も のとしては使えない。レア度とかの付加価値)

- ・使用し続けること。また良さや使いやすさを周囲に発信
- ・ 生活に活用できる商品(自分の生活のスタイルに合う)を購
- 入し、使用する ・購入できる場所をもっと増やす。ネットなどの活用
- 自らも使うこと ・素材も後継者も最終製品が売れてこそ残り育つものなの で、シンプルかつ手ごろな価格の工芸品を製作する。(拘
- りすぎないこと) ・ 歴史 バックストーリーを伝える
- ・現在多く放送されている日本の工芸・文化に関する番組 を見ること。割高な工芸については、なぜ割高なのを知ろ うとすること。(つくり手側の伝えようとする意識も必要)
- ・ 公開(江戸絵画など)
- ・行事や祭りごとで使われるノベルティ類を日本製にする
- Q3-1-2 関心がある (1以上) と答えられた方に質問です。 年々廃業される方々の貴重な道具や素材を集めて、再活用す る方法を模索しています。それは同じ時代の同業者はもちろ ん、次の次代を担う若い人たちに利用してもらえるような、時 代を越えた道具・素材のストック・バンク、および使い方など の伝承施設を目指したものです。この機関に、自分はどのよう な形でご協力してもよいか、もしくはどうしたら、誰もが参画 しやすいか、何(具体的な道具・素材でも)に力を入れるべきかな ど、お教えください。
- ・これも専門からは離れると思うが、自然素材の良さ(健康 問題、公害、ゴミ問題、古くなるほど美しさに磨きがかかるなど) にみんなが気づくこと。そのことを若い人の教育に取り 組むことが、100年後を考えると大切ではないか
- 道具
- ・各地の伝統文化を小中学校において、その重要性を教え ること、工芸家は地域の小中学校に出向いて、工芸の意義 を伝えること
- ・各産地の担当する行政部署に情報が入るシステム。これ らが他の行政部署と情報交換できるシステム。以上の情 報を構築し、いつでも参画できるシステム
- 焼き物の場合、自分でつくる道具が大変たくさんある。道 具はあくまで自分のためであって、過去の道具をそのま まは持ち込めない→どのように変化させるかを考えるこ とが必要
- 機関への出資
- ・大切さを多くの人に認知してもらう運動に協力
- ・「捨てる」を「使う」につなげる仕事をしているので、仕組 みづくりや運営についてのアドバイス、現代の面白い素 材の供給が可能。伝統の道具とのマッチングが可能
- ・天然材料がどんどん規制され使えなくなっていますが、 通り一辺倒な規制ではなく、使う側が何に気をつけなけ れば害がないかと周知していくことが必要だと思いま す。京都にかつての三大産業とされた陶器、染織、漆工な と工芸のメジャーな美術館を創設して、世界にアピール できるようなアクティブな活動をしてほしい
- 多くの人が関わるために、人が集まりやすい便利な場所、 利便性が重要と思います
- 道具そのものの活用を行う際に 「どのように | 使うのか を伝えるための映像資料が共有されると効果が増すと
- (廃業者を減らすための努力がそもそも必要ですが) 廃業する のは需要がなく(少なく)、食べていけないという構図を変 える取り組みをすべきではと考えます(私見はQ1-2で記載 しております)。この構図が変わらない限り、次世代のつく
- り手が出てこないのでは ・お手伝いできることがあれば 手伝いたい思いはありま す。しかし、何をどうすればよいか知識の乏しい私にはわ
- ・広報の協力など
- 織物に関して素材である意図はもちろんのこと、いろい ろな道具が手に入りにくくなっている現状で上記のこと は大変興味があり、ぜひ参加したいです
- ・自分が参加できる方法。日本独自の工芸品の説明を英語 でつくる。マイカップ、マイおはしを持ち歩く ・Web、インターネット(Facebook)などで仲間の情報交換が
- ・製作道具の辞典(つくり方、仕入方など)をつくり、技術の伝
- ・修理、修復しながら使うことが肝要(茶道具の世界で「見立 て|があるが、本来とは違う使い方を考えることが、「オシャレ」

承につなげる。 箱物はダメ

- 「かっこいい」と思えるようになるのか?)。まずはこのことか ら作家たちの仕事を増やし、修理のための素材ニーズを 高め、全体で金を回すことから始めるのも一つのやり方
- 今の段階では、まだ具体的に思いつきません
- 情報の集約化 (ャンター化) とともに 物のストックも必 要。スペースが必要なので東京に限らない。場所を提供し てくれる人はいるのではないか。ただし、整理活用するた めの人が一定数必要だが
- 良い話だと思います。廃業するつもりはないので、再活用
- は積極的にしていきたいと考えています
- 海外の人々にアプリシエートしてもらう方策はないか? 神戸に「竹中大工道具館」があり、私は行っていませんが、 参考になるかもしれません
- ①自分:廃業されそうな方へのヒアリング、調査など。② 誰もが参画:集めたものの情報公開。使い方ワークショッ プを開く。異業種交流で新しい活路を見出す
- ・ストックバンクの考え方は良いと思います。弊所でも廃 業される方から道具類をお預かりして、必要とする若者 後継者たちにお渡しした例が数件あります
- 各都府県市町村の教育委員会の文化財保護に関わる人た ちの専門化 意識改革 全国の組織化と個別化
- その道具や素材のつくり方と活用方法を記録に残し、再 現できる状況を残しておく。またそれを時代に沿った形 へと開発する
- ・上記のごとく、美術を創生する世界では縁の下の力持ち の諸職人(指物、真田紐、袋物、修復などなど)の後継者が絶滅 危惧といっていいと思う。初等~専門教育の段階で啓蒙 ~育成へと展開するシステムが不可欠かと思います
- 産業情報の提供。若手職人の斡旋
- 私はできる範囲となりますが、ぜひご協力させてほしい。 誰もが参画しやすいためには、根底にある「日本文化の 心」をもっと理解してもらうこと、日常の生活文化を楽し み、社会づくりからできたらいいと考えます。具体的には
- 木地、漆に力を入れる つくっている材料、および情報を積極的に提供する
- ・素材、技術を地域別にデータ化しておく
- ストックバンクからの透明な情報 鍛治、原材料、各種器材・機材を機能させなければストッ クは枯渇する。廃業間近情報から引継ぎまで、一時的に即 席職人を雇い入れ、絶やさないことを優先させ、受注生産 基地を構築する。20~30代世代にストックバンク工房を シェアシステム化し、保存再生機能を持たせる。つまり、 環境を提供し個人能力に応じた独立支援をしていく。す べてを統括するプロデューサーが不可欠である。採算が
- 合わたい理由で廃業が多い占に保険をかける 自分のたずさわっている「和服」という分野において、 もっと安価に着やすい着物、着方をユーザーに提供した い。私は現在個展を開く折、単衣の着物(クリーニングが
- 楽)。半巾帯などをお客様に提示しています 道具などはどのように使用されるのかを、学校教育など
- プロだけでなく、誰もが利用できるようにすべき。有料で も使いたい人は多い そのようなところ(ストックバンク)が早くできて、みんな

に伝わるといい。ゴフン、ニカワ、筆、刃物類、木材など

- 材質の均一な安定化、相場によって急激に変動しない安 ・学校にある社会科資料室での保存、展示など。その道具を 扱っている職人のDVDなどの映像があると子どもたち
- の関心も高まると思われる 全面協力いたします!!
- 私は職人ではないため、もののご提供はできないですが 「素材のストックバンク」は取り組みたいと考えていまし た。やはり一般の方にとって、「素材」は、ものを使う、感 じるという面ではわかりやすい入り口だと思いますの で、力を入れていただきたいです
- 道具をつくる人がいなくなり、つくり方が変化しており ます。職人をやめた人の道具を組合などにストックする 買取でないと難しいと思います
- ・すごくいい取組みだと思う。協力したいと思う 業界にいる道具屋さんとうまく連携できるか、道具屋さ
- んの仕事を取ることなっていけない 個人的にですが、すでに私がそのことを実践しています。
- 廃業した伝統工芸職人の道具、材料などすべてをそのま ま保存するのは個人では限界があるので、むしろ何とか

27

21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

鷹峯報告書Light.indb 26-27 16/03/29 14:25 していただきたいです

- ・つくり手と接する機会がたくさんあるので 廃業を決めた らお知らせいただき、ストックバンクへとつなぎ、相談にの
- ・大学として対象道具、素材の収集・保存・公開。伝承施設を 大学として保有 維持することによる社会貢献は意義大と 考える。教育にも活用可能(クールジャパンの一環)
- 廃業されそうな人の情報提供、また道具、素材の使用方法な どの記録、整理、聞き取りなど
- ・プロモーション、現時点で関心を持っていない人にもリー チできる場所を持つ
- 共同での使用(共有化)。A氏もB氏もいずれ亡くなる。故に、 技術、道具を含めて共有できれば持続できるのでは
- ・誰もが参加しやすい際 製作体験の場を増やし 廃業された 方の道具を活用していく。道具はニーズがあるが、あれば、 全国規模の流通市場(たとえば、ネットでの販売)を構築するの はどうでしょう
- ことで成り立っています。その過程が大事なのではないで
- ・美術と工芸の間の問題、考え
- ・神戸の「竹中大工道具館」がありますが(このような館を見本 として)、お役所的機能でなく、常に道具を使う施設として 提案する場を設けるべきだ
- ・インセンティヴのついたクラウドファンディング
- ・ 先日 NHKBS プレミアム (平成14年放送の再放送番組) で絶 滅危惧・蒔絵筆の特集を拝見しました。文化方は1000種に わたる絶滅危惧の道具、素材をリストアップしていました。 筆はそのなかの一つ。石川の方々も個々にネズミの毛の入 手に尽力していましたが、現在でも筆の製作は難しいそう です。なかでも京都の村九商店さんは(筆屋)、放送された平 成14年から現在まで13年間もの間、一本もネズミ毛の筆を 制作できていないとのこと。これほど長くにわたり問題解 決の打開案が示されない現状に驚愕いたしました。他の動 物を探してみてはいかがなものでしょう
- 自ら体験して感じたことを伝える。伝え方を模索中
- ・再利用活用すべきものをネットなどで広く知らせ、提供し てもらう
- ・ファブラボのようなクリエイティブな人材が自然に集ま り、新しい使い方や価値を創造させるような、自由でオシャ レなクリエイティブスペースをつくることが重要
- 最近DIYというのがブームになっている。使われなくなっ た素材、道具をDIYができる工房に提供し使ってもらう 記念品、贈答品としての活用
- 各産地に対して求心力のある者が必要ではないか→道具の 提供者
- 若い人に興味を持ってもらえるようなアプローチ、格付け 伝統工芸品を作るための原材料や道具をデジタル化して記 録を残し、現物は美術館や博物館の保管庫で管理できない でしょうか
- 期間限定のカフェなどを開催し、広くアピールできる機会
- ・そういうものの良さを周りに伝えていく、使っていく
- ・ 道具 素材だけをストックしても「使える」かどうかは別問 題であるため、少なくともその道具の製作者やメンテナン スができる人物とのネットワーク構築をする必要がある
- 職人に作業現場から消費者との接点の現場に出てきてもら い対話していただく
- 後継者を育成するために技術習得に資する機関を充実さ せ、そこに道具や素材を集約し、ただ単にストックするので はなく、その機関が実施する技術者習得の場でも活用した らいかがか
- 地域づくりコミュニティーが盛んになってきているので、 そういうコミュニティーと共同してワークショップなどを 開催するなど
- Web サイトの構築 まずは共同研究
- デザイン業界への告知・PR

#### 2. 工芸をめぐる情報システム構築について

高 有無 関心度:3 2 1 0



Q3-2 関心がある (1以上) と答えられた方に質問です。 ・道具や素材は、人の手ではできなくなることを、手でつくる 日本の工芸について、「情報システム」の不足がさまざまな場 で問題とされています。では、日本全体の工芸に関する情報 で、何が足りないと思われますか。まだ「何」と「何」を重点的 につなぐ必要があると思われますでしょうか、該当するもの すべての項目「√ 」うち重要度の高いと思われるものに「★ | マークをご記入ください。なお既存の取り組みがある場合も、 現状よりも効果を上げるため必要な点などのご意見がある際 には、空いた場所にご記入ください。

> □見たい、触れたい、買いたい、といった、出口需要を増や すためのもの(国内及び国外向け)

> □運搬∕輸出入∕翻訳∕流通等のプロフェッショナルを全 国に繋ぐもの □全地域・ジャンル別 対国別・文化別の継続的なマーケ

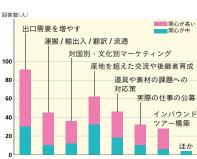
> ティングを促進するコンソーシアムの形成 □全地域・ジャンル別 つくり手×つくり手×学生 産地を

超えた交流や後継者育成を目的とするもの □全地域・ジャンル別 道具や素材の課題への対応策をつ

くるもの □全地域·ジャンル別 実際の仕事の公募×つくり手·つな

ぎ手 □全地域・ジャンル別 インバウンドツアーのネットワー ク構築

- ・参加できること。情報発信だけにしない。クックパッド型 が良いのでは?
- 建築や美術館に美術工芸が入りやすくするための法的改
- ・出口につきると思います。
- ・つくり手側の「良質な危機意識」と「枠を超えたクリエイ ション を喚起させる情報
- ・不足よりも、どのようにしたら偏りのない情報収集がで きるかわからないです
- ・運搬~つなぐもの:職人と個別対応するシステム
- マーケティング:海外マーケティングのデータを一覧で きて、報告およびデータベースが必要
- 工芸そのものをアピールすること
- ・ 各産地の横の連携(異業種を含む)を構築
- 情報にできないアナログ的なものをどう処理するか。ス テークホルダー間のネットワークをどう形成するか
- 既成概念にとらわれないクリエイティブ人材の活用



#### 白由诵信欄

- ・工芸に関わる科学技術 そして素材を工芸以外にどのよ うに活用するのか。それをもとに工芸領域の拡大を図り、 本来の工芸を守る
- 技能を次代にどのように継承し、外部に発信し魅力を高 めるか。皆様のご議論から学ばせていただきたいと思っ ております
- 素材・技術・思想 (感性) が工芸の三大要素であると思う が、特に何をつくるか、何を表現するのかが一番大切であ る。つくり手はそのために何をするかだと思います
- 京都1200年のみやこの伝統文化(工芸)を、何としても残 して次の時代に引継ぎたい
- ・いろいろ問題があるなかで、需要サイドのライフスタイ ル変化にともなって工芸物に対する関心が低下してきて いることが、一番の問題ではないでしょうか。今のライフ スタイルのなかで、長く使ってもらうことのできる作品 の提案こそが、まず考えなければいけないと思います
- ・ 女化庁 と 経済産業省 農林水産省 国土交涌省(観光庁)や 地方公共団体のつなぎ方をどうすればいのか。会場でご
- ・工芸は手仕事であるというだけでなく、各産地の風土や 社会文化を体現しているからこそ面白い。工芸の伝承は 地域文化の見直し、再考策とセットだと考える
- 工芸分野について、個々に考え取り組みをしている民間 企業も多くあるが、それらを集結させた大きな力が必要 だと考える
- これから日本から世界に発信するアートは、工芸的技術 に裏づけされたものであると思っている
- 行政、団体などがいろいろなことをされることも大切で すが、ものをつくっている人々の変革が必要
- フォーラムでは流通面を担う方々と、職人さん方の販売 に関する議論を期待しています
- 知られてないから、伝わってないから消えていくケース を避けたい
- 若手の話をよく聞くことが大切です
- ・職人が食べられない国は一流ではないと思います
- マーケット、公募→ジャンル別、ネットワーク→全国



#### 青柳正規[文化庁長官]

このような素晴らしい会議の開催について心からお喜び申し上げます。むしろ、このよ うな会議が開催されるほどに、日本の工芸は危機に面しているということを感じざるを得 ないと思います。こちらが対象にしている美術工芸は本当に素晴らしい日本の工芸です が、たとえば経済産業省で「伝統的工芸品」という政策を行なっており、伝統的工芸品が 生産額は1983年のピーク時には5300億ほどありましたが、2013年には1500億つまり3 分の1以下になっています。住宅のなかに畳のある部屋も減ってしまっているという生活 様式の変化、競争相手の国々が類似品を安値でつくるなどというさまざまな要因がありま すが、このような状態になってしまっているからこそ、このような会議が開催されるのだ と自分は認識しています。

わが国の素晴らしい工芸は、明治近代化のなかでもさまざまな万博で外貨を稼ぐための 手段として大変な人気がありました。かつて芸術工芸員という制度、いまから考えれば人 間国宝に値するものですが、伝統を守っていこうという制度がありました。事実、ヨー ロッパでは早く近代化を成し遂げ、工業生産化に移ったゆえに手工業でのものづくりが 早々に衰えていってしまったなか、日本は100年以上遅れて工業化、近代化を開始したた め、幸いなことに江戸の時代まで蓄積した伝統工芸技術や手仕事が残り、われわれの生活 のなかで工芸というものは非常に大切な役割をしています。しかも工芸のなかには繊細さ や精妙さ、優美さ、つきつめた技の美というものがあり、私たちの精神にしっかりと根ざ しているそれらの融和性こそが、日本文化を支える核になっており、形あるものとして常 に私たちにそのことを確認させてくれています。もはや形だけでなく日本の精神の根幹を 支える一部になっているわけであります。

それが今や大変な危機に陥っていることを、ここにいらっしゃる皆さんと危機感を共有 し、これから100年の工芸をどうして行くか知恵を持ち寄り、実行していきましょう。そ うすることでわが国の工芸を守っていく、そして工芸を守ることはわが国の文化を守るこ とでもあると、ぜひお考えいただきたいと思います。このことで思い出されるのが、アフ ガニスタンがタリバンから開放されたときのことです。カブール国立博物館の正面に「そ の国の文化が続くかぎりその国は生き続ける」という垂れ幕が掲げられ、私はその言葉に 大変感銘をうけました。日本の場合には「工芸が残る限り、日本文化は続く」といえるほ ど重要であるということをぜひお考えいただいて、これから100年の工芸のための方策を 皆さんでご討議いただければと思います。



[文化庁長官]

#### 祝辞

#### 藤田裕之「京都市副市長」

まずは本フォーラム開催にあたり御尽力いただいたオールジャパン工芸連携実行委員会 代表であり、元文化庁長官である林田英樹先生はじめ多くの皆様に心から敬意を表します とともに、100年後における工芸のための普及啓発実行委員会の柳原正樹京都国立近代美 術館館長はじめ実行委員会の皆様に感謝を申し上げたいと思います。

京都市におきましては、今年は本阿弥光悦が徳川家康から鷹峯の地を賜った、琳派 400 年という大変記念すべき年を迎えています。各種展覧会は、多くの関係者の御尽力により 盛会でした。琳派の影響は、いわゆる絵画にとどまらず、さまざまな工芸、文学などにお いて広く市民の皆さんの生活のなかに周知されていることは心強く、文化芸術の振興に関 しましては、われわれとしても全力をつくして取り組んでいきたいと思っております。

琳派 400 年の取り組みが年末クライマックスを迎えておりますが、来年1月14日から 京都市美術館では「琳派 400 記念 一琳派降臨―近世・近代・現代の『琳派コード』を 巡って」という展覧会を締めくくりとして開催します。同時にこうした琳派の取り組みだ けでなく、芸術・工芸を盛り上げていく取り組みは継続性が重要であると思いますが、幸



藤田裕之 「京都市副市長]

21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集 29

鷹峯報告書Light.indb 28-29 16/03/29 14:25 い京都にはそのような題材が数多くあります。昨日も上賀茂神社で「琳派 400 記念 一琳派降臨―近世・近代・現代の『琳派コードを巡って」のプレイベントを本事業の一環として行いましたが、こうした京都ならではの取り組みをこれからも全国に発信していきたい、全国から御来場いただいたそうそうたる皆様からの御指導を仰ぎながら取り組んでいきたいと思っております。

さて、本市には京都市産業技術研究所という施設があります。この機関の前身は 1916 (大正5) 年、京都市染織試験場として誕生し、西陣織や京友禅の職人さんとともにさまざ キカ研究技術開発に取り組んでもいりもした。 そうした取り組みは現在では染織のみなら ず、窯業、あるいは日本酒開発など、広く工芸・産業に関する支援、発展に寄与している ところであります。わが国の指定となっている伝統工芸品は京都市には17品目あり、ま た京都市独自で指定しているものを含めると74品目ありますが、そのような京都が引継 いできた伝統工芸の最たる財産は京都迎賓館です。赤坂離宮の迎賓館が西洋の宮殿建築に 大きな影響を受けているのに対し、京都の迎賓館は日本の伝統技術の粋を尽した建物であ ります。多くの設えや調度品に京都の伝統工芸が活用されており、全世界からお越しにな る賓客から高い評価を得ています。ここ国立京都国際会館においても、さらに大きなホー ルが国により整備され、その調度品や設えを国の支援を得て用意する運びになっています が、京都の伝統工芸をしっかりと活用し、さすが京都の施設だなと評価される取り組みを 進めて行きたいと思っております。同時にいかにすばらしい伝統工芸があってもそれが市 民生活のなかで息づき、定着して利用されるということがなければ、次の世代につながっ ていくのは難しく、京都市民の生活のなかで伝統工芸が愛され、利用され、そして継がれ ていくということが必要だと思っています。今日の食文化にまつわる食器や器、設え、着 物文化、あるいは京都の花街の文化に生かされ引継がれている精神、地域に根ざしている 地蔵盆など、日常生活のなかに伝統文化がいかに生かされ、また密接に関わっているかと いうことを広めているところです。

京都市では、『日本に、京都があってよかった。』というキャッチコピーを使用しています。他都市の方からそのように評価していただくため、私たち京都に住んでいる人間、また京都で活動している人間が工夫して日本の文化をつないでいくことは京都の使命であると感じております。今、われわれオール京都で文化庁の移転について、強く要望させていただいております。東京一極集中をこのまま継続していけば文化的な国土の強靭化は危うくなるのではと危惧しており、文化庁の機能を京都に移転していただくことにより、地方創生においても重要な役割が果たせると確信いたします。国際的にも日本が文化国家として評価をいただけるようオール京都で進めていきたいと思っておりますので、本日お集まりの皆さんに御理解御協力を賜りたくお願い申し上げます。本日のシンポジウムを皮切りにして京都から日本の工芸に関わる更なる連携強化がおこなわれ、100年後の工芸の未来が輝かしくなることを祈念して、京都市を代表した挨拶とさせていただきます。

#### 意見交換·円卓会議

ファシリテーター・塩瀬隆之 [京都大学総合博物館准教授]: 私はもともと熟練技の伝承システムという研究をしておりまして、自動車や鉄鋼メーカーなどの熟練者の技をシステム化・ロボット化するとか、次の弟子をいかに育てるか、師匠が黙して語らず、なかなか話してくれないのにどうやって次の世代につなげるかという研究をしております。 それ以外にも自閉症などコミュニケーション障害をお持ちのお子さんと話せるコミュニケーションロボットの研究をするところから、コミュニケーションとはいかに伝えるかよりもいかに伝わるかということが重要であるという研究をしておりまして、いろいろな場面でなかなか伝わりにくいものをお手伝いするという仕事をしております。

今日皆さんにお配りしているフォーマットに三つの問いがあります。100年後に残りそうなもの、工芸を100年後に残すには何をすればよいか、工芸のオールジャパンができたときに最初にすべきことは、という質問があります。これを皆さんと一緒に考えられたらと思っております。お話をしている90分の間に皆さんにも考えていただいて、休み時間に回収し、レビューの際に紹介したいと思います。

#### • 工芸にまつわる現況

本日、つくり手・つなぎ手・つかい手という立場でご出席いただいていると思いますが、まず事前に工芸の現況について事務局サイドで収集していたものを共有したいと思い



塩瀬隆之 [京都大学総合博物館准教授]

ます。

使うという場面において、先ほどの青柳長官の話にもありましたが、生活スタイルが変化 してきたことにより工芸品を使うことそのものが減少していると言われています。また、 旅館や飲食店におけるお椀の利用減少といったことも考えられるかと思います。

情報面ではメディアの露出が減少しているのではないか、また、工芸における書籍や雑誌が減少しているのではないかといったことが挙げられます。しかし、そもそもテレビを見る機会、雑誌や新聞を読む時間自体が減ってきおり、メディアそのものの発信力、影響力というものが小さくなってきたということが言え、メディアで何かを紹介するということが通用しなくなってきていますので、どう工芸をアピールしたらいいのか、難しいところです

つなぎ手という観点でみると、流通の仕組みが多様化し、価格の混乱が起きて販売店が 扱いにくくなり、専門店、専門販売員が減少しています。インターネットによる直販はつ くり手とつかい手の方が直接つながるチャンスではあるのですが、今まではつなぎ手がお もに専門的な目利きをしていたところを、直接購入ではつかい手側に要求されます。その 良し悪しがわかる人しかチャネル(経路)につないでもらえず、つかい手自身の目利き力 が弱まれば直販はだんだん先細りになってしまいます。現在の流通形態のなかで、本当に 使ってもらえる人にどのように工芸の良さを伝えるのか、改めて考える必要があります。

それから、つくり手のなかでもずっと言われていることだと思いますが、後継者不足が 挙げられます。分業制が成り立たず、自分のところでは体制が整っているのだが、道具や 素材に関しての職人さんが廃業してしまうなど、自分の手元まで道具・素材自体が届かな いなどの課題があります。それから専門校、訓練校の卒業生に関しても、就職を考えたと きに実際に興味・魅力を感じている工芸の分野でそのまま仕事につける人はどれくらいの 割合がいるのか、学校側もとのくらいの人材を輩出していけるのか、悩ましいところです。 ただこういった課題ばかりではなく、一部のメディアでは工芸品をリアレンジしたり、 デザイナーとコラボレーションしたりした商品がすごく売れている、とメディアに取り上 げられるようになりました。昭和時代につくられた生活用品をセレクトしたリサイクル ショップが人気といった情報もあります。幕末から明治の細密の工芸に注目が集まるとい うことも聞きますし、民芸や生活工芸ブーム、百貨店などの催事で記録的な集客があっ た、という話を耳にすると、工芸はまだ魅力的なコンテンツでそれがわかる人にはしっか りと届いているようにも思われます。皆が皆困っているというわけではありませんが、そ れは一部かもしれません。

また、生産地に関しては、工芸が地域資源、シンボルとして認識され始めています。これは地方創生というなかで、各地域が何処でも同じものを出すのではなく地域としての特色を出そうとしたとき、やはりそこですがるものは文化伝統を引き継いできた工芸ではなかろうか、という再注目があります。給食の器やイベントのなかでの賞、記念品などに地域の工芸産品が採用されるなどの事例もあります。

以上を、工芸を取り巻く現況の全体像とさせていただきたいと思います。

#### 三つの問い

工芸を取り巻く現況を踏まえ、今回メインシンポジウムのテーマは「100 年後に残る工芸のために」です。100 年後のことを考えることは難しいし、100 年先を生きている人がいるかといった点でリアリティーにかけてしまいますが、それでも 100 年後を考えることが重要だと考え、このタイトルがついているのだと思います。そのなかで一つ紹介したい本があります。1920(大正9) 年に発刊され最近リバイバル版が出版された『百年後の日本』という本です。今から 95 年前に書かれていることが、今から 5 年後に実現されるものもあれば、そうでないものもあります。このなかに言い当てられているものがいくつかあります。「選挙権が 18 歳になる」「女性が大臣になる」などです。これは当たってはいませんが、「火星旅行ができるようになって中継地に富士山が決まる」という予測も書かれています。また「繊維産業が勃興して世界一の富のある国になる」というのもあります。繊維産業というところはもしかしたら当たっていないかもしれませんが、世界一の富のある国になるというのは実際に果たした部分はあるかと思います。やはり 100 年前に予測するのは難しいと個々に執筆されている方々も書かれていますが、こうなるはずだ、こうなってほしい、こうに違いないということがたくさん書かれてあります。このなかで皆さんと一緒に 100 年というものを、三つの問いについて考えてみたいと思います。

まず一つ目は「100 年後まで残るというもの」、工芸に限らず 100 年後に残るということはどういうことか考えたいと思います。配布した紙 1 枚目の真ん中にある、100 年後と

21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

鷹峯報告書Light.indb 30-31 16/03/29 14:25

書かれた四角の近くに、100年後に残るものを、逆に残らなそうなものを端のほうに書い ていただきたいと思います。また簡単な理由も書いてください。二つ目の問い、「100年 後に残るというのはどういうことか」を考えましたら、次は「工芸を 100 年後に残すには どうすればいいか」、独自の作戦を考えてください。作戦というのは、10歳の子どもたち に同じ問いをしたときの言葉をそのまま使わせていただきました。

12月1日に子どもたちと「こども未来工芸」というワークショップを行いました。私 はつくり手からみたときにどのように伝えるかだけではなく、いかに伝わるかということ を常に大事にしているので、受け手としての子どもたちには、工芸というものは身近なも のであろうかと思いました。大切なものだとは教わったとしても、これは食器棚の奥にし まってあるから大切なのか、美術館に飾られているから大切なのか、10歳の子どもたちは 自分の言葉でなぜそれが大切かを説明する練習をそもそもしたことがないのだと思いま す。そうしたなか、「こども未来工芸」では、漆の重箱を使って、楽しい経験をしてもら うことを重視し、漆の重箱のなかにお菓子をつめてお友だちをもてなしました。6人で一 つの重箱、140人で24の重箱をつくってもらい、そのなかにいろいろなお菓子をつめてお 友達のグループへおもてなしをしに行きました。そのとき、お重箱を前に140人の子ども たちの笑顔が集まり、工芸品を前に開けようとする瞬間のワクワクドキドキする表情、こ れ自体が重要だと思いました。子どもたちがそこで楽しい経験をすれば、お正月の御節の 前後、お友だちが来るときにお重箱でおもてなしをしよう、他にも使えるかもしれないな ど、自分たちの生活のなかにいかに工芸品が加わるかを考えてくれるのではないかと思い ました。それを体験してもらった後に、先ほどの100年後まで残るものは何かを書いても らいました。そのなかで近くにスカイツリー、遠くにノートなどと書かれていますが、近 くに重箱など伝統工芸品を書いてくれるようになれば、私たちは何かを届けたということ になると思います。歴史をいかに子ともたちに伝えるかよりも、いかに生活のなかに密着 しているかという体験をつくることが重要かと思います。このときは授業のテーマで工芸 の前に「伝統」という言葉をつけましたが、100年のちに残すにはどうすればいいか作戦 のなかに、10歳の子どもたちが考えた面白いものがあったので四つ紹介したいと思いま す。一つ目は「京都大阪からの日本中伝統セービングプログラム。たくさんの伝統が残る ように日本中の人々がきれいに扱ったり残したりするような連絡網、ネットワークをつく る」と書いてあり、これはまさに今日皆さんがお集まりのオールジャパン工芸連携そのも のではなかろうかと思います。右上は「伝統工芸に親しんでもらう大作戦」とあります。 やはり「伝統工芸に関係がある人は誰ですか?」と子どもたちにたずねると「職人さん」 「おじいちゃん」「おばあちゃん」と返ってきて、「サラリーマン」や「小学生」は関係が ない、と遠いところに思い描いてしまうので、それをまず近づけ、親しんでもらう。そし て、みんなが伝えることができれば残るのではないか、と子どもたちが考えてくれまし た。左下にあるのは「倉庫がちがち」と書いてありますが、大事なものを倉庫に入れて未 来まで残していく方法です。しかしこれは、残したことになるのかならないのか、という ことにつながります。100年後まで工芸品そのものを残すのであれば、タイムカプセルで 厳重に管理してどこかに埋めておけば100年後に残るのかもしれません。しかし、開けた 人がそれが何だかわからないのであれば、それは多分残したことにはなりません。右下に あるのは「レシピコピー大作戦」。これは画期的なことだと思うのですが、「伝統工芸のつ くり方を書いたものを何億枚つくるのを日常的にする。そうすればものすごい数できて絶 滅しなくなるのではないか」と書いてあります。これは産業界のなかで叫ばれている 「オープンイノベーション」「オープンソース」そのものではないでしょうか。つくり方、 工法を公開してしまい、みんなでつくり、みんなで使う場面をいかに増やすかということ です。これは最近の近代産業のなかでも、特に日本企業が遅れていると言われていること です。つくる工程を公開するというのはなかなか難しいところがあります。最近出てきた 筋電義手という表面筋電位を動かして使う義手の研究分野において、今年グッドデザイン 賞を受賞した exiii (イクシー) という日本の会社が、世界中でつくってもらうように、今つ くっている最先端の筋電義手のつくり方や 3D プリントデータを全部インターネットで公 開しました。つくっている大事なレシピを公開するというのは、旧来の産業からすると考 えられないことです。実際には、それをつくった世界中の人がまたそれを新しくするため にもとのところに相談に行くという流れが起き、結果として需要が広がっていくのです ね。このように自分たちがつくるものを使う人がいかに増えるか、ということを最初に考 えて動き出している若手たちがたくさんいます。そういう意味では「レシピコピー作戦」 は大変重要な作戦ではないかと思います。このように 10 歳の小学生が考えた程度のアイ デアといえばアイデアですが、逆を言えばそのアイデアを大人は実践できているのでしょ

うか。全部実践したけれど通用しなかったといえるのか、まだ余地は残っていてやるべき ことはたくさんあるのだけど実際に行動していないだけかもしれません。アイデアとして 出すのはいくらでもできますが、それを実際に行動に移すということがとても重要かと思 います。そういうことを踏まえた上で、100年後まで残るものを工芸に限らず三つ四つ書 いていただいてもよろしいでしょうか。それを踏まえて、100年後に残すにはどうしたら よいか、今残りそうなものが残っている理由を、工芸と結び付けていけばいいのかと思い ます。残っているもののなかには残したくないけれども残っているものもあるかもしれま せんし、残したいものがなぜ残らないのかがあると思います。

#### • 事前調査結果報告

今回「100年後における工芸のために」という会議を開催するにあたり、事前調査をア ンケートという形でお送りさせていただきました。全国 111 人の有識者の方からご回答い ただき、今回このなかから51名の方にご出席いただいております。ここからは、その 方々のご意見とともに補足など含めてお話をおうかがいしながら、一緒にこのなかで考え たことを皆様に共有できたらと思います。

今回のアンケートに、つくり手、つかい手、つなぎ手など関わり方のバリエーションや年 代も多様な方々からご回答いただいているという円グラフになります。次にご出身である とか、今在住されている、お仕事でかかわりが深い場所を三つばかり回答いただいている と思います。今回は京都、次回は東京で開催されるということで、京都、東京を中心では ありますが、日本全国の工芸に関わっていらっしゃる方々からご回答いただいているとい うのがわかるかと思います。

まず Q1 として「今まで工芸に関わりの無かった方、外国人の方や子どもたちに工芸品 の魅力を伝えるために日本全体の工芸関連機関が実施すべきことはなにか」。そのなかで 皆さんに実施すべきだといただいたものは、一つは「情報の欲しい人の目線に立った情報 網」、「Web の構築」、「他の国の人の視点からみた解説」です。実際問い合わせとして多 いのも「ウェブ」であるとか「説明用の案内版を用意する」などアンケート回答内容を事 務局で整理しています。最近ずっと叫ばれている「英語の対応」や、また英語だけなく 「中国語、スペイン語とか別の言語にも対応できたほうがいいのではないか」という回答 もあります。外国語対応では、やはり英語が一番多く回答をいただいていますが、中国語 も需要視されています。

それから「取引するところではクレジットカードを使えるようにする」というのもあり ます。実際にインターネットの口コミで観光にらっしゃる外国人の方がたくさんいらっ しゃるのですが、バスが一本あるかどうかわからないところで工房にお邪魔して外国人の 方がそれを気に入ったときに現金をいつもお持ちとは限りませんし、クレジットカードを 多く使う外国の方に対応できるようにするのは重要なことですが、その対応ができていな いのが現状です。

子どもたちに関しても、「教育の場で実際大切さを教えるべきだ」、「歴史を教えるべ き」、「美術館、博物館などで子ども向けワークショップをする」などの回答をいただいて います。「教育の場でできることで何ができるか」という問いに関しても、「子どものころ にいい作品に触れるのが最も重要である」、「わくわく楽しく工芸に触れる体験が重要であ る」、「少なくとも地域の工芸を知る機会をつくる」という意見が寄せられました。美術 館、博物館への期待としてでもあると思いますが、「所蔵されている工芸品の画像使用な どをフリーにする」などもありました。最近、アメリカのスミソニアン博物館など欧米の 博物館でもデジタルライブラリーを設けており、浮世絵のデジタル画などを商用利用も含 めて使えるようにしているところもたくさん出てきています。画像データをみんなで共有 するという場面もだんだん増えてきているように思います。

あとは自由記載欄のところにいろいろ書いていただいた方で、会場にお越しいただいて いらっしゃる方もいますので、補足という形でお話いただけたらと思います。アンケート では「学校に工芸品の展示ができればいいのでは」というお言葉もいただきましたが、同 時に「壊れるリスクもある」というコメントがありました。川越さんの回答で、「1. 商品 開発が、周辺も恩恵を受けたり、活性化したりする波及効果のあるビジネスプランに組み 込んだ商品開発、2. 生み出した後に見方やあり方の変わるような商品、『ヴィジョンのあ る』商品開発、3. 業種に合わせた学校システム以外の工芸技術後継者育成のプログラムを 開発」といただきました。とくにヴィジョンという言葉が重要かと思いますので、このあ たりをお話いただけたらと思います。

川越仁恵[つくるフォーラム総合監修アドバイザー/日本経済大学経営学部専任講師]:2番は長くなるので1 番と3番だけお話します。1番は、私が今まで産地や組合と一緒に商品開発をした際、そ の新商品がとても売れることがあります。しかし、それはその事業者さんや作家さんが儲 かったというだけに留まってしまうので、それも大事ですが、願わくば周辺の地域や人々 にも活性化が及ぶような広がりをもった商品開発をしたいと思っております。3番は、県 立の漆芸研究所や美大といった学校というシステムでいろいろな伝統技術を教えています が、これと同時に従来の工房や職人さんのところでは、いわゆる徒弟制のようなものが今 でもあります。ただ徒弟制も学校のような教育システムも、利点と欠点が両方あります。 とくに徒弟制は現在では親方のほうも受け入れがしにくいし、弟子のほうも粘り強く教え を乞い、修業期間を終えるのが難しい。そういったところには厚生労働省が比較的着眼し ておりまして、徒弟制と学校を組み合わせたようなうまい仕組みをつくり上げています。 これに工芸産業も倣うべきで、業種によって産業システムの特徴がありますので、それに あわせて徒弟と学校教育のいいところを組みあわせた後継者育成のプログラムを開発した いと思っております。悩ましいところは、プログラムを実践する親方がこれまで自分が慣 れ親しんできた徒弟制の観念に縛られずに新しいシステムを受け入れられるか、というこ とです。

塩瀬隆之: ありがとうございます。つぎに、アンケートでは「工芸というのを海外向けに とんとん発信していったらいいのではないか」という意見と、悩ましい点として「工芸に 詳しい人にはわかってもらえるがそうでない人にはわかってもらえない」といった意見が 挙げられています。川村さんから「在外公館での積極的な企画展示を行う。海外での和 食、和の住空間の普及促進を行う企画事業」とご意見いただいているので、補足いただけ たらと思います

川村喜久 [DIC グラフィックス取締役会長]: 基本的に需要が不足しているというのが大の問題で、日本のなかだけでなくて世界でいかに需要を創造していくか、頑なに伝統に拘るのではなく、その地域の生活様式に合わせた新たな作品づくりを通し、日本の宝ではなく世界の宝にしていく、ということを考えなければならないと思います。先日、和食が世界遺産に登録されましたので、ぜひとも工芸を世界遺産に登録できるような活動をしていけばいいのではと思いました。日本の大使館や現地の日本人会、美術館やギャラリーで日本の工芸品を普及させるような企画展示即売会を行う。また、海外での和食ブームを一つの契機として、日本の食文化や和の空間を祇園から芸姑さんも一緒に行ってもらって紹介するイベントを行う、和の空間をそのまま輸出・展開することによって、日本の和食や工芸に対する文化の理解を深めていただき、工芸の普及につなげていくということを行ってみてはいかがでしょうか。

塩瀬隆之:「もの」を輸出するだけではなく、文化を輸出するというのが大事なことですね。和食で言いますと、料理そのものだけでなく、その食べ方、どんなときに食べるのか、食べるための習慣も含めて共有しないとなかなか広まらないものが、和食はそういった力をだんだん込めていったのだと思います。日本に入ってきたものだとコーヒーなどはまさにそうで、朝にコーヒーを一杯飲むというもともと日本になかった習慣とエスプレッソマシーンが一緒に紹介された、ということがあります。工芸品も「もの」というだけではなく「文化」として届けていくというのは一つの手段なのではと思います。

次に Q2、「100 年後に残したいと思う、もしくはそのように多くの人に思ってもらえる大切な品であるための条件とは」。これはかなり抽象的な質問の仕方にはなりますが、先ほどの「100 年後に残るのは」と同じようなものかと思います。ただ、実際いただいている回答のなかでも「条件となるポイントは何か」の項目全部にチェックをいただき、重要だというチェックもたくさんいただいていますので、項目全部を満たすものこそ 100 年後に残るのだという想いもあるのでしょう。方や一つもチェックをいただかなかったものもあり、「そこよりも大事なものがあるのではないか」というご意見もいただきました。そのなかでお一人、石黒さんから「日本人としての四季暦・二十四節季行事を愛で、生活として取り込んでいく『価値観』ということが重要ではないか」といただいておりますので、この点について、また先ほど全部チェックを入れなかったことも含めてお話をうかがまたより思います

石黒浩也 [三越伊勢丹呉服・美術統括部マネージャー]: あそこに書かれていた項目自体を不要だと思っていらっしゃる方は、当然一人もいらっしゃらないと思います。私は百貨店の美術担当をしているのですが、過去数十年のわれわれがやってきたことに関しての自省の意味も込めて、という位置づけとも考えています。どういうことかというと、日本の工芸、日本の美術あるいは日本食、和服といったものと同時に、やはり日本の文化がずっと培ってき



川越仁恵 「日本経済大学経営学部専任講師〕

#### 実践したいと思われること

- 1.商品開発が、周辺も恩恵を受けたり 活性化する波及効果のある ビジネスプランに組み込んだ商品開発
  - 2. 生み出した後に見方や あり方の変わるような商品、 『ヴィジョンのある』 商品開発
- 3. 業種に合わせた 学校システム以外の工芸技術後継者 育成のプログラムを開発

#### 悩ましい点:

工芸技術後継者育成の プログラムを開発

実践者となる工芸技術者の意識改革



川村喜久 [DIC グラフィックス(株)取締役会長]

実践したいと思われること: ・在外公館での積極的な 企画展示を行う。

・海外での和食、和の住空間の 普及促進を行う企画事業。

たものが「もの」として現出している、というのが大前提ではないかと思います。われわ れ百貨店が何をしてきたかというと、特に戦後、海外の価値観、わかりやすく言えば海外 のブランドを強く提案してきた側面もあります。たとえば美術品という観点で見ても、日 本の今の美術市場というのは10年前から半減している状況です。これはやはり美術とい うものを愛でる、あるいは意味をしっかりと伝えていくということを、百貨店も含めて 怠ってきたということを大変反省しているところです。工芸品に対しても、日本の生活の 様式のなかで意味を持ち、存在をしてきました。たとえば、金繕いというのがあります が、あれは海外には完全にない概念ですよね。壊れたものをしっかり継ぎなおして新しい 美意識を持たせ、さらに使っていく。おそらくそれをおじいちゃんが子ども、子どもが 孫、と伝えていく。100年後に残していくためには、その美意識の価値観というものを伝 えていかない限り、「もの」だけ残っても、それは結局何であったのかという部分になる のではないかと思います。百貨店という目線で具体的な一例を挙げるとすると、工芸のな かで呉服という概念があります。これもご存知の通り非常に疲弊をしている状態ですが、 私たちの店で、着物に入る前に浴衣を夏に着ましょうという試みを始めています。正直こ れを3年前に始めた時はなかなか伝わらず、提案しているわれわれも着ないで提案してい ました。ただ、これをずっと提案していくことで、提案しているわれわれも着たほうが格 好いい、日本の夏に一番理に適った服であると、使って初めて気づきました。そのような 人たちがだんだん集っていき、使う人が集う場をつくっていくことが小売という立場で見 たときに非常に重要だと思います。それはわれわれ個々人に関して言うと、今われわれが 知っている限りの工芸の意味をつくる・売るということもそうですが、どんどん自分の子 どもや孫に意味を伝えていく、という価値観を繋いでいくことが大事なのではないでしょ うか。これはおそらく個人であれ、われわれのような小売の人間であれ、つくる方であれ 重要なことなのではないかと思います。

塩瀬隆之:ありがとうございます。Q2について「手の技」、「デザイン」も重要ですし、それに加え「物語」「地域性」というのも関心事項として高いのかと思われます。先ほど青柳長官からもありました「手わざ」が幸いにも残った、というのは日本の工芸の特徴としてはとても重要で、そこを残していくことが大切であると思います。手の技であることの意義も同時に届けなければその価値は届かないと思いますので、結果としての「もの」だけを見てそれが伝わる目利きをとれだけ育てられるのか、しっかりと手わざで丹精込めて丁寧に「もの」をつくってきた、という文化そのものを共有するというのが次に必要なのではないかと思います。また100年後に残したい「もの」や「こと」についても、いくつかご意見をいただいております。たとえば、北村さんより「古より今日まで脈々と受け継がれてきたすべての伝統工芸、祭事、伝統芸能。それらに必要な素材、道具、技術。茶道、華道などの習わし」、「材質の均一な安定化、相場によって急激に変動しない安定化」というご意見をいただいておりますので、お話をうかがってもよろしいでしょうか。

北村昭斎 [漆芸家、重要無形文化財 [螺鈿] の保持者]:私は漆のなかで螺鈿という貝殻を使って装飾する技法を扱っており、それには漆やそれに関連する加飾素材、古い工芸品の場合には貝や鼈甲なども使われています。貝という素材は自然の材料ですから、なかなか均質な輝きがあるものが得難く、板状に切断し、磨いて所定の厚さにしてみないとわからない点があります。それから螺鈿と併用して蒔絵技法を使います。これは純金、純銀を使うことがあるのですが、近年の貴金属の価格の高騰によって、現在では、20 年前に比べるとおよそ3倍から4倍近い値段になってしまいました。蒔絵をしようとする人達にとっては金粉を使おうと思っても使いづらいという現象が起こっています。これは経済状況の変化でやむを得ないことですが、できれば価格の安定化、あるいは材質の均一な安定化が生まれればと思います。たとえば貝の例をとりますと、工芸素材として広く東南アジアから東アジアにかけて使われるのですが、現在では日本で加工する人が少なくなり、海外で加工されたものを購入する人が増えて国内加工業者が減少していくという問題もあります。

塩瀬隆之:安定化、相場によって、というのもとれくらい産業人口がいるかということによって購買力も変わってきますので、確かに日本とそれ以外の国のなかでの競争もあるかと思います。同じようなことは自動車産業でも言え、ガソリンの価格を安定化させるために共同購入をするという例があります。バッファ(緩衝)をつくるという点でも、連携して素材や具材の購入をするという方法も考えられるでしょう。ワシントン条約だけでなくいろいろな化学薬品の規制など、一人ひとりがいち早く情報を集めて対策を講じるというのも非常に難しいと思いますので、そういった点でもオールジャパン工芸連携で力を発揮し、皆さんで情報共有するというのも一つの仕掛けなのではないかと思います。次のスライドで「工芸の魅力をわかる日本人の眼力」ということで大藪さんからお話をうかがいた



石黒浩也 「三越伊勢丹呉服・美術統括部マネージャー〕

ご自分にとっての100年後に残したい「こと」:

日本人としての 四季暦・二十四節季行事を愛で、 生活として取り込んでいく 「価値観」



北村昭斎 [漆芸家、重要無形文化財「螺鈿」の保持者]

ご自分にとっての100年後に残したい「もの」:

- ・古より今日まで脈々と受け継がれてきた すべての伝統工芸、祭事、伝統芸能。 それらに必要な素材、道具、技術 ・茶道、華道などの習わし
- ・工芸の魅力を分る日本人の眼力 材質の均一な安定化、 相場によって急激に変動しない状態

いと思います。

大藪泰 [京都市産業技術研究所研究室長・理事]: 京都市産業技術研究所では伝統産業を技術的な面からバックアップしています。私がいつも悩んでいるのは、伝統産業品がほとんど受け入れられていないという現状です。伝統産業品は要求されていないのではないか、とうして要求されていないか。もしかしたらわれわれ日本人の眼、つまりいいものを見る眼がかすんできているのではないか、ということを感じました。つまりこれが高い・安い、使いやすい・使いにくいといった考え方とはまったく違った時点で、「いいものは自分のところに置きたい」といったものの考え方がなくなってきた、ということです。伝統工芸が100年で徐々に衰退してきたとすれば、これから100年で復興させようと考えればよいわけです。あと100年あるとすれば急ぐことなく、そのかすんだ眼をもう一度磨き上げていったらいいのではないのでしょうか。たとえばわたしは、わたしの専門である漆への眼は35年かかりましたが、35年かかれば案外皆さま価値がわかってくるかもしれませんので、それぐらいのスパンで考えていこうということです。

塩瀬隆之:もう一方、100年後に残したいということで福本さんの「品物は使うべきで残す ことを優先すべきではない。残したいことは工芸の本質に伝えられてきた『精神的なあり 方』、つまり正しい認識の『伝統』」というお言葉に関してお話をうかがえたらと思います。 福本繁樹 [染色家、民族藝術学会理事]:工芸を 100 年後にどのように残すかというキーワードの 一つは「伝統」だと思うのですが、この「伝統」というのはいろいろの解釈があり、その 解釈や取り組み・姿勢について議論すると、複雑な問題になると思います。伝統に関し て、僕にとってショッキングだった指摘が二つあります。一つは三宅一生の言葉ですが 「伝統を伝統のままやったってスーヴニール (記念品) になるだけだ」というものです。伝 統工芸を残そうとしても、それがいかに精緻なもので超絶技巧が駆使されていても単なる スーヴニールにしかならないことが多いと思います。それでは未来はない。もう一つの指 摘は辻惟雄さんが「伝統といってもわかりにくい、遺産と考えたらどうか」というような ことを書いていたことです。この場合英語で解釈すると明快です。英語では、世界遺産の 遺産はヘリテージ (heritage) といい、文化財もヘリテージ、伝統もヘリテージです。だか ら伝統を遺産ととらえたらいいのかなと思います。前代の人が残した 100 年前の遺産を 100年後に残したって、なにも発展性がない。伝統を100年後にどのように残したらいい のかというヒントになったのが、身近にあった『広辞苑』です。それには伝統は「精神的 あり方」だと明記してあります。伝統は技術とか様式のように目に見えるものではなく、 精神的あり方だと思います。残すのは「もの」ではない、今あるものを残してもだめだと 思うのです。やはり広辞苑に書いてある「精神的あり方」が「もの」をつくるのだと。そ して「もの」をつくるあり方を残していくべきだと思います。伝統のないところには文化 はありません。でも伝統が「精神的あり方」だとしても、それを具体的にどのように認識 して取り組むのか、非常に複雑な議論になると思います。伝統の本質とはいかなるもの か、このような場でコンセンサス (意見の一致) が得られるような議論が必要ではないかと 思います。

塩瀬隆之:100年後に残すということで、今回皆さんでお考えになっていただくなかで人 それぞれの考え方もあると思いますし、お立場のなかでできることも違うと思います。残 すべきものについて、少しずつあせらずに定義として内側と外側を一気に決めずに一緒に 考えていくことが、せっかく今日集っていただいている意義だと思いますので、そういっ た言葉を皆様から拾っていけたらと思います。

もう一つ、三つの問いを事前調査でさせていただきました。工芸を取り巻く関心度の高さで、一つは枯渇していく素材や道具について、二つ目は工芸をめぐるシステム構築について、おうかがいさせていただいております。関心があるということを示す円グラフですが、素材道具についての関心もあります。工芸におけるシステムとは何か、ということはわかりにくいと思います。私の博士号はシステム工学なので、システムというのは単純に言えば、「もの」、情報、ことの流れをしっかりと一周まわす、というふうに捉えていただければよいかと思います。ただ単にコンピュータの上でインターネットのデータベースをつくればシステムができたか、というと決してそういうわけではありません。世間でつくられているデータベースのなかでほぼ使われないものが山のようにあるというのは、そこにデータを放り込んだまま終わってしまいます。大事なことは、それを引き出して使い、またそこに貯めて、という流れがうまくいって初めて、システムと呼ばれます。SNSのようなところでネットワークをつくればいい、データベースをつくればいいということではなくて、それをきちんと呼び出し、また新しい情報を書き込む人も入らないと、本当はシステムとは呼ばれないのです。そのようななか、今回オールジャパン工芸連携が大事なこ



大藪泰 「京都市産業技術研究所研究室長・理事」

ご自分にとっての100年後に残したい「こと」: 工芸の魅力を分る 日本人の眼力



[染色家、民族藝術学会理事]

ご自分にとっての100年後に残したい「こと」 品物は使うべきで残すことを 優先すべきではない。 残したいことは 工芸の本質に伝えられてきた 「精神的なあり方」 つまり正しい認識の「伝統」 との一つは、情報を皆でただ一箇所に集めるだけでなく、それをとう生かしていくかを一緒に考えていくことが大事ですので、この集まりそのものがやはりシステムなのではないかと思います。具体的にどのように回していけばよいか、Q3 でご回答をいただいているので、5人の方にお話をうかがいたいと思います。まずお一人目の森口さんにおうかがいしたいと思います。「各都府県市町村の教育委員会の文化財保護に関わる人たちの専門化、意識改革、全国の組織化と個別化」とご意見をいただいておりますので、お話をおうかがえさせてください。

森口邦彦 [染織家、重要無形文化財 [友禅] の保持者]:30年ほど前から日本工芸展の運営のお手伝い をしていました。1980年代、世の中はバブリーで有頂天になっているなか、私は展覧会の 運営に携わりながらすでに、材料や、さまざまな諸用具のつくり手から後継者がだんだん いなくなっていることを深刻に感じました。1992年から10年間、日本伝統工芸近畿展 に、特別展示「伝統工芸を支える人々」ということで道具や材料をつくってくださってい る方々の現場を訪問し、そういった方々のお仕事を僕たちの作品と一緒に展示し、鑑賞し てくださる方々にご理解をいただく作業をしました。それを助けてくださったのが京都府 と大阪府の教育委員会の方々です。その方に聞きますと、各地方の教育委員会には文化財 保護に関わる人員の方々が事務方だけのところもあるし、技官さんがいるところもあるそ うです。そういった全国にある人材を、文部科学省を中心としてもう一度しっかりと機能 させてほしい。消滅しつつある伝統工芸の用具などを直ちにリクルートして資料として集 めておくだけでも、私たちの世代で二束三文の値打ちもなくなるようなものでも、お宝の ようなものがたくさんあります。将来を生きる日本の方々のために道具だけでも残してお けば、それが新しい知恵を生み、何かを生んでいくのではないかと思います。芸術的価値 の高いもののみをコレクションして残していけばいいという考え方は、もう古くなったよ うに思いますので、その辺どうぞよろしくお願いします。

塩瀬隆之:関わっているすべての人に視座を向けるということはすごく大事なことですね。システム的思考というのはそういうことなのですが、サッカーチームで例えると選手はそれこそ職人さんのような位置づけですが、ワールドカップで表彰するときのメダルは審判の方にもあるのです、うまく試合を演出した立て役者として。さらに戻ってくるときのメダルとして、ご飯をつくってくれた人や靴を手入れする人までちゃんとメダルが行き届くようになっているのです。サッカーの試合を支えているのは誰だということを端から端まで見られるというのは、すごく大事なことです。おそらく工芸品についても同じことで、素材や道具をしたためてくださっている方々も含めて工芸だということを、工芸界全体がシステムとして見られるかということが重要で、そのシステム全体を守らないと守ったことにならないということが一番大切なことかと思います。

次に、こちらはご意見だけの紹介になるのですが、「天然材料がとんとん規制され使えなくなっていますが、通り一辺倒な規制ではなく、使う側が何に気をつけなければ害がないか周知していくことが必要だと思います」ということです。先ほどいただいた意見もそうですが、ワシントン条約や使ってはいけない薬剤など、どんどん新しい規制が出てきていますが、それは国際基準に則ってのことですし、普段使っているから安全であるということでは通用しませんので、とうしても仕方がないことではあります。本当は急に使えなくなったという結果をうかがうのではなく、情報をいち早く手に入れ代替品を考えるなど、業界団体として交渉するというフェーズがあるはずなのですが、そういうところに工芸の方々の声が届いていないのかもしれません。規制をかけるとうか議論をするときにも、そもそも情報が上ってこないと規制をかける側は状況がわかりませんので、危ないものはとりあえず止めたほうがという役人的な考え方になってしまうのです。本当に大切でとう使うべきかということがきちんと情報発信できれば、もしかしたら規制のなかでもきちんと使えるセーフティーゾーンというのができるかもしれません。ですので、そこは連携しないとうまくいかないことではないかと思います。

ではもう一つ、鵜島さんにお話をうかがいたいのですが、「情報の集約化 (センター化) とともに、物のストックも必要。スペースが必要なので東京に限らない。ただし整理活用 するための人が一定数必要」とはどういったことでしょうか。

**鵜島三壽**[関西外国語大学教授]: 用具・原材料をどのようにストックするかということが急がれているかと思います。12月4日の「絶滅危惧の素材と道具」で中古品の問題も相談したのですが、全国からたくさん集めるとなるとスペースが必要になります。そのスペースについても地方公共団体などさまざまな機関で提供できるようなところが実はあるのではと思います。あと集められたものの整理が必要ですが、単なる整理のアルバイトではなく、いわゆる学芸員のような人が必要だと思います。行政機関が新しく立ち上げるのは難しいと



森口邦彦 「染織家、重要無形文化財「友禅 | の保持者]

ストック・バンク、伝承施設の模索について: 各都府県市町村の教育委員会の 文化財保護に関わる人たちの専門化、 意識改革、全国の組織化と個別化



鵜島三壽 「関西外国語大学教授]

ストック・バンク、伝承施設の模索について: 情報の集約化(センター化)とともに、 物のストックも必要。 スペースが必要なので東京に限らない。 ただし整理活用するための人が 一定数必要

21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

36

鷹峯報告書Light.indb 36-37

思いますが、まずはできるところから始めてどうでしょうか。ただこれはすでに始まっていて私が知らないだけかもしれません。

塩瀬隆之: 次に永田さんからお話をうかがえたらと思います。こちらは契約の仕方についての新しいご提案かもしれませんが「事後にしか入金のない作品購入よりも、事前に入金があり、素材と道具にお金を回すことのできる購入の仕組みづくり」ということですが。

**永田宙郷** [㈱1クス代表]: 友人たちは若い作家が多いのですが、みんな材料を買うお金を後回しにせざるを得ない、入金がいつ入るかわからないためにいい材料が確保できていない、というのをよく見ます。昔であればお金持ちは先にお金を払ってあげる、物の交換ではなく関係の交換ということでお金を払っていたと思います。もののやり取りする順番を変えるということが、伝統工芸という文化のやり取りのなかでは、商品とは違うものとして何か構築できるのではと感じております。

塩瀬隆之: おそらく工芸そのものに伝統をつけずとも、つくり方、技法、仕事の仕方、契約の仕方、値付けの仕方、どういったところと取引するかということのなかにも、伝統として慣習化してしまったものがあるのだと思います。そうしたなかで工芸を現代的な経済のなかで回そうとしたときに、技法は伝統的なものだったとしても、仕事の仕方や契約の仕方には現代的な方法を組み入れていかないと立ち行かなくなることも出てくるかもしれません。そこをうまく組み合わせていき、何を残し、何を変えていくのかの線引きがあってこそ、「もの」ができてくるのではないかと思います。

もう一つお話をおうかがいしたいのが、中台さんです。「"捨てる"を"使う"につなげる仕事をしているので、仕組みづくりや運営についてのアドバイスや現代の面白い素材の供給、伝統の道具とのマッチングが可能」と少し違った視点ですが、工芸に直接関わっていらっしゃらないなかで見えることについてうかがいたいと思います。

中台澄之 [㈱ナカダイ常務取締役]:私は群馬県前橋市で、リサイクル以外の廃棄物の新しい使い 方、もう一度世のなかに送り出していくというリマーケティングビジネスをやっていま す。そのなかでモノファクトリーという施設をつくっております。発想は「もの」から生 まれるということで、世のなかにある廃棄物をマテリアルライブラリー、素材の棚として ひたすら並べているところです。そこに来場者を呼んでいろいろなことを体験してもらう のです。たとえば最近ですと、信号機が LED に替えられ古くなった信号機が日に 100 個 くらいずつ入ってきます。LED に替わるという事実は、それはそれでいいのです。時代の 流れに応じて廃棄物の種類は変わっていきます。そこに親子に一つずつ信号機を渡して解 体のワークショップをさせてみると、実は結構軽いのだとか、中を開けてみると結構単純 なのだとか、そこに体験というのが加わってきます。知識と体験をセットにすることに よって、経験になる。そして、その経験をその子たちや親がまた別の人に伝えていくとい うループがずっとつながっていく、ということをビジネスとしてやっています。それを伝 統工芸にそのまま当てはめるということも一部はできると思うのですが、これは伝統工芸 に限らず今の産業も、もしかしたら10年後、20年後になくなるかもしれません。そう考 えると、時代背景も含めてその時々の産業を横断的にとらえて、それぞれの業界をつなぐ きっかけになるような施設を整備するというのは重要なのではないかなと思います。私は それについてはお手伝いできるかなという意味で書きました。

塩瀬隆之:今回このオールジャパン工芸連携の話を聞いて、最初に来てほしいと思って中台さんにお声がけをしました。それは中台さんがお仕事のなかで、「もの」がとう流れていくかという循環をとても広い視野でとらえていらっしゃるからです。私自身も持続可能性を考えたうえでのシステム設計のお話をいろいろなところでしてきました。中台さんは「もの」が一度廃棄された後のことも、もう一つ広い時間軸でとらえており、「もの」が最終的にどこかに埋められるまでできるだけたくさんの価値をもっていろいろな人に使ってもらうこと自体が大切、その可能性をとれだけつなげられるか、ということを考えていらっしゃいます。情報をあつめるというのはそういうことだと思うのです。素材や道具に関しても、それが枯渇するかもしれないし、誰かがそこに携わっていればもっと増えたかもしれない、とさまざまな場面で素材や道具の価値が出てくるというのを知っている人が、もっといろいろなポジションにいないといけないと思います。その流れ全体を見渡すことがとても重要で、オールジャパン工芸連携において広く見なければならないということが共有できていると、本当につながるのではないかと感じました。

工芸を巡るシステム構築についてどのような連携ができるのか、回答を集約したものです。「出口需要を増やすためのもの」、まず買ってもらい使っていただく状況をいかにつくるかということで連携するのも大事でしょうし、つくり手、つかい手、そして学生さんも含めて交流し、後継者育成についても連携できるのではないでしょうか。また、道具や素



永田宙郷 「(株) イクス代表]

枯渇してゆく素材や道具のために実践できること: 事後にしか入金のない作品購入よりも、 事前に入金があり、 素材と道具にお金を回すことのできる 購入の仕組みづくり



中台澄之 [(株) ナカダイ常務取締役]

材への対応策をつくるもの、枯渇しそうなもの、復活しそうなもの、安定供給をとう図るかといったことなど、連携できることや模索したいことがたくさんあると思います。こういったことを踏まえ、最後に皆さまと考えたいと思っていることは、工芸オールジャパン体制ができたときに、最初にすべき具体的な連携についてです。「工芸のオールジャパン体制ができたとき」というのは、皆で集った今日を発起日するかもしれませんし、これはまだ体制のための意識あわせをしただけで立ち上がっていないのかもしれません。それを踏まえたうえで、オールジャパン体制ができたときにやるべきこと、やらなければならないこと、それぞれの課題があると思いますが、一人ひとりではできないからこそ、ここで集ってやるべきことが見えてくるでしょう。最初にすべき具体的な連携というのがあるならば、来年以降、東京・金沢で2回目・3回目を実施する際にその足がかりをご報告できるよう、皆さんからご意見をたまわれたらと思っております。

私自身が考えていますのは、先ほど青柳長官がおっしゃっていたように、工芸そのもの が日本を代表する文化であるとするならば、今の子どもたちに伝統工芸は誰のものかと聞 いて、職人さん、おじいちゃん、おばあちゃんのものと回答してしまう子どもたちがいる とき、それはわれわれ大人たちの接し方や社会生活の様式そのものが原因であり、子ども のせいではないと思うのです。今回「ことも未来工芸」についてお話をしたのは、子ども たちにただただ楽しいという体験を持ってもらえさえすれば、これは誰のものだと聞いた ときに自分たちのものといってくれるのではないかと思ったからです。日本文化は誰のも のと聞かれて「私のものじゃない」という方は少ないと思いますので、工芸も自分たちの ものだと言ってもらえるような仕掛けが必要だと思います。教育において、大人の生活様 式のなかにそれがなければ子どもに言葉語らず伝わることはないと思いますので、教育の 矛先は子どもだけではなく、実は大人にも向けられていくべきだと思います。英語や中国 語が必要だ、子どもたちに技法とともに多言語で話せと教育機関から話が出てきていま す。教育というと子どもと頭に浮かびますけれども、そもそも今現役で活躍されている方 も言葉の修練をすることにより届けられる相手もかわってくるかもしれないと思うので す。システムも同様で、オールジャパン連携で本当に工芸を100年後に残していくための システムを皆さんで構築するのだとすると、一人ひとりが主体となって動いていくことが 重要かと思います。そうして日本文化をしっかりと守る、今回のような集まりがそれぞれ の皆さんご自身の次の行動につながるような機会になればいいと思います。



#### 2015成果発表――京都から東京へ

関係各団体・機関による取り組みの概要説明と成果発表がおこなわれました。

#### 発表者 (発表順)

松原龍一 [京都国立近代美術館学芸課長]

柴山哲治 [同志社大学非常勤講師 / AG ホールディングス代表取締役]

佐藤敬二 [京都精華大学教授]

澤田美恵子 [京都工芸繊維大学教授]

神山俊昭 [京都府京都文化博物館副館長]

塩瀬隆之[京都大学総合博物館准教授]

鷲田清一 [京都市立芸術大学学長]

河野元昭 [京都美術工芸大学学長]

松本秀之 [京都文化交流コンベンションビューロー]

大野木啓人 [京都造形芸術大学副学長]

川越仁恵[つくるフォーラム総合監修アドバイザー/日本経済大学経営学部専任講師]

佐々木丞平 [京都国立博物館館長] 潮江宏三 [京都市美術館館長] 浅井俊子 [Impact Hub Kyoto 代表] 木下博夫 [国立京都国際会館館長]



松原龍-「京都国立近代美術館学芸 「同志社大学・AG ホール 課長



柴山哲治 ディングズ



佐藤敬二 「京都精華大学教授]



神山俊昭 「京都府京都文化博物館 副館長



鷲田清一 「京都市立芸術大学学長]



[京都美術工芸大学学長]



[公益財団法人 京都文化交流コンベンショ ンビューロー



[京都造形芸術大学副学長]



澤田美恵子

「京都工芸繊維大学教授]

[日本経済大学専任講師]



[京都国立博物館館長]



[京都市美術館館長]



浅井俊子 「インパクトハブ京都 代表理事]

#### 総括

#### • 木下博夫[京都国際会館館長]

三つ申し上げたいと思います。一つ、実 はこの会議に関して1年以上前だと思い ますが、林田さんからご相談がありまし た。是非、この会議の締めくくりは国際会 館で、と申し上げましたら「あまりお金が ない」という話だったのですが、私は先生 方が持っておられる意気込みに大変感動い たしましたので、お金の問題ではなくこの



木下博夫館長 [国立京都国際会館]

会館として相応しいものを提案して協力したいと思いました。皆さ んが休憩時間にどう感じられたかわかりませんが、毛氈を敷いた り、ライトがついたテーブルスタンドもつけましたし干菓子なども 出しました。少しは工芸の世界に近づくような雰囲気で楽しんでい ただけたのではないか、と思います。二つ目は、私自身は、街づく りをやってきた人間から申し上げると、町の素晴らしさというのは 住む人たちの感性ではないか、と思います。その感性をベースにい ろいろな要素があると思いますが、工芸を愛でるという心が重要で はないかと思っております。私は職員に対してこの会館を「知的交 流都市」の拠点にしたいということを常々言っておりますので、こ ういう会議の開催がまた、われわれの会館で行われることを願って おります。できれば常日頃から工芸関係のサロンのような場も提供

させていただければと懵越ながら思っております。最後にガイド ブックを拝見いたしまして大変読み甲斐のあるたくさんの情報を凝 縮しており、私もいくつかの会場を回らせていただきましたが、と ても全部は回れませんけれど、これを拝見しても工芸に関係する 方々の幅の広さといいますか、 奥の深さというものを感じておりま した。ぜひ会議を一回で終わりにするのではなくて、このガイド ブックがより充実するような催し物が引続き継続して開かれればい いと思います。更に少し想いを申し上げると、工芸のつかい手側の 数が多いだけにまとめていく事は大変ではないかと思っております が、つくり手側からのアプローチとして皆様からアドバイスをいた だければと思います。

#### • 山下晃正[京都府副知事]

伝統産業の分野やセクターを越えた情 報の共有というのがいかに大事か、とい うことを改めてこの場にいて思っており ます。先ほど、オーダーメイドの商品開 発の話がございました。私どももこれま で何回かチャレンジしており、今も京都 試作ネットという事業のなかの一部は工 芸のオーダーを受けているのですが、な



山下晃正 「京都府副知事]

かなか産業的に成長していません。どこに課題があるのか、という のをもう一度すべての要素を加味しながら組み立て直さないといけ ないのではないかと考えています。そういう意味で、今回琳派 400

年の時に京都でこの鷹峯フォーラムをしていただいたことは非常に 大きな意味があったのではないかと思います。それから、私は15年 ほどアントレプレナー教育にボランティアで参加しておりますが、 これは会社を起こしてもらう人だけではなく、琳派で言うところの 本阿弥光悦のような「プロデューサー」を生み出したいということ でやっております。そこで毎年知事賞を渡していまして、これは最 高賞になりますが、あわせて副賞も渡しています。知事賞の他にも 各賞があり、参加者は小学生から大学生です。京都府は若い方に工 芸の良さを知ってもらいたいとの思いで、副賞はいつも工芸品なの ですが、若い人があまり喜ばないのです。わー、という歓声が上が らないのです。今年一番に歓声が上がったのがインスタントカメラ で、二番目がiPadです。本当に悲しい想いをずっとしているのです が、何でこのようなことになっているのかと。ここをもう少し考え ないと、100年後に残る工芸には行き着かないと思います。おそらく 彼女彼らのなかに、工芸品をもらうことがいかに自分の生活を楽し いものにするのかがイメージできないのではないかと考えていま す。これは推測で、聞いたわけではありません。ただ一方で、非常 に大切にしないといけないと思っていることが二つ三つあります。 一つは、子どもたちのクリエーション能力を伸ばすプロジェクトの 勉強をしておりまして、これは3Dプリンターでモノをつくるとい うプロジェクトです。子どもたちに非常に人気があるのですが、あ る時、仕上げに漆の職人さんに漆を塗っていただいたそうです。す ると、子どもたちの目の色が変わりました。自分たちが作ったもの が、こんなに素晴らしいものになるのかと。特に教えていなくて も、子どもたちはこの技術のすごさがわかるのですね。二つ目に、 今年の琳派 400 年記念事業、いろいろ見させていただきました。イ メージで言いますと、本阿弥光悦から始まって尾形光琳、酒井抱 一、神坂雪佳を経て鉄腕アトムの現代に至り、最新では山本太郎さ んかな。それらを拝見させていただいて、やはり日本人の持ってい る美意識には400年間の共通性があることを見出すことができて大 変うれしかったし、市井の人はちゃんと美意識を持っているんだろ うということです。3つ目に、京都は老舗の街で、京都府は創業100 年以上の企業を表彰しています。これまでに1900社近く表彰しま したが、そのうち最も続いている創業1000年以上の企業が2社あ ります。申し上げると、仏教用具をつくっている企業さんと、神社 さんの前であぶり餅を焼いているお茶屋さん、茶店ですね。なぜ 1000 年続いたか、それは市場があったから、非常に単純なことです けれども、市場をあり続けさせるためには何が必要なのかというこ とを、もう一度考えないといけないと思います。技術だけでは残る ことはできない。これはいくら美術品としてのレベルが上がったと しても、避けられないだろうというふうに思いました。来年は東京 で開催されるということで、私が今悩んでいることを申し上げて結 びにしたいと思います。それはAIと人間との関係で、最初は将棋の 世界でコンピュータと人間が将棋をして人間が負け、コンピュータ のチームは人間に勝っていることがわかったからもうやめると言い ました。非常に悔しい思いをしまして、ついにコンピュータにわれ われが負ける時代が来たのかと。そして私が感じましたのは「それ ならコンピュータにできなくて、われわれにできることは何なのか」 ということです。先ほど、工芸を残すために「手わざ」と出ており ましたが、手わざというものの中身は何なのか。たとえば、モダン アートでコンピュータに描かせた作品などについて、私は自然にで きているように思いますけれど、それを「手わざ」と呼べるので しょうか。美術と呼べるのでしょうか。3D プリンターでつくった工 芸品は「工芸品」でないのでしょうか。そういう、最も根源的な問

題をできれば次回以降ご議論いただいて、そういう問いに対してわ

れわれに新しいものの見方、考え方を提供していただけると、今後

続いていく鷹峯フォーラムが素晴らしいフォーラムとして成長され るのではないかとのご期待を申し上げまして、結びの感想とさせて いただきます。ありがとうございました。

#### • **塩瀬隆之**[京都大学総合博物館准教授]

私自身は工芸は直接の専門ではありませ んが、客観的に見て皆様の考え方の一つの 視点につながればと思います。まず最初 に、このフォーラムのなかでなされていた ことで特に素晴らしいと思ったのことは、 上賀茂神社での「工芸における琳派コード を読み解くトークセッション」で京都市美 術館さんと新しい連携をされたという意味 で、新しい連携がどんどん出てくるのはこ



塩瀬降之 [京都大学総合博物館 准教授

ういう機会ならではと思います。「つくるフォーラム」ではつくり手と 買い手の方が一堂に会される素晴らしい機会だったと思います。特に、 どこに市場があるのか、というなかで市場その場で一緒につくり込んで いくのは非常に重要な機会ですので、このような場で集まりがあったこ とは素晴らしいことだと思います。「私の好きな工芸」のように、工芸 に対して、なぜなければならないのか、というよりも、好きである、と か、私はこれを気に入っている、ということを素直に言えることも大事 かと思います。数値や外側から言われる価値観ではなくて、自分たちの 内なる価値観を表明できる場として「私の好きな工芸」という場所を守 られるというのも、鷹峯フォーラムならではのことではないでしょう か。そして、京都精華大学さんの「工芸とデザイン」では伝統の素材と 新しい現代アート、現代デザインの文化とうまく競うような形で、たと えば広報としては新しいものを生み出さなければならないけれども、本 当に使い道の新しい別用途のものが見つかるというのもこういった場で あるからこそだと思います。また、私自身も携わらせていただいた絶滅 危惧の素材と道具に関しても、ただ道具が枯渇していくのを我慢して待 つのではなく、積極的に、回る仕組みをどう取りにいくかという意味 で、議論のなかでは千葉県でキョンが大量発生しているのでなんかしな けばならないというニュースを聞きつけ、そこからもしかしたら大量に あれば膠ができるかもしれないと、研究会が動き出したわけです。結 果、話は成約せずだったのですが、大事なことは、実はどこかで余って いるものが他では枯渇している、情報さえ知っていればつながったかも しれない、ということを一堂に会して議論できたのは素晴らしいことだ と思います。

#### ワークシートレビュー

1枚目の100年後に残るものについて、絶対残りそうなものに「廃 棄物」と書いてあるのが面白いと思いまして、確か100年後に残りそ うだと。廃棄物というのは同時に何かをつくっているので、その隣に 「エアコン」と、書かれています。先ほど実際に書かれた方とお話して いたのですが「エアコン」や「洗濯機」は残るだろうと。何故なら何か を洗うというのはずっと続けてきたことであって、また温度に対しても 敏感になってきた中で、その道具は耐えず手放せずにいる、でもテレビ というのは逆になくなるかも知れない、そういうものを見るというのは 何百年も続いてきたことではないので。重要なのは、洗うという行為は なくならないということです。次の方のスライドもたくさん書き込んで いただいていますが、みなさんの 100 年後に残ると書いてくださった もので一番多かったものに「食器」があります。それは工芸で携わって いる方も多いから、ということもあるとは思いますが、同時に私たちが 食することがなくなるということはなく、その器が素手になるというこ ともないのだとすると、素手に近い形で受け取れる器というのは非常に 重要なもので、その器がどんな器であるのかということを考えると、そ

21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

41

40

鷹峯報告書Light.indb 40-41 16/03/29 14:25

れが漆でできている、金属でできている、竹でできているというのは食 し方であるとか作法であったり様式であったりするのだと思います。も のそのものは食器として残るのかもしれませんが、同時に私たちが今の 文化をそのまま伝える形で様式として残さなければ、ただ食器だけが残 ることになってしまいます。そして工芸の有り様というのは生活様式を 残すことでなければ今、期待していることが残らないのかもしれませ ん。次のスライド、二番目の質問に注目していただいて、「100年後に 残すにはどうすればよいか独自の作戦を考えてください」とお願いした のですが、こちらも素晴らしい作戦をたくさんいただき、順番に実現す ればできることはたくさんあるのだろうと思います。たとえば、こちら でいただいたご意見ですと「付加価値忘却作戦」とあります。こちらは まったく逆の発想なのですが、何か付加価値があるという幻想のまま、 ただただものをつくるのではなくて、もの自身の本質に着目したほうが よいのではないかというご提案かと思います。次は作戦名のなかで「つ くり手自身が素材を栽培する」とあります。これはまさに自分の手元に 来なければ自分たちで育てていくことも大事なのではないか、というこ とです。今日お話しのなかにも、自分たちの工芸品そのものを残すので はなくて、そこにもってくる道具や素材をいかに残していくのか、とあ りました。こちらは先ほど永田さんから伺ったお話ですが、今、広島と 福岡にある元気な家具というのは何を残していたから元気なのかという と自分たちで材料をしっかりと蓄えていたからなのだそうです。今材料 が枯渇する中で材料を蓄えていたから自分の余力というのは材料を持っ ている強さというようなことをおっしゃっていました。たとえば工芸の 分野においても何を残せばいいのかというなかでも、ちゃんと素材や材 料を残すということは非常に重要な力なのではと思います。次の作戦 は、「伝統と伝承は違うのだよ作戦」とあります。ただ伝統と語るので はなく、きちんと伝承を考えましょう。またあるところでは伝統であ り、あるところでは伝承であり、その違いも大人も含めてごちゃ混ぜに してしまっているのではないか、というお話です。次は「日本の文化を 感動させて子どもに伝える作戦」。先ほどもお話に出ていたような教え 込むという以前に、やはり感動であるとか心で感じれるような機会が大 切ではないか、というお話です。次も関連するのですが、こちらも「親 子で審美眼を育成するひととき」とあります。やはり教育というと子ど もに対象が絞られてしまいがちですが、大事なことは大人もその生活様 式というものを体験していないので、子どもがもし興味を持っても疑問 を持っても答えられる大人が傍にいないということもあり、親子に、家 庭に語りかけていくような機会が必要ではないかというご提案かと思い ます。次は「各地で同時にワークショップを開催して同じ素材や材料を 使ってもでき上がるものは異なる。それらを見比べることで地域の特性 を理解する」というような話なのですが、これはちょうど経産省のほう で 3D プリンターを使った授業というのを全国展開するときに、3D プ リンターというのは 3DCAD のデータを入れてしまえば何か物がつく れるので、そんなものを全国に配ってしまうと地域性が損なわれるので はないか、という議論が最初の予算付けのときにありました。しかし実 は逆で、ものをつくるときの様式というのが揃うと、それぞれの地域で 「うちの地域で伝統の素材はこう、伝統の様式はこう」というようにあ る程度のフォーマットができたほうが返って地域差は極大化して生まれ る。逆にそれぞれの地域で一から全部を新しくしようとすると同じ問題 で困ってしまい、結果全部疲弊し倒れるようなことにもなりますので、 ここでは同じ様式というのを地域である程度共用するのも実は地域差を 生み出すために重要というご提案だと思います。次の「廉価版作戦」と いうのも非常に重要で現状高級路線で生き残るというのも一つの手段で はあるかと思うのですが、同時にそれは目利きであり、触れられる人の 数を減らすことでもありますので、同時に庶民、一般の人、ほとんどす べての人が手に取れるところで工芸の素晴らしさ、魅力を伝えていかな ければそもそも裾野が広がらないので、この「廉価版作戦」というのも

非常に重要な作戦かと思います。次は「まず食事をつくって食べること が大切」と書かれています。これ自身も非常に大切なことで文化の一つ に食生活とか振る舞いというのがあったときに、私たちの食生活自体が 変わっているから、家庭のなかでの様式ががらがらと崩れていくのだろ うと、いうのがあります。これはちょうど、厚生労働省の中の糖尿病研 究のアプローチで、どれが一番スコアーが高いのかという分析があり、 たとえば IPS 細胞で膵臓細胞を再現したほうがいいのか、生体肝移植 を行ったほうがいいのか、食事療法かと、いうところで今のところ食事 療法が一番スコアが高く、食事を改善することで糖尿病の改善が見込ま れると言われています。ただし今その食事療法が通用しなくなってい る。なぜかというと、何かあるとすぐにコンビニエンスストアーで買っ てしまって子どもたちにとってバランスの良い食事という概念がそもそ もないので食事療法というのができない、というのが今の課題と言われ ています。家のなかで食事の様式を、たとえば一汁三菜でもいいので、 どうやって食べるのかという文化を残さない限りは先ほどの食事療法も うまくいきませんし、そのなかで使う茶器であるとか食器であるとかを 使ってもらえるはずもないので、そういう意味で食事を大切に取り戻す というのもとても重要かと思います。次は「小学生から大学生までワー クショップ大作戦」と書かれています。一連のものづくりをみんなです る、ということですが、これがこのまま次につながるのが、たとえば長 野県の諏訪岡谷に工業集積地がありますが、地元の中小企業の方々が学 校の初中等教育に、新しく「ものづくり科」という新しいカリキュラム をつくろうと学校に出前授業をしており、今、教育委員会さんと連携し て、「ものづくり科」というのを毎週必修化していてものづくりを文化 として残そうと動いております。そういう意味では「ものづくり科」と いうものが学校教育のなかでどう考えられるのかといったときに地域差 を出していくのがすごく重要なアプローチではないのだろうかと思いま す。あとは今回いろいろと議論になったことで「絶滅危惧の素材と道具 のレッドリストをつくろう」であるとか、海外の発信、希少素材に関す るもの、それから暦を取り戻すというものもあります。暦を取り戻すと いうのは生活様式でしょうか。カレンダーにあるものと伝え聞いた祭事 とが結びつかなくなってきたなかで、祭事だけ急にやれと言われてもよ く分からないので、暦を取り戻すこと自体はとてもドラスティックなの ですが、同時に生活様式と文化というのは、そもそもどういう風にそこ に存在しているのか、ということを共有する必要があるという話だと思 います。最後ですが「最初から最後まで携わった人が見える仕組み」と あります。やはり工芸では職人さんだとかつくり手さん以外にもつなぎ 手がいて、つかい手がいて、そこに素材・道具とたくさんの人が関わっ ていて、そのことを一堂に会し集め、そのことを知っていることがとて も重要なのだと思いますし、それをこういう連携のなかでできることが 大事なのではと思います。最後にまとめとしてお話ししたいのが、先ほ ど鷲田先生がおっしゃっていた、「オールジャパン連携というのを唱え すぎると返って引いてしまう、危惧される方もいらっしゃる」というお 話がありました。それは私自身も思うところで、たとえばある鉄道会社 の方が電車のなかで全席優先座席というのをトライされたことがあるの ですね。全席優先座席なんて素晴らしいことです。皆さんにとって優し いという。ただし皆が皆に優しくするといつしか誰も席を譲らなくなっ てしまって結果必要な人に席が届かなくなったということがあり、結局 普通の優先座席に戻したという話がありました。何が重要かというと、 みんながみんなと言過ぎると結果わからなくなりますし、そこに入れる 人、入れない人の線引きがあるのだと思います。先ほど鷲田先生がおっ しゃっていた「プルーラルジャパン」のほうがいいのではないかと、こ れはまさに異なったまま、違った考え方や、違った経験、体験のままこ こにいていいというのが一番豊かに多様性を受け入れられる連携かと思 いますので、何か厳密な定義のもと、これを満たさないと工芸ではない とか、これを満たさないと伝統とは呼ばないとかこれを満たさないと一

緒にしない、ではなくてそれぞれの立場のなかで。その一つが先ほとの子ともだと思います。子とも自身も今は知らない、未成熟だからこの場に入れないか、というとそうではなくて、その次世代を担う人々に魅力を届けられていないということを大人側も感じるべきだと思いますし、逆に子どもから教わることの一つは、子ともはそういう垣根もなく考えるので近代産業だろうが、伝統産業だろうが関係なく自分の手元にあるものでご飯を食べ、生活をするのだろうと思います。そこを大人も見習うというのが逆に教育を考える上で大事かと思いますので、このオールジャパン工芸連携というのが、結果プルーラルジャパンになるかはわからないですけれども、ぜひいろいろな価値観で、いろいろな経験をされていて、いろいろな産業、いろいろな文化、いろいろな美術のなかに関わっていらっしゃる方々が一堂に会してお話できるような関係をずっと続けられれば素晴らしい場になるのではと思います。若輩ながらこのような機会をいただきましてありがとうございました。

#### 京都提言発表

柳原正樹[「100年後に残る工芸のために」 普及啓発実効委員会会長/ 京都国立近代美術館館長]

→ 51 ページに記載



柳原正樹 [「100 年後に残る 工芸のために」 普及啓発実効委員会会長、 京都国立近代美術館館長]

#### 閉幕挨拶

林田英樹 [一般社団法人ザ・クリエイション・オブ・ジャパン代表理事]

本日は長時間にわたり多数の方々、しかもつくり手、つかい手、つなぎ手の幅広い方々にお集まりいただき、大変実のあるご討議をいただき、本当にありがとうございました。約一年前にこういう会を京都で開催したいということを考えまして提案したところ、京都国立近代美術館の柳原館長様が中核館としてお取り纏めをしてくださる



- 一般社団法人 ザ・クリエイション・オブ・ ジャパン代表理事]

ことになりスタートいたしました。この活動を具体的に論議を始めましたのはまだ半年前くらいでありましたが、当時このように大きな会合、 実のある会合になることは正直考えておりませんでした。もっと規模の 小さいものになるのではないかと思っておりましたけれども、本当にこ のようにそうそうたる方々がお集まりいただく会をこの会場で開催でき ましたことを心からお礼を申し上げたいと思います。この事業に参加い ただきました実行委員会のメンバーの方々、ご協力いただいた方々と か、参加いただいた機関、今日ご出席いただいた皆様にもお礼を申し上 げたいと思います。さらにはこの会合を金銭的に一番大きく応援いただ きましたのは文化庁でございます。文化庁の補助金をいただきまして、 この会が実現できましたし、青柳長官も直接こちらにおいでいただい て、本当に熱のこもったご挨拶をいただき、われわれも大変力づけられ た気がします。文化庁に心からお礼申し上げたいと思います。また、京 都府、京都市の行政機関の方々にも大変なお力添えをいただきました。 厚くお礼申し上げます。私どももいろいろと相談するなかでこの京都 府、京都市におきまして、この問題がいかに大きな課題であるかという ことを感じますとともに、具体的にいろいろな対策をとっておられ、お 知恵と経験を豊富に持っていらっしゃいますので私どもが日本全体で活 動を広げていく際にも大変有益なアドバイスなりご協力をいただけるの ではないかと痛感させていただいているところでございます。木下館長 にもお礼申し上げたいと思います。先ほどの話にもありましたが、私ど もは文化庁やほかご支援がありながら十分な財政力がないところを木下 館長の特別なお計らいとご支援により本当に素晴らしい会ができまし た。まことにありがとうございました。

今回の議論を通じまして工芸を取り巻く環境の厳しさというのも私 自身も痛感をさせられました。しかし一方では、やはりこれだけの皆様 方が合わせて知見をお出していただけますといろいろな知恵がでてきた ことも事実だと思います。今回お示しいただいた方向性を、これから フォローアップしていくことがとても大切だと思っております。今回一 回限りの、京都限りの会合にはしてはいけないと思っております。私ど も、ザ・クリエイション・オブ・ジャパンとしましては、このような活 動を日本全体で取り組めるような活動にしていこうと思っております。 もちろんその取り組み方は画一性を求めるものではございません。すべ ての人に緩やかに参加していただいてそれぞれの方々にとって力になる ような方向を一緒になって応援するにはどうしたらいいのかと、そうい う視点で頑張っていきたいと思います。来年も同種の会合を文化庁のご 支援をいただきながら行いたいと思っております。皆様のご参加を期待 したいと思いますし、東京・関東の関係者の皆様にもお声をかけていく つもりであります。これまで中核館になっていただく機関についていろ いろとご相談させていただきしたがようやくまとまりまして、女子美術 大学のほうで美術館をお持ちでいらっしゃいますけれども、お力をいた だいて中核館としてご協力をいただけるということになりましたので、 これからまだ構想などにつきましてはこれからご相談ということになり ますが、ぜひご一緒にやっていきたいと思っております。横山学長には 本日ご出席いただいておりますが、ご協力いただけること、本当にあり がたいと思っております。また今回金沢からご参加の方もいらっしゃい ます。その次の年には金沢での開催も企画しておりますので、またいろ いろお力添えいただきたいと思います。本日は本当に長時間にわたり有 意義な会を持たせていただきましたこと、こころから改めて御礼申し上 げまして、結びの言葉といたします。ありがとうございました。

43

#### シンポジウム内アンケート

#### ● 100 年後に残りそうなもの

- ・自然素材以外の工芸品、神社仏閣、言語交換機器(つくり
- ・寺社 着物 本(つくり手)
- ・陶器(つくり手)
- 寺院建造物(寺、社)、寺院建築物(宗教寺院)、工芸のための 道具類、食の道具(まな板、包丁)、食器(陶器類)、演芸、話術 (落語、講談)(つくり手)
- ・小さなロボット(自家用)、神社仏閣(古来から残り、守られて いるものなので)、今日まで培った日本の伝統工芸(残したい 思いがあるから)(つくり手)
- ・ 寺 おりん(私が残す) 地球(つくり手)
- ・美しいものを大切にする心、幸せを求める心、世界に発信 できる工芸(近代アートが求めるものをたくさん内包している 文化)、町家屋(美しいから)、戦争を含める争い(人間である 以上仕方がないかもしれない)(つくり手)
- 食器(ストローで飲むのはおいしくない。タブレットや点滴では つまらない)、学校(大人がなくさない)、着物(意外と着やすい。 素材は変りそう)、服(裸は寒い)(つくり手)
- ・千年の歴史のなかで残ってきたものを考えれば、生活の なかに根づく食器。人が守ろうとするものは、自然や景観 (つくり手)
- ・美術館、博物館、資料館(個の重視、表現)(つくり手)
- ・戦争、寺、神社(残すべき)、自動車(楽を知るとやめられない) (つくり手)
- 長寿(つくり手)
- ・染色品、着物、天然染料、竹製品、かご、陶器、茶碗、手仕 事. 天然繊維(つくり手)
- 神社、寺院、美術館、博物館、日常食器類 (陶磁器、金属類)
- ・寺院(特に京都),新しい工芸、茶道(つくり手)
- ・日本語(言語)、五山送り火、祇園祭、おはしなど(つくり手) ・神社仏閣 (千年続いているし、守られている)、お味噌 (つくり
- ・古いもの、寺社、博物館のコレクション(つくり手)
- 美術品、自然、旅行、正月(つくり手)
- ・薬(病)、武器、宗教、農業、コンピュータ、思想(つくり手)
- 正倉院(日本人の証明)、茶道(日本人の証明)、皇居(自然の公 園)、天然の食材、自然の食材の味覚のサプリメント。手づ くりのものと、手づくりと同じように見える大量生産品 の二極化で区別がつかなくなる(つなぎ手)
- · 京都大学、神社仏閣、病院、国宝指定物、国立公園 (自然) (つなぎ手)
- ・清水寺、三十三間堂など(信仰の場としてよりアミューズメン トパークとして。周りの門前町も込みで、伝統工芸品を扱う店や 食事処すべて。外国人など観光客にとってあらゆる楽しいものが ある京都は、歴史的に数百年前から魅力的な場として残ってきた ので、100年後も必ず残る。和風建築のみの環境であり、統一感 があるというのが一番のポイント。ビルは飽きる) (つなぎ手)
- ・皇室(微妙?)、美術商(素人が増える)、二セ物全般(イミテー ションで満足する)、文化庁(フワフワとくらげように存在し続 ける)、和食(良くも悪くも進化か退化する)(つなぎ手)
- ・世界遺産、国宝、茶道具(つなぎ手)
- 神社、寺院(つなぎ手)
- アンドロイド、パートナー(つなぎ手)
- ・文化財(認定されたもの)(つなぎ手)
- ・文化的に豊かな街、京都の寺院(つなぎ手) ・インスタントラーメン、靴、鞄、自転車、鉄道(つなぎ手)
- ・日本の四季、歳時記を愛でる(様式美としての工芸の伝承)、 日本の食(根幹そのもの。用の美としての工芸の継承)(つなぎ
- ・京の三大祭、神社仏閣(つなぎ手)
- ・神社仏閣、城など(歴史、時間的価値があるもの)(つなぎ手)
- ・金の価値、人の個性的な日常道具(工芸的産物)、木製の建 物、人と話すこと(希望かな?)、100歳まで行ける学校(大 人でも学校に)(つなぎ手)
- ・茶碗(毎日使うものだから)、皇居・皇室、東寺ほか寺院(つな ぎ手)
- 住宅(学生)

44

・デザイン (学生)

- 清水寺や上賀茂神社などの寺社(学生)
- 書籍、紙、習慣、布(普遍的)、歴史的でき事(ここに何かを絡 めると印象が強くなる)(学生)
- 家具、衣服、食べ物、お菓子、お寺、神社(学生)
- 環境問題、著名な神社仏閣などすでに残す活動が活発な もの(学生)
- お墓、老人ホーム、カジノ、パチンコ、英語 (共通語として) (学生)
- ・ ふとん、海 (学生)
- 時計(どんな形であっても、時間がわかるものは以前からずっと あるため)、器(なければ物を入れたり、食事をしたりできないか
- ・代表的なお城(姫路城、二条城など。 モニュメントとしての存在 価値)、デザイナーズブランド(価値が高く、有名な美術品)(教
- ・花をいける行為、火を使った料理、手づくり農業、茶の湯、 ふかふかの布団、楽器(教育機関)
- 芸術、若者、生きる糧、日本の伝統工芸・音楽・芸能、現代 音楽・美術 (内容は変わるけれど)、コミュニケーション、マ ンガ(言語による通訳・翻訳機能の向上により淘汰されなくな
- シャツ パンツ(はずかしさは変らない) ペン(文字は残る。 ダイレクトに消す、書ける技術が発達する)(教育機関)
- 神社仏閣 (文化財としての価値)、京都 (観光地としての価値) (教育機関)
- · 寺、神社、大学(教育機関)
- ・靴、服、マンション、サッカー、時計、キリスト教、美容院、
- 金融、貨幣、株式、おはし、日常、血、茶碗、宗教、神社、 寺. 戦争. 教育(教育機関)
- 愛(人を人たらしめているものなので)、宗教(人は必ず終わり迎 える。教育が生きることだとすると、終わりを意識下において生 きるために宗教は残る)、教育(人が存在する限り、人は学ぶ動物
- であり、それを支える教育は形を変えて残る)。 ブランド (常に 概念を変えながら残っていく。今のブランドが残るわけではな く、概念が残る。メーカーではなく、工芸というブランドの誕生 する日がくるかも)(教育機関)
- ・ダンス(人類が生まれてからプリミティブにあるもの)、道具 (用のもの)、美しいもの(民族の思い出のあるもの)(教育機関)
- 和食、和菓子、茶、御所、神社仏閣、観光資源、京町家(教 育機関)
- ・合成樹脂。石油系染料(教育機関)
- ・食器 (日々使うもの)、畳 (日本人にとって気持ちいいもの) (行 政・使い手)
- 哲学、住宅、公共交通、アート、思想(行政・使い手)
- ・机、椅子(人間は考えるから)、武器(戦争が続くから)。建築(い い建築は残る)、冷暖房機(気候が変化するから)(行政・使い手) 寺院(今まで残ってきたから)、和食(日本人であれば不可欠) (行政・使い手)
- 一つしかない本物(楽器、公園、神社仏閣、絵画などの美術品、 皇居、国会議事堂)(行政・使い手)
- 鍋、釜 (手づくりは必要。 おいしい)、ピアノ、楽器、スペース シャトル、手こぎボート、新幹線(行政・使い手)
- ・丁場 学び舎 ポイント ホテル 広場 職場 地域 家 病院、飛行機、美しい自然(行政・使い手)
- 新幹線の駅、公立病院、特養ホーム、社会福祉法人(行政 使い手.) ・万国展覧会、復元した歴史的建物、代々木体育館(行政・使
- 器 (毎日使用するから)、糸、衣類、着物、木、家、住居 (行政・ 使い手)
- 健康器具、翻訳機、鉄道・旅客機、医薬品、酒類(行政・使い
- 和食、紙、器、寺院(行政・使い手)
- 世界遺産、技術、和食(行政・使い手)
- ・神汁小閣(精神的支柱の重要性は変らない) 画像共有(良いも のを知る機会であり、誰でも見ることができるから)、支援策や 保存学(研究の多様性が進み、新たな層が工芸に関心を持つた め)(行政・使い手)
- 廃棄物 (埋めたものはなくならない)、エアコン (最高のぜいた く品になる)(行政・使い手)
- 法隆寺、清水寺、三十三間堂(行政・使い手)
- 営み(行政・使い手)
- カラオケ(人と楽しめる時間は大事)、万年筆、レコード(アナ ログの見直し)、書の文化(行政・使い手)
- 神社仏閣、美術館、本、ノート、鉛筆、米作、日本酒、畳、

- 着物(文化、あるいは精神に深く結びついているものは残りそう だし、残したい。こうしたものが残らないとすれば国家の存続は 危うい)(行政・使い手)
- 船旅、寺社、音楽、戦争、レコード (美術館・博物館) · 寺社、食器、衣服、家、冷暖房(美術館·博物館)
- 手わざ(残るというか残したい!)、自然素材(すでに100年以 上残っていることがわかっている)、書物 (美術館・博物館)
- ・山、自然、食べ物、飲み物、川、谷、SEX(人間、動物、植物な どの生き物)(美術館・博物館)
- ・神社仏閣(心のよりどころであり、世界遺産など観光資源でもあ るから)、古典(今までも読み続けられてきたから。 ただし本とい う媒体ではない)(美術館・博物館)
- ・大学、美術館、博物館、伝承アーカイブ (廃れていくものだ から、残したい)、衣食住文化(人の生活日常は民族性。続いて いくはず。残ってほしい)
- ・人間国宝、東京(都市)、観光業、食産業、美術館、文化財、 SNS
- ・衣類、靴、経典など
- ・家
- ・空港 (形は別として空の移動)、鉄道 (上と同じレールの上の移 動)、オンライン、旅、教育
- · 和食 和服 神社仏閣
- 伝統的建物(遺産としてのみ)、伝統品(技は残せても流通、消 費品としては残らない)
- 寺院(心のよりどころ)、山林(環境のため)
- ・本(ノスタルジックに残る)
- ・お寺、神社(心のよりどころ)、家族、会社、大学
- ルーヴル美術館、エッフェル塔、大英博物館(ヨーロッパ観 光に関するもの、ヨーロッパの古い町並み、)、修学院離宮、金 閣寺、清水寺、京都御所(京都観光に関するもの、お土産など)、 和食(世界遺産になったから)
- 原子力発電による産業廃棄物(200年も300年後も)
- ・ 仏壇、仏具 (形は変わると思うが、儀式や宗教は残る)
- ・ 学校(残るが、現状の体制は崩壊していると思う)
- ・茅葺き民家、着物、おはし
- ・レストラン(食べる楽しみがある)、病院
- 陶磁、漆芸、染織、衣服、金工、神社や教会、和食 ・新幹線、和食、生涯学習システム
- 通訳、テレビ (モニターの単一化)、植木屋 (多様なため)、お札 のお金 (バックアップとして)、紙 (意外とダイナミズムを持つ 記録伝達ツールだから)
- 会議, 戦争, 学問, 器
- ・寺社への参道 (日本の建築物へのアプローチとしてなくてはな らない)、大和ことば(日本人の心を代表し、伝える手段として なくてはならないもの)
- ・おはし、茶碗などの食器、寺や神社など歴史的建造物
- ・衣食住、学校、国家、文化芸術、家族(社会の基本要素)
- ・手づくり (機械でできないもの)
- 学校、和食器、美術館、博物館、和服、和室、寺、神社、文 化財、工芸品(ものは残るが)
- 学校 (学校は社会の基本的機能であること)、文化財 (正倉院な
- ・自動車(電機や水素など現在のものからは進化して残る)
- ・美術館、博物館(何らかの形では存在するはず) 茶碗とおはし(食器)、お茶、歌舞伎(芝居)、本願寺(伝統が あったり、これまで残ってきたもののなかで生活に使われていた
- りするものは残りそう) ・おはし、酒(日本酒)、茶碗、茶、皮革製品、魔法瓶
- 戦争、東大や京大(歴史ある名門)、お祭り、神社仏閣、IPS、 リサイクル、着物
- 駅や空港(人の移動基点となる場所はなくならない)、衣服、住 居、食器(衣食住に関するもので、生活文化に密着するものはな くならない)
- 病院、学校(教育は永遠)、神社やお寺(人間の精神的よりどこ ろだから)
- ・暦、学校教育、文化財、文学、お墓、病院、憲法、衣服、お 米、パン、肉、魚、和食、伝統芸能
- ・国会議事堂(全国に一つしかない)
- 和洋服、食器(ガラス、陶器)、家(たんす等家具)、寺院、新聞、 書籍、学校・大学、ラジオ、アミューズメントパーク
- 器 (縄文時代から残っている)、衣類、木造建築 (自然素材への 回帰) 交诵手段(移動のため)
- ・プラスチックの破片(自然に還らないから)、アートモニュ メント (残すことを目的にしているから)、原発 (資本主義の仕 組みがなくなりそうもないから)、自転車(構造がシンプルで使

- ・万年筆、集合住宅、本、文化財建造物(心を満たすものは残る)
- ・富士山(日本のシンボル)、絵、着物(スターウォーズ的な感じで、 外国の人が着始めるから)、文化(データとして残る)
- 奈良大仏、着物生地、道具、一部の美術品
- 寺院、美術館、博物館
- ・田んぼ 白分の家
- SNS
- ・学校(育成機関)、手仕事による産物(触覚が衰えることに対する 反動)
- ・飲食店、料亭、動物園、寺社、博物館、美術館、旅行、ロケッ ト、旅客機
- 文化財、美術館、博物館、オリンピック、物干し
- 美術や工芸、芸能(人生の楽しみであり、文化の中心だから)、和 食、和服、寺、神社、自転車、ロボット(自動化)、自然
- 漆塗りのお椀(この器以外で汁物いただくのは、嫌だと思う人は かなりいると思う)、手ぬぐい、風呂敷 (便利でデザインもフレキ シブルなものなので)
- ・パソコン、冷蔵庫、掃除機、洗濯機、酒(生活に絶対必要)

#### ❷工芸を 100 年後に残すにはどうすればよいか。 独自の作戦を考えてください (作戦名+具体的に)

- ・「日本文化を楽しむ」。学校教育(授業)に伝統工芸、日本文化 をカリキュラムとして取り入れる。情操教育を充実させる (つくり手)
- ・「100年前を見直す、ふりかえる、再生させる」。今100年前 の工芸品を同じように作ってみて、ないが残って何を失っ たのかを検証する。そこで何を残せるかを考える。何を再生 できるかを考える(つくり手)

・「『使い手』のチェック」。日々変化する「ニーズ」「使い手の考

- え (生活様式)」などをいつも (毎月のペースで) 調査していく ・「思いを形に作戦」。いいものをしっかり伝えていく。お金の 動きは大事ですが、それを運ぶだけの人たちが関わると無 駄になります。ストレートに思いやものを伝えるシステム
- が、100年後にも続くと残るように思います(つくり手) ・「1000年ものづくり構想」。産業革命以降、私たちの手仕事 にたずさわるものは、機械と戦ってきた。今後、手仕事は手 仕事として生き残るので、100年後は今までの100年と比 べるとやりやすくなる。1000年後に見たときに、こんなす ごいものを1000年前につくったと思えるものつくってい
- く(つくり手) ・「利潤が一番という価値観をくつがえす」。ポイントを数え るような価値ではなく、数えられない大事なものをみんな で共有する。子どもの頃からそのように感じられるように 導く。まずは、自分を認める姿勢が必要。そうすれば、自ら を育む風土、文化を愛するようになると思う。工芸はさまざ まな可能性を持つ大事なもの。それを楽しみながら愛でて、 大切にできる価値観を共有していくことが基本。まずは私 たち大人がひとりでも数えられない大事なものに気づくべ
- き(つくり手) ・「向こう三軒、両隣作戦」。つくり手(使い手、つなぎ手も同様) が自身のことや自分の仕事を知ってもらうようにコミュニ ケーションする。工芸にたずさわる人が全員でかかり継続 すれば、工芸価値は当たり前にその価値を持ち、変化しても つながる。外国や子どもにまず伝え、伝えるために日本人 (大人) はその価値を再認識する(つくり手)
- ・より多くの方に工芸の良さを認識してもらうためにも、子 どものときにこそ使い捨てのものではなく、良いものを大 事に使うことを教える。そのためにも子どもを育てる親の 認識を育てる(つくり手)
- 「単位所得倍増作成」。家内役の地位の確立。家内役の予算を 増大することにより、家や生活を飾ることが復活。それをも とにした「もてなし」の心と、「慣習」を招く。所得の倍増は 専門家にお任せします(つくり手)
- 作品は作者の思いをつづったものであるとすれば、作者の 気持ちを次世代に継いでゆくことが、「もの」を残していく 方法だと思う(つくり手)
- 自然を大切にする。工芸から現代アートを生む教育をする。 日本からグローバルアートを生むには根底に工芸的技術や 素材が大切。世界のアートフェアに工芸の進出(つくり手)
- 「触れて使おう作戦(ハレの日を増やそう)」。子ども、孫を交え た家族一同が、ハレの日を正月、お盆、記念日などを決め、 自宅にしまって置いている家宝に料理を盛り、使って集い 楽しむ。次世代、子どもにしっかりと美意識(日本の作法)を 伝えていくことが大切だと思います(つくり手)

- · 「工芸、前へ作戦 」。工芸を残すには受身ではなく、積極的 に残すことが大切である。そのためにはいろいろな方法 により、工芸の体験を増やす、使い方を子どもに教えるな ど柔軟な工芸についての考え方が必要である(つくり手)
- 「魅力ある作品づくり作戦」(つくり手) ・「ことばを知る」、外国語への対応はもちろんですが、日本 語、特に工芸に関する言葉をもっと知り、使える若者を増 やすことが重要だと考えています。簡単な言葉にして、そ れを訳しても、文化の深さが伝わらないと思います(つく
- ・「工芸デザイン (図案、かたち) について」。 デザインにも伝 統の形がありますが、ものばかりでなく、そういった概念 的な職人教育も必要だと思います(つくり手)
- 「廉価版作戦」。工芸を知っている、知らないで二極化して いるように感じる。工芸にまったく接しない人向けに廉 価版をつくり、販売し、「入り口」をつくる。すでに実施し て失敗も聞きますが……。生活に余裕がある環境は床の 間があり、庭がある。今後、どんどん経済的に二極化して くると思うので、余裕のない層にどれだけ届けられるか が、次世代の美意識の教育になると思う(つくり手)
- ・「三つの道」。 ●遺産としての工芸を残すのか。 ②スーベ ニールとして懐古趣味、郷土趣味に訴えるのか。●もうー つの工芸を発達させた伝統 (精神的なあり方。 たとえば 「もっ たいない」「なるほど」の言葉。手づくり、コンピュータ・機械の本 質的な違いが、日本の工芸を世界に通用する芸術へと高めた精神 的なあり方をさとることからはじめる道)(つくり手)
- 「国際的な交流」。●日本だけでなく広い範囲より工芸品 の理解を得る。❷技術知識を把握してもらう。❸教育、研 修などのプログラムを行う。 4工芸の使用範囲を工芸デ ザインから現在アートと広げる。❺デザイン力をつける (つくり手) 「楽に楽しく」。工芸品が生活、人生のなかでどのように良
- い影響を使う人に与えるかを伝える。工芸を楽しむ会を 各自、各地でグループをつくり、活動する。高級でなくて も、身近なものから始める。着物を着て、歌舞伎を観て、 和食を食べる会などから少しずつ広め、深めてゆく。楽し みながら進める。各々ネットやオフ会で情報交換をする (つくり手)

「二極化作戦」。A:手づくりのもの(工芸、食材など)と、B:手

づくりと同じに見えて食べられる大量生産品のものの区

別をなくす。そして、AをBの×一万倍の価格のマーケッ

- トをつくる(つなぎ手) ・「工芸維新・伝統復古作戦」。現代美術や現代工芸は時代が 残してくれるものですが、幕末や明治初めの工芸(金工、陶 芸、漆芸、染織など) は技術力が高く、現代の作家や職人に は再現不可能と思われる。これらの技術力を後世(100年 以上後も)に残すための教育徒弟制度などを支援する(ここ に公金を補助するシステムも構築)。国指定重要技能者をつく
- る(つなぎ手) 「まずは食事を作って食べることが大切」。コンビニで買 うことだけの生活では、食器を選ぶなど楽しんで食事を しないため、文化から縁遠い (個食も込みで)。 日常生活に 食器、うるしなどを楽しんで使うことがまず大切。生活を 楽しむ暮らしをすることが魅力的な器やうるし、ガラス に目が向くし、買う。つくり手の素材は公で確保する。残 すしかない伝統工芸の貴重な技術を持った方を保護、育 成するしかない。市が骨董屋をやり、大切な道具の古いも のを集めて、使う人に譲る。(つなぎ手)
- ・「もういちど初等教育をやり直そう!作戦」。私も含め、中 高年世代で伝統工芸への関心があっても、知識不足のた め尻ごみをしてしまう。でも、「知りたい、たずさわってみ たい、やってみたい! | という想いを持つ人は少なくな い。小・中学生と一緒に学び、体験できる公の教育システ ムを構築すれば、美術史研究、つくり手、受容層の養成、 実生活+社会面での刺激と活性化、後継者育成の好機に なると考えます(つなぎ手)
- 「伝えるストーリーがあること」。ものだけでは残らない。 その裏にある価値、ストーリーをどう伝えるか、伝わるか が重要。そのための伝え方をどうやっていくのかが今後 の課題。作家のこだわり、技術、それに価値を感じた使い 手の想いを子孫にどう伝えるかは、ストーリーが大切。モ ノ + αが必要(つなぎ手)
- ・「こども目利き育成プログラム」。 小学校中学年から中学 生向けの鑑賞者教育を工芸に特化して実際に使い、その 使用感や大量生産品との差を良い点も欠点もともに感得 する。そして、自分の好みを認識したうえで選び取るまで

- を行う。これは長期的な消費者教育となり、産業の持続に つながる(つなぎ手)
- ・「器感動作戦」。日々の生活のなかで、美しく、楽しく、感 動しながら生活できる器(もの)をつくること。そのことこ そ100年後も残るものだと思う。日本の心、文化のスプ リットも呼び起こすことも同様に平行して行う作戦です (つなぎ手)
- ・「ワンハンドレッド作戦」。100人のつくり手、100人のつ なぎ手、100人の売り手と精鋭人材のチームを結成(国内、 海外、日本人、外国人問わず) し、専門的な集中的な展開を試 みる(つなぎ手)
- ・「子どもの感度を上げよう―まずは先の50年の担い手と なる子どもたちへの期待をこめてし、親や祖父母世代の私 たちが家庭で実際に使用したり 美術館や博物館 お寺な どに連れていったりする。これが理想ですが、なかなか全 家庭には厳しいので、幼稚園から小学校における教育プ ログラムで、工芸の年齢別にあった内容のワークショッ プを義務づける。良いものを丁寧に使っていくことの大 事さを教える(使い捨てるのではなく、修理しながら長く使う こと)。目利きの人の底上げにつながるかも? 生活の質 の向上にもなるかも?(つなぎ手)
- 「国家公務員に伝統工芸文化を必携にさせる作戦」。各種 国家公務員試験項目に伝統文化工芸を課目として加え る。これは、伝統文化や工芸を知る必然性と、製作にたず さわる人に知識を持ってもらうことが重要だと考えるか らです(つなぎ手)
- 「国家的記念日『日本工芸の日or週間』を設け、国民的休 日とする。各地で工芸を学ぶことが当たり前となり、つ くり手になりたい人も使い手になりたい人も増えると思 う(つなぎ手)

「生活を見直し大作戦」。日常の生活のあり方をもう一度

ゆっくり見直すキャンペーンを行う。日本文化を見直す。

いものを、より多くの目に触れるようにする什組みをつ

- 世代をこえて「もの(工芸)」を通したコミュニケーション を行う(つなぎ手) · 「もっと工芸を身近に感じてもらう」。その時代に合った ものを制作する。それと同時に、これまでの後世に残した
- くる(学生) ・「工芸に伝統という頭文字をなくす」なぜ、工芸=手づく りと考える人が多いのか? かつては板染め技法があっ たが、型紙染めの台頭とともに消えていった。これは型紙 染めが最先端技術だったからである。そう考えると、イン クジェットプリントなども工芸になるのではないのか? 伝統と考えるのは良くないと思う。これから先に残るも
- のは、デザインだと考える(学生) ・「工芸品を使う作戦の実施」。伝統的工芸品に指定されて いる工芸品を、公務員は公的予算で使う義務づけて、そこ から広げていく(学生)
- 「各地で同時ワークショップ(同一内容)を開催 |。同じ素材 や題材を使ってもでき上がるものは異なる。でき上がっ たものをデータで送り、見比べることで地域の特性を理 解する。自分の地域の工芸や好みを再確認できる機会に なるのでは(学生)
- · 「今と未来をつなげる」。職人、デザイナー、アーティスト (できれば現代アーティスト)、工芸品の使用者、女子高生、 OL、マスコミ、さまざまな役職の人々を集め、トークを し、意見交換をしてもらう。若い人からの意見を積極的に 取り入れる。海外で展開するということを重視して、「工 芸」を輸出する。工芸の新しいイメージが生み出されるよ うにする(学生)
- 「浅く広く作戦」。ワークショップなどで気軽に技術の基 本に触れられるような場を増やす。興味を持つ人が増え れば、深く工芸と関わりを持ちたいと思う人がいるかも しれない。なるべくなら親子で参加できて、考えられる機 会にする。工芸について知る、ちょっとしたきっかけをつ くるための活動(学生)

「娯楽と工芸コラボレーション作戦」。人にとって娯楽は、

いつの時代も必要とされる。工芸とはかけ離れた分野で

あるとは思うが、世の中の注目を集め、工芸へのとっかか

りをつくるために、何かとコラボレーションするのは一

つの方法だと考える(学生) 「人気者に頼ろう作戦」。情報発信能力のある人に頼る、利 用する。有名な海外アーティストなどに工芸品を使って もらう (日常的に、またはミュージックビデオのなかなどで)。 そのことで多くの人に工芸の存在を知ってもらうと、工 芸品を欲しい人、技術に興味を持つ人が出てくると思う。

45

21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

鷹峯報告書Light.indb 44-45 16/03/29 14:25

- 100年後まで残せられるかはわからないが、現段階で認知度を高めておくことは意味があると思う(学生)
- ・「大学と工房の単位システム」。大学生程度の年齢になると将来についてリアルに考えられるようになると思います。「工房で修行がしたい」というような学生に、学校側が援助をする。工房での弟子入りという点で単位として認められるといいと思います(学生)
- ・「日々日常のなかで日本の文化を伝え使っていく作戦」。 幼小中高において四季折々の行事(お正月、お節句、お月見など)を取り入れ、定着化するシステムを文科省につくってもらう。成人式で着物を着る、総合学習の時間は文化の 伝承にあてるなど。伝統品の使い方、手入れの仕方、修理などが一般に知れわたるは、小さいときから伝統に触れるチャンスをつくり、与えることが大切(教育機関)
- ・「区別化、ブランド化、特別化、自然化」。家や車などはお金を出しても買う。特別のニーズにあった手づくり作品 (介護、和食、マイカップ)を初等教育カリキュラムに入れる。 工芸が生活に密着するものなら、100年後の生活の変化 を見すえなければならない。退職後の個人農園のように 個人工芸教室(地域)や、工芸村を観光スポットとして地域 創生に役立たせる(教育機関)
- ・「下賜の復活」。ものを贈る文化を見直す。「虚礼廃止」の見 直し(教育機関)
- ・「さようなら『工芸』作戦」。「工芸」という神秘に私たちは深くとりつかれてはいないでしょうか。「工芸」を素材の佇まいを整える技術と理解すれば、さまざまな連携の可能性が広がると思います。そうした技術を他分野に適応させていくべき。建築やデザインにおけるデジタル技術を中心とした技術革新にもこうした技術は十分に活かせると思います。「工芸」という呪縛から自由になるべきです。そのためには、他の分野との技術的コミュニケーション能力を育てる必要があります(教育機関)
- ・「消費者行動を育む作戦」。なるべく小さい子どものときから、美術工芸に触れる時間を増やす。科目としての美術の時間の増設(教育機関)、工芸の開放、ワークショップ(地域)など。安い、高いという価値基準以外の消費行動を育てていく。子どもを通じて親も学ぶ(教育機関)
- ・工芸の世界で就業を希望する若い人を工房へとつなぐ。 「後継者育成」はすでに十分行われているので、彼らを現場へとつなぐ取り組みが必要(教育機関)
- ・「職人技のネットワークへの『放流』」。職人の作業を録画 し、ネットワーク上で公開する。また、工芸作品の3Dデー タを収集し、ネットワーク上で公開する(教育機関)
- ・「工芸を残さない作戦」。工芸は人の変化に任せ、自然淘汰されるものであり、残すものではない。日本文化は大事だが、ものは縄文・弥生から江戸、明治まで進歩のなかで変ってきたものである。明治以降にできた概念である「工芸」を残す努力をする必要はあるのでしょうか。「工芸」という言葉をなくす。ただの「器」「装飾品」でよいのでは。押しつけのような「伝統工芸」は、人の生活に必要ないのではないだろうか(教育機関)
- ・100年後の世界がどうなっているか予測できるだろうか。どんなに進んでいても、またどんなに荒れ果てていても、原始の時代からあり、声を放つ、身体を動かす、表現するといった行為は残ると考える。そして、それに必要な道具もまた残るだろう(教育機関)
- ・保存修理を積極的に行う動機づけが必要。税制面の優遇 する今、工芸品はぜいたく品として固定資産評価が高く なる。性能評価での科学的研究を充実。職人技の評価。庶 民にとって身近にすることで、本物で創造性の高い高価 なものも残る(教育機関)
- ・「生活に取り入れる運動と教育」。幼児教育から本物を手 に触れる環境をつくる。合理性のない極端な事例をつく る(教育機関)
- ・「小中学校での授業としての取り組み(ワークショップではなく)」。自分が使う食器をつくる。自分が書いた書道作品を掛け軸にする。それらの取り組みの発表会(展覧会)を行っている。
- ・明治以降、高度成長を経て、産業としては厳しい時代をくぐり抜けて残った「工芸」は、効率化と優先したものづくり環境でよくぞ残ったと言えるかもしれない。私は建築設計を生業としているが、この「工業的手法」、または「工芸的発想」から建築をもう一度構築できないかと思う。このように「工芸」を中心につながるもの、食、空間、思想などにストーリー展開できないかと思う(行政・使い手)
- ・「買う」「売る」「使う」「直す」を続けるためには、深く考え

- 続ける専門家の存在は不可欠。常に進化をし、より人にインスピレーションをもたらす活動が必要だと思います (行政・使い手)
- ・「生活に侵食させる」。生活の質を向上させることに力を 入れる。食などとコラボレーションして生活のなかで残 す(行政・使い手)
- 「オンリーワンプロジェクト」。作品の行く先がわかる仕組み(QRコードのようなものでHPにつなげる)をつくる(行政・使い手)
- ・「どこでも作戦」。目で見る工芸事典をつくる(画像、手に触れられる、感じられる)(行政・使い手)
- ・文化のための経済? 経済のための文化? 生活のなかの文化? 文化のなかの生活? 工芸?(行政・使い手)・「『工芸』君(人たち作戦)」。今まで工芸にたずさわったこと
- のない人に工芸を伝える。たとえば、海外の富裕層、海外の中級社会、障がいをもつ人、工芸をしらない子どもや若者。伝え方例として、工芸×新しい暮らし方、工芸×新しい「技術、工芸×移動手段、工芸×学習。組合以外の流通ネットワークを壊す。産業プログラムを壊す。「ブランド」よりも「スタイル」で、新しい価値を生み出す。いいクオリティを生むスタイルをつくる。既存の価値判断や価値基準にとらわれない(行政・使い手)
- ・「社会福祉法人特別養護老人ホームを地域工芸作家の個人美術館にする」。新設の特養ホームは補助金もあり、市施設は立派で半永久的に地域に存在する。入所者も地元の人で地元行政の管理下にもある。お見舞い、お祭りなど、地元住民が入館しやすい。予防介護、認知症予防のためにもアートの刺激は医学的にも認められている。地元工芸作家の個人美術記念館として、地元住民からも大事にされる。社会福祉時法人は株式会社、一般社団よりも法人としての存続性は高い(行政・使い手)
- ・「現代生活の遷宮/勧業博覧会の再現イベント」。ある時点での生活用具にかかわる伝統工芸品を体系的に定めて、20年(または10年)に1度再生産する儀式(イベント)を行なう。継承された技術素材の確認と生活文化の変化を考える機会をつくる。さらに、全国世界に散っている明治の勧業博覧会出展品や万博日本館出展品を集めて、勧業博覧会そのものの再現イベントを実施(行政・使い手)
- ・「親子で審美眼を育成するひととき」。子どもに知ってもらうためには、まず親から文化を楽しく、わかりやすく教えることが必要。つなぐのは専門家だけではなく個人から(行政・使い手)
- ・「日本の工芸家100人紹介」。工芸家をメディアを使って、 日本中に紹介する。これを通して、少しでも一般の方の目 ききを養ってもらう (行政・使い手)
- ・「工芸需要の拡大作戦」。和食文化の促進のために、和食外食費の税額控除。工芸品を買った人への補助金、税額控除、相続税免除。つくり手の所得税、相続税免除(行政・使い手)
- ・「100年プラン作戦」。100年伝承するための長期的スタンスに基づいたプラン、思考が必要である。1年後、3年後、10年後、20年後、50年後、100年後など実際に計画してみること。例をあげると、海外ブランドは長期的スタンスのブランディングやブランド直営で価値をつくり、一流ブランドとして生き残っている。日本は現状、現実的側面や個人的嗜好に流され、我慢が足りず、2、3年くらいのプランしかない。何も成就しない短動的スタンスを変えることが必要(行政・使い手)
- ・「誰もが一つのエキスパート大作戦」。数ある工芸品のすべてを知ることは難しいので、自分の好きな工芸品を選びながら学ぶための作戦。好きと思う工芸の技術や歴史を知り、人に伝えるという経験を通して、自らもより深く対象を知ることができる。また、他の人の好きな工芸を知る機会にもつながる(行政・使い手)
- ・「マイナンバーに平行して『マイ工芸』を持つきっかけの 日を作る』。「着物の日」などの記念日を年に数回ほどつく る。また、体育の授業で全国羽子板選手権をしたり、給食 を器で食べたりして、文化を横断的に学ぶ授業を行う。知 識だけではなく、背景もしっかり話せる人に授業をして もらう(行政・使い手)
- ・ ●本物は残る。時代が経過してかつて価値を増すものが本物である。本物を評価するシステムが必要。 ❷本物を世界中に売り込む。 ❸ そのために、日本全体で一丸となって売り込む (オールジャパン体制) (行政・使い手)
- ・私たちのライフスタイルを品位あるものにすることこそ 重要。 ワクワク感のないことが多く、心踊らないものは生

- き残ることができない(行政・使い手)
- ・海外から来日する政府関係者等への記念品を工芸技術で 製作(発注)する。小中学校の図画工作の時間を充実させ る。工芸の「体験」よりも踏み込んで、ゼロからつくりあ げる課題を増やす(行政・使い手)
- ・「日本の文化を子どもたちに感動させて伝える大作戦」。 七五三のときに、子どもたちに立派な呉服(着物)を着せる。正月に家族そろって正装し、漆の重箱に飾った料理で食事する。各地に伝わる祭りに学校単位で参加させる。家庭、教育の場が中心になって子どもたちに文化による感動を与え続けていくことが大事だと思います(行政・使い手)
- ・「コールド・ジャパン大作戦」。工芸の担い手を海外からスカウトする。または、興味を持つ海外の若者を体験入門させる(美術館・博物館)
- 「「京都美術工芸トリエントナーレ」を開催する」。国際的な質を高める。美術館の立場からすれば「質」が伝説を作るものと考える。まずは3つのレベルを上げる。 ①マニュファクチュアレベル。②美術工芸作家レベル。③グローバルスタンダードレベル。そして、①原材料産地のリンケージ。②工芸産地間のリンケージ。③工芸産地と消費者のリンケージ。④消費者同士のリンケージ。●海外へのリンケージ。これら5つをつなげ、その情報をプレゼンテーションする(美術館・博物館)
- 「作品、商品を発表する際に、素材、技術、技法を必ず表記する」。いいと思った「もの」がどのような素材でできているのか、またどのような技が使われているのか知ることができる(美術館・博物館)
- ・「工芸は生活のなかの美作戦」。工芸は生活のなかの美だからと鎮座ましますだけでなく、使われてこその工芸である。傷ついてもいい、汚れてもいい、日常、気軽に、そして楽しみを持って頻繁に使われるべきだと提唱していく。工芸使用にあたって、使用助成金制度を導入する(美術館・博物館)
- ・「工芸でリラクゼーション大作戦!!」。神社仏閣や古典の書籍はこの100年も残り続けてきた。それは人々の心のよりどころであり、いつの時代にも人の心に寄り添ってきたからだ。だから、工芸があることによって「落ち着く」「癒される」という価値感を残す(あるいは再構築する)仕組みをつくっていくべきではないか。非日常の場面では観光(今でもすでに着物でお出かけサービスがある)でリフレッシュ。日常の場面で使える商品開発が必要(美術館・博物館)
- ・第三者が客観的に価値を評価できる情報提供の仕組み (昔でいう骨董品の箱書) ・「草の根楽しい作戦☆」、文化の啓蒙、精神性、美意識、す
- べての人に
  ・「工芸立国」 ●若手作家が食べていける仕組みづくり。工芸品が売れる仕組み。 ●日本文化のなかでの位置付けをして国内外に発信。アトキンソン著 『新・観光立国論』では、日本文化の特色を「気候、自然、文化芸術、食」とする。その4つの視点で工芸を位置づける。●小学校教育での位置づけ。日本文化としての工芸を伝える。●世界無形文化
- 遺産としての認定)
  ・「海外での販売、集金システムの確立」。エージェントに惑わされず、確実な収益システムが必要。業として成り立つようにする。行政の介入や外交の道具でなく、個で成立させたい。
- ・「専門家育成」。●使い手とつくり手をつなぐ仲介者。工芸の専門的な知識とマーケティングの知識を持ち、情報をキュレーションしていく。役割、時代に沿ったかたちで「もの」を変化させ、残していく。②これからの使い手とつくり手のために「もの」と「情報」を管理する人。アーカイブとして「もの」「情報」を残していく
- ・「生きた博物館とアーカイブ」。現状有姿(ありのまま)で消滅しそうなものを、その場で保存していく方法を構築する。同時にデジタル化の推進
- ·「和文化大作戦」。工芸品を買い、日常的に使う。人材を残 すため、家庭、地域、学校、環境、意識を整える
- ・家族や地域性、社会性が薄れていくなかで、より個人に特化した「もの」をつくる。人の行動範囲自体が狭くなるなかで、工芸を「もの」「道具」として残すことは無理があるのではないかと思う。伝統を生活のなかに活かしていくという精神的なものしか継承できないのではないか
- 使い手の工芸に対する意識の向上
- ・国内外の美術館、博物館、ギャラリーなど流通に関わる機関とともに、海外展開へ向けての連携を行う。それは、見

- せるだけでなく、売るためである。今回、海外の工芸関係者 がいないのが気になった。特に、工芸は東アジア文化圏に広 がる文化です。これを日本だけでなく、東アジアぐらいの文 化ので考えるべきでは?
- ・「自分の先祖を大切に」。子どもや孫が家(家系)を大切にする ことを教育し、知らしめる。日本人の心を残していく
- ・「巨大アーカイブ&ミュージアム構想」。工芸について一つずつ細かなつくり方から使い方、注意点などをデータ化してアーカイブする。さらに良いものをできるだけ収集保存する。それでは従来と変わらないが、さらに情報をよりうまく活用していくべきである。ITの利用により、一つひとつの工芸品について、より多くの人に参加者に親しんでもらえるサービスをする。そして、日本にとどまらず、海外とのコラボを増やし、デザインをアレンジして日用品のように使いやすく楽しいものを生み出していく。つまりイノベーションもあわせて続けていく
- 「伝統と伝承は違うのだよ作戦」。伝統と伝承は違う。まずその意識改革。先代、先々代より伝わった「もの」「こと」に新しい何かを加え、時代に即した感性に仕上げていく
- ●常に工芸素材や工芸品に触れる体験させる。●つくり手 自身が素材を栽培する。素材入手のコンソーシアムをつく る。●使い手の目利き力をつける。それを子や孫に伝える。
- ●需要創出のため、未来のライフスタイルの模索とアイデアの発信。●日本の地域生活(四季、二十四節季など)の美的感覚を伝承し育成する
- ・「付加価値忘却作戦」。「伝統文化」にともなう「付加価値」という名の幻想を伝統産業従事者がまず捨てて、「もの」そのものの純粋な価値を追求してゆくようにする。海外などで伝統工業が評価されるのはそのクオリティとデザイン性においてだけである
- ・「小学校から高校生までワークショップ大作戦」。小中学校では社会科の授業、中学では技術家庭科など、一週間「モノづくり」の授業を正式にカリキュラムに盛り込む。教師は指導せず、「モノづくりびと」に授業を任せる。小学校だけでは効果を上げられないので、せめて義務教育の中学校までは行う
- ・「工芸技術の進化を促す」。清水焼から産業用セラミックが 発展し、金箔紙技術から太陽光パネルが生まれたことなど を例として、それぞれの工芸を新しい分野で活かす作戦が 大事だと思う
- ・ハレの日、ケの日に使う、伝える
- ・「生活美意識再興作戦」。高度成長期に大量生産中心となり、 いかに安価なものにするかが価値となった。生活用品が安 価に普及した今日、次は美しいものを選んで身の回りに置 くようになると思う。生産者もメディアもすでにそれを やっていると思うが、それをもっと加速してほしい
- ・「試す」「学ぶ」「使う「残す」「つなぐ」を一気に解決する工芸品レンタルサービスと私財/文化財の中間の共有化としての提供(各私財を提供してもらう)。そのために、レンタル費のオーナーや作家へ還元するシステムづくりが必要。アーカイブとしての機能、私財の散失や劣化を防止する。壊れたら直すことができる技術者の保持、維持や使用アレンジ方法の提案(インテリアやフードコーディネータなど異分野のコネクション拡充)。さらに、そのための新しいニーズの提案/リサーチ。1泊2日から1年程度の幅広いレンタル期間の提供(セレモニーだけでなく、フェスティバルでの活用。保証制度修復体制の整備。売り買いの関係性を生み出す)
- ・和服を呉服でなく、「究極のロングドレス社交着」として残 す。生地は天然素材でなく、化学繊維でも可。染料も化学染 料でも可。ただし人間を使ってつくるものであること
- ・「工芸を100年後に残す条件」。政治、経済の安定、良き資本 主義とは、みんなが生きる、生活することを楽しめるよう に、人間のぬくもり、生の温度を感じられる「もの」である
- ・スマートフォンで工芸品スタンプラリーのアプリは、現実 味があります
- 「本物を見分ける鑑賞眼と人材を養成する教育」。本物を残すためにも、見分ける力を若い人たちに植えつけるとともに、技術継承の始動する体制をつくる
- ・使い続け、伝え続けること。そのためにはもの(工芸)の本質 を解き明かし、分りやすく伝えてゆくことが大切。先人たち の知恵に学ぶ。そして、伝統を進化させる
- ・「(反語的に)何もしないオペレーション」。歴史を見ると、本 当にいいものは生き残ってきた。生き残ってきたものがい いもの。真に価値のあるもの。必要以上にすべてを残す方策 は無意味。すべての生活文化(工芸を含めて)を残すことはで

- きない(酷な言い方であることは承知)。そのことを前提として「評価」システムを組み入れて、残すに値するものや分野を振興する
- ・「情報を共有し、情報を活かす」。材料、道具をともに残す。 伝統工芸発信拠点(伝統芸能でいう国立劇劇場のような)の施 設が必要。それは後継者育成機関としても機能する。京 都、東京、金沢、福岡など複数がベスト
- ・工芸が社会における基本的な機能、不可欠の機能として 受け入れられる条件を整備する。日常の生活での実際の 場として欠くべからさる条件を思考する(衣食住)
- ・「クオータ作戦」。公的機関が使用する物品の一定割合を、 地元産の工芸品として法的制度に義務づける。ただし、調 達は市場原理に基づくこと。マーケットの創出、理解の醸 成が狙いであり、補助金などの生産を維持するためでは ない
- ・「スター誕生作戦。」各分野でスターをつくり出す(みんなでちやほやして有名にするのも可)。そのもとで、裾野が拡がるのではないでしょうか
- ・伝統工芸と今を生き、新たに生まれる工芸のあり方を直 視すべき。残す必要性がなくなれば、たとえどのような高 度で美的な技術、精神であっても万物が必滅であるよう に繋消する
- ・安倍総理のもとで「日本の美」総合プロジェクト懇談会が スタートしたので、この報告のなかに工芸振興の具体策 を入れられるように努力する
- ・工芸後継者育成や消費者を集めることが重要であると同時に、工芸産業へのお金の流れ (システム) をどのようにつくるかも大切な視点であると思います。日本でITベンチャーが発展したとき、日本における投資がITへ流れたことがIT企業の成長促進にとつながりました。産業の発展と持続、そして資金をどのように流通させるかを考えることができる人を育てることも必須ではないかと思います
- ・「風習文化のジャストフィット」。今後の人口減少にともない、日本人の風習文化を支える工芸の大きさが合わなくなりつつある。それをフィットさせる(事業サイズ、道具、衣装ほか)
- 「工芸オリンピック」。博覧会開催(オリンピックのように)
   ・無意識で残すか残さないかといったことを考えると、自ずと選別をしてしまうことになり、いろいろなものが失われてしまう。日々に生活を大切にし、緩やかな変化のなかで社会が成長すれば、自然と多くのものが残るでしょ
- ・「あいつの眼は違うぞ大作戦」と「急がば回れ大作戦」。日本らしい眼、持つ喜び、触れる喜び、自分が満足する。そのためには、自分の価値を認識することが大切。これを満足させるために、知識のある人が知らない人に日常的に伝える。「さすがあなたの眼はすごいね、わたしもそうなりたい」と言われる人になる
- ・日用使いの工芸
- ・工芸、技術(業種)、地域の交流、コラボレーション、文化 行政の充実(強化)、社会への価値の発信
- ・「現代社会にとけこませる」。何かに特化した道具ではなく、現代的なアイテムとのコラボレーション、もしくは既存の道具を現代社会のなかで日常的な使用の提案をする
- ・「後継者の育成」。今を最大限に呼吸したなかから生み出される新しい創作的なものづくりをする人材(こういうものが真の伝統的なものになる)。それが新たな伝統となって残る。工芸におけるイメージ性の創出。イメージのないものはダメ。つくり手のイメージが感じられるものは、将来まで残る
- ・「和文化生活体験制度」。住宅建設に際して、床の間、和室などを設ける場合の補助制度。税控除制度を導入。学校教育において、伝統文化に親しむ授業を体験教室として実施。教員の採用において伝統文化に関わる資格素養を必須化
- ・「子どもの教育」。日常的に使い、物の良し悪しを見極める 目をつくっていく教育をしていく。子どもたちの感性を 磨いていく。そしてのちのちつかい手となっていくよう にする
- ・「職人育成プロジェクト」。レベルの高い作品をつくるには、各行程のプロの職人が必要(特に金工、蒔絵、七宝)。みんなが職人になりたがらないなかで、職人が誇りと豊かな生活ができる仕組みが必要。ドイツのような学校で手に職をつける教育コースを設けることが必要(12才から)。ドイツはマイスター制度があり、マイスターになれば社

- 会的にも尊敬され、ある程度豊かな生活も保証される
- ・決定的な名案はないが、関係者の情報交換
- ·「賞品化」。くじ引きなどの当選賞品として工芸品を提供 できるようにする

#### ❸工芸のオールジャパン体制ができたときに、 最初にすべき具体的な連携について書いてくださ」

- ●絶滅危惧の素材や用具の存続対策。②工芸作品制作にかかる素材や用具の情報システムの構築。③工芸品にかかる施設が必要(日本工芸の作品展示、および伝承教育が可能な施設)(つくり手)
- ・情報の公開、各産地組合との共同企画、情報の発信(国内、 海外)(つくり手)
- ・つくり手から消費者への販売経路の近代化。伝統工芸と呼ばれるものの流通形態が混乱している。まずは、中間卸業者の衰退と末端販売者の知識不足があると思う。つくり手に「もの申す」ことのできるつなぎ手を育成するためのプログラムシステムが、このオールジャパン体制として大切(つくり手)
- ●文化財修復センターの設置。文化庁が中心となって設置する。全国の文化財の修復と伝統工芸に関わる職人の保護と教育をする。●マイスター制度の確立。伝統工芸師の資格を文化庁が認定する。オールジャパンで連携する。組織化する(つくり手)
- ・関わる人の集め方。人と人、工房と工房の間に連携する行政、会社、人が必要となります。その人がどれだけ作品に関わり、興味を持ってもらえるか、関心があるかが必要だと思います。関心のない方と話す時間、薄っべらいところしか見ない、そんな時間は無駄……。小さな工房だと、手を動かすしか運営できない状況なので、貴重な時間の使い方がものづくりの小さな工房には大切であり、重要です(つくり手)
- ・流通の信頼。きちっとした評価、つくり手から使い手に信頼ある流れ(つくり手)
- ・情報の共有、広く一般の人にも危機感をわかってもらう。 つくり手、使い手、行政に情報を発信し、多くの協力を求 める。素晴らしい工芸を持つ日本の文化を大切にする心 を育てる活動を。100年後のために子どもたちに。そし て、その子どもを育てる私たち大人に。塩瀬先生のコンセ プトに賛同です。京都は市井の生活のなかに、工芸や古き よきものを大事につないでいく連携のシステムがまだま だ残っている稀有な街。個々からの発信は素晴らしいこ と(つくり手)
- 情報の共有のため、出版(教育者養成用)、多様な価値とその時点を記す。Webは二の次。本は100年の間、読む人の力によって宝になる。歴史も書物、口伝があり、その存在が伝えられた。100年後、もし工芸の力が薄れたとしても、伝えるもの(本)があることでそれが生きることはある。人は歴史から学ぶ。また、現在の人も学べる。読む力、書く力、造る力、使う力。そして、重箱ワークショップを全国でやりましょう(つくり手)
- ・工芸の良さを多くの方に認識してもらうためには、観ていただく機会を多くする。展覧会の開催など(つくり手)
- ・建築周辺産業との共同空間を提案。工芸的システムの共 有、住空間/工芸的空間(概念)の確立。システムへの関与 /まだ見ぬ工芸の誕生(つくり手)
- 益につながるかを決めて実施にあたりたい。税について 美術館の優遇の可能性の追求、輸出に向けた取り組み(つくり手) 基本的に大会があったとしても、具体的な連携の方法や

提言だけでは始まらない。大きな目標を置くか、個々の利

- 参加者の名簿がわからず、事務局の所在も認識できない。 多数の人々を集めて根を廻していく。中心になるのは何なのだろうか。これから先、連絡の方法がわかるようにしていただきたい(つくり手)
- ・美術家、工芸家、職人の枠を外して、同じ目線で観る、交流する。価値観を共有する(つくり手)
- つくり手、つかい手(買い手)、つなぎ手が交流し、意識を 深めていくことが大事だと思います。そこに新たな発見、 発想があり、新たな展開が生まれると思います(つくり手) 工芸という言葉の内容を、共通認識として持つことが大
- 切=定義づけ。その認識がバラバラだと、なかなかオール ジャパンという体制ができないと思う(つくり手)
- ・初等中等教育機関と工芸。15歳以前に学校で、少なくと

- も10年間書道とまでいかなくても習字をはじめ、用具を使用し、約束事を守ってする表現について定期的な体験をさせる。そこに「工芸」も入れる(つくり手)
- ・最初から最後までたずさわった人が見える(会える)仕組み。職人だと一工程でしかかかわりがなく、前後の工程の人としかコミュニケーションが取れていません。また、自分がたずさわったものがどんな賞品になり、どんな人の手に渡ったのかを知る機会が少なく、やりがいを感じにくくありますので、たずさわった人が見え、会い、交流する場ができれば、新たなものが生み出せると思います(つくり手)
- ・次世代へつなぐためのシステムづくり。つくり手の技術 やセンスの跡継ぎはもちろん、工芸を使う文化を教育機 関、家庭で伝えるシステムを作る。※和室を必ず一室はあ る家にするなど(つくり手)
- ・何を残すのか、技術、様式、用、美、それとも伝統の真の意味の「精神的なあり方」を深く認識した上で、新しい工芸立国を目指すのかを議論することを最初にするべき。それを踏まえた連携を後で考えるべき(つくり手)
- ・芸に関するジャパンフェア実施 (1ヶ月以上)。 ●各国において日本工芸を紹介できる期間をつくる。 ●美術工芸品の紹介、販売。 ●使い方の紹介(住と工芸、食と工芸、ファッションと工芸)。 ●日本での施設紹介(教える場所など)(つく
- ・お楽しみグループづくりと情報交換。自分の周りに小さくてもグループをつくること。自分が関わっていることでいいので、次回活動内容の報告、互いのグループがつながったり、どれがいいものか、どこで買えるか、工房へ行ったり、100年続けることはできないと思うが、楽しむことで活性化しそう。自分の技術をいろいろな人と共有する楽しみを持つ。そこからアイデア、必要なものが生まれてきそうに感じる(つくり手)
- ・学校・企業との連携。すべての小中高校、大学に工芸を展示し、使用する。会社も同様。三菱商事アートゲートプログラム、ハーバードビジネススクール、ロックフェラー+Chase Manhattan Bank の実例(つなぎ手)
- ・作家と画廊のコレクターの合体連携。つくり手と販売者 とスポンサーとの一定割合の利益分担と、作品の未来性 について考える。公の補助金ではなく、民間のシステムの 各ポジションで経済が成り立つ方法。自己反省を含め、画 廊 (美術商) 経営者としての勉強不足、直観力、好みプラス 知識力を育成する。美的鑑識眼の向上が作家、画廊、コレ クターすべてに重要である(つなぎ手)
- ・絶滅危惧項目の確認と中長期的対策。伝統工芸・工法・技法は数多いので、まず絶滅が危ぶまれる工芸項目はどのようなものがあるのかを早急に調査し、リストアップをしていただきたい。※すでに滅んだ項目も可。復活させる能力+可能性はあるはずです。専門外から意外に有益なアイデアが結構あると想像するので、広くリストを公示すべきです(つなぎ手)
- ・まず、つなぎ手の充実、育成、使い手のニーズを引き出し、 つくり手に伝えるシステムが必要。つくり手は使い手の ニーズを理解し、新しいライフスタイルに必要なものを つくり出す。その間に立つつなぎ手がいることが大きな 問題。使い手のニーズが見えないものは売れません。売れ なければ残りません。売れれば、使い手が大切に使い、残 る可能性は高まります。大切に使う、使い方やライフスタ イルの提案が重要(つなぎ手)
- ・工芸の基礎である素材道具などを保護し、その技術者を 積極的に育成して、初めて工芸作品を生み出すことがで きる(つなぎ手)
- ・次世代につなぐために知恵、情報の集約と編集。ものと人をつなげるためのスペシャリストの育成。マーケットをつくることができる人(問屋の再生)と伝えるプロキュレーション。教育機関の連携から行政機関の連携へ(つなぎ毛)
- ・絶滅危惧素材の入手・加工・保存・提供体制。 臓器提供を 仲介する財団に近い動きができる体制にする (つなぎ手)
- ・漆器活用連携事案。全国の漆器の本質的なものを全国に 伝え、生産地がオールジャパンで連携する。世界に感動を 生み、また日常生活のなかでこそ感動して、使い手が使い 続けてくれるシステムをつくり上げる。素材を安全提供 し、デザインも伝統を生かし創造していく(つなぎ手)
- ・●使う場の創出と使う人たちを促す仕組み。実際に触れて使うことが重要。一般の人に、その機会を広いチャネルで提案する必要があると思う。※実際、「酒器」などは使っ

- てもらうことが購買につながるケースが多い。 ② 違う価値感での掛け合わせで新しい提案を試みる。 たとえば、音楽など無形の美の要素と工芸を掛け合わせる (つなぎ手)
- ・幅広い情報の共有と、実際にものを流通させるネットワークをシンプルに整える。つくり手とつなぎ手がスムーズに連携できるように(つなぎ手)
- ・なぜ工芸が残さればならないのか? 工芸がなくなると何がおこるのか? 工芸のあることでどのような効果があるのか? 工芸のなくなることが、関係する人々の問題だけではなく、日本や世界の人々の問題であるように向けていく協力ができればと思います。子どもたちに見て触ってもらえる機会を連携して行うことを考えていきたい(つなぎ手)
- ・3ヶ月に一度会合を持ち、「わたしはこのように工芸のファンづくりに貢献できた」と具体的に発表する。参加者がそれを参考に、輪を広げてゆき、使い手とつくり手を結ぶように日々考えること。定期的な「つくり手訪問」「使い手訪問」(食事会なども)も(つなぎ手)
- ・自分の立場で連携を考える。つくり手、使う立場、広める 立場、それぞれの人が身近な人に、工芸をキーワードにし てつなげることが大切(つなぎ手)
- ・現在の工芸にまつわることの情報共有。現在、工芸はどのように認知されていて、何が不足しているのかなどについて、共通認識を持つ。そこからどう残すべきなのかをさまざまな視点から議論していく(学生)
- ・精神性を考える。インクジェット、昇華転写なども受け入れる。デザイナー、図案家などを軽んじることなく、模様などの日本文化の精神性をそれぞれ考えるべきだと考える(学生)
- ・全国一斉工芸品販売日を実施。全国主要都市で、工芸費の 販売日を決定して販売する。国からの予算でメディアな どにアビールする(学生)
- それぞれの工芸品への理解。起源などを知ることで、伝統工芸品同士のつながりをつくることができるように感じます。一つのジャンルで孤立してしまうと、継承者一人が減少しただけでも、その文化の消失ダメージが大きい。知識としてだけでも情報があることは大切(学生)
- ・大学(特に美術大学)との連携。今後、工芸という文化を担 う人々と強力な連携を取る。10年後、20年後も継続して いけるようにする。外国の美術館、海外のキュレーターに オールジャパン体制についての協力の提案をする(学生)
- ・それぞれの活動内容の把握と拡散。フォーラムにあたって需要がなく、失われていく道具や売れない商品についての記述がありましたが、本当になくなるしかないのか。必要とする場所は国内外含めてないのか。各々の活動を知り、より情報網を強くしたほうがいいと思います。また、その情報を拡散することによってクラウドファンディングのように、何らかの形で別の活動との連携へとつながるのではないでしょうか(学生)
- ・定期的に成果発表の場を設ける。工芸が進化するためには日々、商品開発に取り組むことが必要である。そして、発表の場を多く設けることで、周囲の反応から一般の需要に近い商品が開発できると思う(学生)
- ・目標の設定。それぞれが何に困っているのか、何をすべき だと思っているのかを確認し、ひとつ目標、方向性を定 め、そのために何をするかを考える。全員の意識を統一す ることは目標達成に必要だと思う(学生)
- ・日本の工芸に関して、消費者と工芸関係者の接点をつくる。どれだけ良い体制や商品ができても、消費者が工芸を理解し、工芸関係者が顧客満足を理解できないと、工芸は100年後まで持続可能とはならないと思う。工芸関係者が積極的に消費者と接点を持ち、その集まりを少しずつ拡大していって、工芸のソーシャルキャピタルを形成していくべきではないだろうか(学生)
- ・つくり手、つなぎ手、使い手それぞれの主張をまとめる。 本日の会議や、これから控えている東京、金沢での会議の ような大きな話(これもすごく大事ですが)よりも、細分化さ れたそれぞれの側の主張を、一度まとめる必要があるの ではないかと考えました。各々が今、やりたいことは何か ということがまだ分らないので(学生)
- ・工芸の枠を超えた産業との連携。技は伝統産業だけに重要なものではなく、精密なものづくりの場においても必要とされる。その部分に注目し、ネットワークを持つことで広い市場の開拓や、資金の調達にもつながるのではないか。また、若者を育てるネットワークを重点的に充実さるでは、いか。

- 暦を取り戻すための活動をする。工芸を支えるためには、使い手を増やさなければ、何をやっても成果にならない。使い手が減った大きな理由の一つに、旧暦を捨てたことが大きいと思う。お正月に「迎春」といっても、ひとつもピンと来ないからすべてが形骸化し、家でおせちをつくる家も減ってしまった。ひな祭りも桃の季節とずれている。新暦は残しつつ、行事は先人が大切にした季節感とともに100年後に伝えることが重要と考える(教育機関)
- ●オールジャパンではなく、フォー・ザ・エブリワン。

  国や大学主導では継続しない(連携システムに入らないこと)。

  ●地域の取り組みやNPO、組合の取り組みを共有し、すべての各人のために活用する視点が必要(含める連携を支援し、継続させること)。

  ●ユーザーのニーズを把握すること(体制構築やシステムには関心がないと思われるので)。

  ボランティアの育成(予算をかけられない)(教育機関)
- ・日本の美意識 (精神的なもの) を国内外発信する拠点づく り。素材道具の状況把握の調査と情報交換の拠点づくり (教育機関)
- ・他業種との対話(教育機関)
- ・日本に学びに来ている留学生も含めた学生が、工房や職 人さんの仕事に触れられる機会をつくる(教育機関)
- ・100年後のための道具と材料。同業種の連携による道具 や材料の共同購入。将来へのストックのため、道具や材料 をつくる職人さんたちに仕事を継続してもらうため(教 育機関)
- ・新しいエコシステム構築のための情報公開。職人と技術に関するデータベースの構築。そのデータベースを誰もが無料で見られる形で公開する。現在、工芸が危機的な状況を迎えているのは、工芸を取り巻くエコシステム(生態系)が破綻しているからに他ならない。新たなエコシステムの構築のために、まずは誰もが職人と技術にコネクトできる環境を整えることが重要ではないか(教育機関)
- ・新しい流通システムの構築。消費者に生産者をつなぐシステムがない。必要とする人はいるが、どこで買えばいいのか。誰に頼めばいいのか。また、百貨店などで目にするものはほしくないものばかり。工芸の第二ステージへ導くビジョン構築(教育機関)
- ・大きなシンボジウムではなく、小さな輪を全国でたくさんつくる。橋本繁樹さんが発言されていたように、伝統は「もの」ではなく「こと」。それは、所作、精神的あり方だから、それぞれの思いの発露として語り合い、聞きあい、気づきを深めていく場を同時多発で展開する。そこで展開される話はすでに工芸でも伝統でもなく、人としての生き方の話になるはずなので、地域にすむ工芸に関わらない一般の人たちに積極的に聞いていく(教育機関)
- ●道具、材料のように大きな支援がないとなくなってしまうものの支援体制を構築する。●後継者がいないものの記録を取る。●国レベルの予算が必要(教育機関)
- ・日本文化としての情報収集(生活類型別に暮らしのなかでどう扱っているか)。世界(国内も)に向けて情報発信するとともに、リアルに体験できる環境維持のための施策を考案し、共有する。本物を体験できないと良さはわからないし残らない。工芸品は暮らしを豊かに、人生を豊かにするものだから(教育機関)
- ・素材の備蓄を定期的に行い、価格安定と継続を約束する。 次世代の育成(素材と道具をつくる)(教育機関)
- ・①関連する団体、会社、個人の取り組みの情報を共有する Webサイト、あるいは冊子などの構築、作成。②Webサイトにおいては月に一度程度の更新を行なう機関を作る (行政・使い手)
- ・地域ごとに存在する工芸に関するイベントや、事業の情報共有。そして、情報共有サイトをつくる(行政・使い手)
- · つくるフォーラムを具体化させていくこと。これは話し合うだけでは実現できないと思います(行政・使い手)
- ライフスタイルの提案。工芸は生活様式に合わせて変化、 進化してきたと思います。今の生活様式の変化に工芸が 追いついていない。しかし、変った生活様式も大量消費な どで、良いとは思えない。生活様式を工芸に合わせること で、生活の質が向上すると思われる。工芸に合わせて生活 様式は幸福度が高い。そんなライフスタイルの提案(行政・ (由)手)
- 作家と作家の作品の存在を世に知らせるための組織づくり。今ならFacebookのような自分のつくった作品がどう使われているのか、作家は今どんな仕事をしているのか。また次の作品を依頼する(行政・使い手)
- 主要都市での定期的市場を持つ=つなぎ手と自治体の連

- 携(行政・使い手)
- ・目的がこれからの工芸の振興ということであれば、寄付者を募り、寄付金を集め、若手作家や新しい取り組み(個人、グループに関わらず)を支援すること。工芸振興を飛躍的に進められるための規制の緩和。たとえば、工芸品の購入は税制優遇。さらに、工芸品マーケットで市場を活性化する。アートフェア東京のように、工芸フェア東京の開催(行政・使い手)・新しく建設する特養ホームを、工芸作品が展示できる建物
- として設計建築をする (行政・使い手)
  ・ 絶滅危惧の素材と道具のレッドリスト。今回のフォーラムのラウンドテーブルの「絶滅危惧の素材と道具」の成果を継承。 絶滅を予防するためにリストアップし、広報活動を行なう。 絶滅の予防対策は、 伝統工芸の分野だけでは無理なので、幅広く各界の協力が得られるように、絶滅対象と関わる伝統工芸分野も含めて広報できるようにする。 伝統工芸、伝統産業はインパウンド、 外貨獲得の有力な分野であるので、 滅びさせてはいけない (行政・使い手)
- ・工芸をもっと判りやすく。関わっているすべての方を活か す教育が必要(行政・使い手)
- ・道の駅での出展、またはデモンストレーション。全国各所に ある道の駅(または高速サービスエリア)で出店販売する。また 制作工程を実施することで、一般の人の目利きを養うよう にする、上記は自治体が予算的に支援する(行政・使い手)
- ・需要拡大作戦を実現する(和食屋、花街、工芸品流通業者、国税 庁、文化庁)。税金免除の対象となるアイテムの共有化と共通 化。偽者防止のための認証制度の確立(行政・使い手)
- ・業界、専門性を越えた連携。「もの」から「こと」への連携。国籍をこえた連携(行政・使い手)
- ・言語 (用語の定義) やリソースのリストの共有化。 ●異なる立場から工芸に携わる方々の間での共通認識として、用語の定義を共有する。たとえば、グロッサリーの構築。立場により用法が微妙に異なる場合があるため、訳語の認識や定義づけを共通すると、今後の議論がスムーズに進むと思います。 ウェブ上などの情報リソースの共有化。さまざまにあふれている情報のなかから、どのリソースの信頼性が高いかを判断しにくいため、指針や推奨するリソースなどが示されると助かります (行政・使い手)
- ・業界を無視した連携。団体、企業も問わない。現在の技術、 伝統の工芸も問わず、ものを収集する(行政・使い手)
- ・伝統工芸がどこにあるかについて、情報の一元化 (特に外国 人が関心を持ちそうなもの) (行政・使い手)
- ・ダメなことを議論するのではなく、良さを伸ばすために何をすべきかを議論しないといけない。それをオールジャパンで議論するべき(行政・使い手)
- ・それぞれの立場で工芸の楽しみ方を提案する。つくること、 使うことをお互いに楽しめる雰囲気づくり。有識者のみで つくり手が置いてきぼりにならないような進め方を(行政・
- ・サクセスストーリーの形成。需要の創出、つくり手や後継者 の育成、道具や素材の確保についてある具体的なターゲットを定めて、好循環が可能となるモデルとなりうるような 成功例をつくり上げること(行政・使い手)
- ・工芸にたずさわる人材の所得確保、待遇向上。周辺産業も含めた人材確保策(外国人含む)。技の記録、保存。 修復産業の振興、修復・保存拠点確立 (美術館・博物館)
- ・希少素材や道具の流通に関する情報共有の一元化。それとは別に、京都では取り込まなければならないものとして、工房の道具、情報などの保存活用という課題がある(美術館・博物館)
- ・言葉を統一する。世界発信の際、工芸=Craftではなく、工芸=Ko-gei (のの上にパー)、あるいはKougei、またはKogeiの言葉を使用する。日本の工芸という意味をしっかり持たせるために! (美術館・博物館)
- ・つくる人、使う人、見せる人、売る人、工芸に関わるすべての人、組織を対象にしたキャッチフレーズ、ロゴマークも作家すべての工芸の局面で使っていく。100年後に向けて、ロゴ・キャンペーンを推進していく(美術館・博物館)
- ・工芸に関する情報(講演など)の一元化。全国の美術館、博物館、大学、専門学校などにおいて、工芸に関する講演会や授業が行なわれている。アメリカの「MOOC」のように、日本でも過去の授業をネットで公開されつつある。大学と連携して、Museumで発表された研究、起要、講演などをインターネット上で一元化してはどうか。離れた場所での講演でもネットでなら見ることができる。また、今までの職人たちの映像も可能な限り公開する。多言語による工芸解説文が必要。全国の美術館でも英訳は揃っていない。「Shino

- more」か「Shino Style」なのかなど言葉の定義で一度コンセンサスを取るべきだ。また、今回の参加者の平均年齢層が高いのが気になる。学生以外の若者、中間層が参加しなければ、今後「残していく」という課題は難しいのではないか(美術館・博物館)
- ・工芸を生活に取り入れた新たなスタイルに関する情報発 信。工芸の最新事情についての情報共有
- ・海外とのつながり。 販路の拡大。 海外の工芸とのコラボレーション (イタリアなど)
- ・現状把握。そして、工芸に関わる「人」「もの」「こと」すべて の把握と関係の整理
- ・オリンピックをめどに
  ① 工芸の情報発信システム(国内、海外)、伝統工芸会設立。 ② 工芸品の販売システム(施設、SNS他)国内向け、海外向け。 ③ 小学生への教育(日本文化としての本質論として)。 ④ 技術、素材、道具の継承システム・保護等
- ・一本化、一組織化しない連携。文化産業を情報産業として 評価を確立し、不可侵の教育化と独立した連携を行う ・産学の連携
- ・整理、ルールづくり。図書館のように分類作業で。どういったものをどう残すかのルールづくりとその認定、DBル
- ・本物(もの、情報、システムなど)をつくる取り組みを、エンカレッジする仕組みづくり
- ・発信(国内外)。教育の浸透(児童、生徒に対してだけではなく、 保護者に対しても)
- ・「伝統」を各自(社会ではなく)生活のなかに、どのように活かしていくのかという精神的なもの、教育を充実させるべき。たとえば、日本だけではなく、外国に対する発信など(多言語による)
- ・全員の名簿、職種内容などの配布。 縦横のつながりがわかるようなもの。 ネットワークづくり。 裾野を広げる
- ・価値感を統一する。日本人の将来のために文化を残すという価値感を共有することが重要だと思う。個々の利益で動けばダメ(手抜き)と思われる
- ・オールジャパンで売れるものをつくる。世界の動向に取り残されている。特に、西洋のものばかりが美しいとか魅力的に感じられているらしく購入され、国産のものは若い人ほど買いたがらない。まず、外国の売れる製品のデザインや機能、価格などを日本と比べて、どうしたらそれに対抗できるものをつくることができるか研究会を開く。工業製品も工芸などデザイン中心のものも同じ土俵で考えていく。そういう広い討議の場づくりをする。そうしないと貿易赤字で輸入品に押されて衰退は止まらない
- ・ 道具や素材の確保。大げさに言うと自然破壊した後に得ている天然由来の素材や資源は多い。それらをどの程度まで使用するのか、新素材の開発も含め、それらの確保は必要不可欠
- ●絶滅危機の素材・道具のつくり手への援助。 ②和のライフスタイルの啓蒙を幼稚園のときから行う(工芸のある暮らしや節目、祭祀やお祭りへの参加)。 ③京都市では小学4年生の副読本に「私たちの伝統産業」という冊子を配布し啓蒙している。 ④本来、家庭内教育で啓蒙するべきであり、母親教室などで和食器、和食の素晴らしさを伝える
- ・従事者のデータベース化と協業のマッチングをスムーズ に可能とするための体制づくり。今いる人材は何をつく ることができるのか。マッチングや現状を開き、その交通 整理を先に体制化すべき
- 用具、原材料の需要と供給目録。「自分はこういう材料が ほしい」「これをいくらで買う」などの目録をつくる。個人 情報との関係で刊行や公開できないなら、情報集約機関 で紹介し、情報提供できるようにする
- ・この会議に集まっている人のプロフィールを可能な限り 共有する。そうすれば、新たにエンゲージメントがどこか でつくられるはず。そして、新しい連携がどこかで生まれ たときに見えるような工夫が必要。 SNS のようなもので もいいかもしれない
- 国民啓蒙(全国広告)。工芸の素晴らしさのアピール。工芸がどのようにつくられるかを紹介。工芸展の活性化、全国 開催
- ・参加者平均年齢の引き下げ=現代のつくり手、使い手に相談相手と仲間をつなぐ
- ・いろいろな工芸分門においての組織づくり。各工芸(作家)、それを支える道具や素材をつくっている人、そしてできた作品を使い手希望者に見せて求めてもらう人(会社、商店など)

- ・世界に向けて大博覧会。あらゆる工芸の魅力を総覧する べき。購買にもつながる
- ・ざっくばらんな話ができるサロンの開設。リーダーを複数決めて、横連携をしっかり組み立て、きびしくても本音で語れる場を作っていくこと。リーダーは分野を意識せず、他のステークホルダーとの調和を第一に取り組むことが大事。しきたりにとらわれずに本心をさらけ出せる度量を重視する。この会議の成果として、京都を第一会場としてのサロンを提供する(小学校校舎跡地)
- ・体制の中身を具体的に示した会報づくり。「伝統を現代 に」などのキャッチフレーズづくり
- 選別(対象の特化)。ビジネスとして整理する分野と保護、助成しなければならない分野を区別する(たとえば、歌舞伎と能のように)。オールジャバン体制が対象とすべきは前者であって、文化(工芸)全般とすべきではない(オールジャバン体制は往々にして同床異夢となりがち)。一方、保護、助成に相応しいもの、分野かどうかは、評価システムの試練を受けることになる
- ・大学だけでなく、小中高校の教育機関との連携。経済界と の連携し、経済界の研修と工芸文化を食い込む
- ・ ●つくり手、使い手 (未来の使い手) とつなぎ手のファシリテーターの養成、育成。 ②つくり手の情報。使い手、使い方に関する情報、つなぎ手の情報などの発信とその受け手のベース。これらによる情報のクリアリングハウスづくり。 ●関係者の思いを重点化、具体化していくための「つなぐシンポジウム | を開設
- ・「文化」としての情報発信。国内外に工芸の素晴らしさ、置かれている現状を文化として発信することで、「工芸」を広く知ってもらう取り組み。たとえば、「料理」とともに「器」や「道具」を発信し、認知度向上をはかるなどとともに「道具」を発信し、認知度向上をはかるなど
- ・工芸なんでもデータベース。工芸を支えるもの、人に関して手つかずなのが本日の話でよくわかった。作家のデータベースも進める一方で、その作家たちが効率的にいいものをつくり続けるためにも、材料、用具などの現状を洗い出し、保存や流通のための方策を講じていけるような
- ・工芸の情報発信のための協力。各分野をつなぎながら、国で展覧会を開いたり、ウェブを使ったりした作品、素材、人物紹介など工芸を浸透させる活動をする

十台とする

- ・現代を生きる工芸と伝統工芸の連携。それを担う場の構築。異業種、異分野との交流の場。共業、共働。アウトプット(国内、国外)
- 絶滅危機の素材について対応策が集まったので、具体的に一つでも解決していくための連携。「つくるフォーラム」による新しい形づくりで、つくり手との使い手のビジネスモデルになる可能性が見えてきたので、よい結果を生み、その情報を流し、同じような試みが広がるきっかけとする
- ・情報の取り扱いを一元化し、活用する仕組み。世間に周知する取り組み
- ・隣人を知る。多種多様な職種・業界の人が関わるこの分野。まずは、隣人を知ることから始めましょう。隣人が何をし、何を目指し、何に憂いでいるか知ることから、共有、相互理解、そして解決となればいい(100年くらいかかるかもしれないが)
- 一つのものの流れにたずさわる総合的な連携。天然材料がどんどん使われていく環境と育成。後継者育成のための新たな仕組み。支援のネットワーク
- 第1回会議、第1回材料、材質展、第1回世界連携に向けた議論
- でき上がったものと、使ってもらう人への連携、教育現場での使う人への教育。幼児から大人への過程でものを見る目、使う体験の場を増やすこと。1980年代はものが活発に動く時代でした。しかし2000年代に入って、それが急速に減少してきたように思います。今、日本文化を教える場が学校教育のなかでなくなっています。大人への教育現場として美術館、博物館が無料で入れるようにすべき
- ビジョンの共有。何をどのように残すのかについて。問題 点の共有をし、カテゴリー分けして、解決の方策を具体的 に練る。圧力団体となって政策提言できるような組織を つくる
- マスメディアに載せ、工芸の魅力を伝える。テレビ、冊子、 ネットなど。「工芸からスターを出して知ってもらう。も しかしたら面白いと思わせる。目を育み、眼力アップにつ

#### ながる

- ・マーケティング体制。つくり手、使い手、つなぎ手の全体を 俯瞰して、マーケティング課題を共有し、連携して進める。 物語を伝える仕組み、特に日本は伝えることが苦手。小学校 からデザイン教育を!
- 一般の方への発信、意見交換会(オールジャパン)
- ・アートフェアのような具体的な商談の仕組みと同時にフォーラムを開催することで、工芸に賃金が流れる仕組みづくりを検討したらいいと思う。たとえば、東京アートフェアのようなものを同時開催する。バーゼルのアートフェアのようなものと同時開催するということ
- ・海外への情報発信(それぞれの国、民族には文化、美術を持っている)と交流
- ・整理、まとめる。名簿の整理。問題点の整理。定期的な活動 報告書、会誌みたいなもの
- ・情報収集、分析期間の設立、法改正、マーケティングなど幅 広い分野の情報を集め、分析する部門、職人や周辺の人々と 共有できるような組織体制
- ・工芸作家とデザイナーのコラボレーション。デザイナーと 工芸作家とのコラボレーション。デザイナーは素材(材料)に 対する理解が稀薄。工芸作家は用(機能)のデザイン力が弱い。したがって、両者の弱いところを補塡しつついいものを 生産する
- ・全国、世界への情報発信。疲弊した業界に再度勇気を持って 取り組もうとする契機を提供。国が国家戦略として取り組 むことを表明するなど、これまでとの変化を印象づける情 報発信。今まで光の当たらなかった分野や専門家への顕賞
- ・つくる人、使う人、仲を取り持つ人の連携。定期的に顔を合わせる機会をつくる。生徒と工房、美術館との交流をする
- ・道具のつくり手と使い手の連携。新しいつくり手の強力と 連携
- ・希少素材・道具に関する情報一元化。実施は恒常的に上記の 素材、道具を確保する。「使う」のサイクルが実現できること を願うが、第一歩として現状の把握、物性の確認、対策の可 能性などの情報を集約してみたい。データベースをつくる。 若い世代の意見を聞く機会を持ちたい
- ・海外への発信。

  ・海外への発信。

  ・海外への発信。

  ・選外の人たちから評価してもらうことで、日本でも再評価されるという流れができる)。

  ②海外から工芸の作家を招いて、日本の工芸作家と交流してもらう(それぞれの国で話題になっていることについて意見交換)

16/03/29 14:25

### 京都提言

日本の工芸は世界に誇り得るものです。

この21世紀鷹峯フォーラムを機に、ここに参加した私たちは、工芸の魅力を支えるすべてのものが、危うい状態になっている現状を危惧し、打破していく行動をおこしてまいります。 ここに100年後に残る工芸のために、三つの提言をいたします。

一つ

100年後にもよき工芸品を生み出すためには、よいつかい手と鑑賞者の存在が必要です。この志に賛同いただける美術館・博物館、大学などの教育機関、研究機関とともに、特に若い人たちが、よいつかい手として、工芸の魅力に気づき、よい鑑賞者となってもらえるように、工芸にまつわる感性、物語、日々とうつかっていくのかを多くの人に伝えていける、「見分ける」体験・教育の機会を、全連携機関と増やすよう、心掛けてまいります。

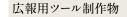
-- 2

京都は、これからも工芸の都として、つくり手が求める材料と道具、技術および技能、それらの情報が最も集まる拠点として、このフォーラムを機に各産地との連携をはかっていきます。100年後にも新たなつくり手が多く生まれるために、大切な道具と材料とわざ、その情報の確保に努めていきます。

一つ

私たちは、100年後に残る、工芸のために今後も、連携・協力して活動を続けていきます。この活動を盛り上げていくためには、多くの方々の理解と協力と、国の関係各省庁、地方公共団体、そして企業の支えが必要であり、さまざまな支援を求めて声をあげていきます。

次回のこの会合を、来年度に東京で開催する計画に賛意を表するとともに、日本はもちろん世界各国の方々にとっての大消費地である東京で、工芸の魅力を発信する機会となるよう協力していきます。





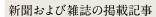
ガイドブック (サイズ: A5、64 ページ、オールカラー)



ポスター

パンフレット (サイズ: A3 変形、三つ折り)











京都新聞

新美術鸣評 HREN

新美術新聞(2015年11月21日)



工芸、未来へ 京から提言



京都新聞 (2015年12月7日)



朝日新聞京都版 (2015年11月28日)



染織新報(2015年12月16日)





美術の窓(2015年 12 月号)

「100年後に残る工芸のために」普及啓発事業 21世紀鷹峯フォーラム 京都 記録集

| 独立行政法人国立美術館 京都国立近代美術館

|「100年後に残る工芸のために」 普及啓発実行委員会

坂井編集企画事務所

大隅圭介、米原有二、野口卓海、小澤泰子、永澤浩子、鈴木晶子

松田行正十日向麻梨子

河合理佳

2016年3月30日

お問い合わせ | 「100年後に残る工芸のために」普及啓発実行委員会

京都国立近代美術館

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町26-1 Mail: soumu@ma7.momak.go.jp

オールジャパン工芸連携 京都/東京/金沢実行委員会 事務局:一般社団法人ザ・クリエイション・オブ・ジャパン 〒104-0061 東京都中央区銀座5-3-12 壱番館3階

TEL: 03-3573-3339 FAX: 03-3573-3315 Mai:l info@thecreationofjapan.or.jp

http://takagamine.jp

52

鷹峯報告書Light.indb 52-53 16/03/29 14:25

